

I
文化大革命下の文学者

一 文化大革命と文学者

一、文学者の文革理解

文学者は文化大革命（以下、文革と略称）の被害者であった。

その文学者が文革をどのように理解したかは、一九七八年十月、山西省文学芸術界連合会主席の馬烽が、日本の中国文学愛好者訪中団と会った際の談話に窺われる。

一九七八年といえば、日中平和友好条約が八月に締結され、鄧小平（トシヤオピェン）（当時副首相）が十月に来日している。七月一年一月からの米中国交樹立を控え、対外開放政策が歩み始めた時期である。中国国内でも、「右派分子」というレッテルをなくし、文革中に迫害されて死んだ文学者の名誉回復が始まった時期である。老舍（ラオシェ）、趙樹理（チヤオシュリー）、聞捷（ウエンジエ）などが次々と名誉回復され、追悼会や遺骨安置式などが行なわれた。明るく、ほっと息がつけるこうした自由な雰囲気は、一方に、「民主の壁」運動という言葉論の自由を求める動きを睨みつつ、十二月の中国共産党十一期三中全会での「四つの現代化」（農業、工業、国防、科学技術の現代化）の方針に集約されていくのである。

文革を生きぬいた中国の文学者が、やっと口を開いて語るようになったのが、七八年十月という時期である。

馬烽は次のように語っている。

「文革初期はまだよかった。私はじぶんの機関の文革指導組の責任者でした。みんな一緒に、党中央の「十六条」や毛主席の『講話』を学習し、討論しました。農村に入ってから、思想の面でも、生活の面でも変化があったと感じました。なぜならば、文革前の十数年間は、基本的には平和な環境の中で生活し働いてきたため、古いブルジョア思想、認識、特にソ連修正主義の影響が頭の中に残っていたからです。だから文革が始まると、みなは「熱い湯でアカを落とす」と言っていました。つまり、じぶんの思想上のアカを洗い流そうということです。みんな積極的に参加し、互いに大字報を書いて援助しあったのです。その時、私はじぶんに対する紅衛兵の批判も歓迎しました。その批判は正当なもので、私が誤りや欠点を改めるように、という発想でした。私たちの機関は、リュックを背負って太原を経由して北京へ徒歩でいく、本省や外地の紅衛兵を接待したこともあります。実権派とか、走資派とかの看板を掛けられて街中をひっぱり回されたりしたことや、武闘などは後の現象で、初期にはありませんでした」（『中国研究月報』三七四号・一九七九年四月より。訳文に一部手を加えた）

馬烽がここでいう「初期」が、いつごろを指しているのか正確にはわからない。党中央の「十六条」とは、六六年八月の中国共産党八期十一中全会（八月一日から十二日まで）で採択された「プロレタリア文化大革命に関する決定」のことである。地方（ここでは山西省太原市）から北京へ、紅衛兵が「大串連」（革命の経験交流）と称して出て行ったのは、六六年秋のことであるから、「後期」は、「大串連」した紅衛兵が太原へもどって来てからのことであ

ろう。

北京の紅衛兵は、市内へ出現した当初からかなり戦闘的であったが、党の八期十一中全会で、林彪が序列第二位を占め、劉少奇が二位から八位に転落してからは、批判の対象となった文学芸術関係者への暴力行為をいつそうエスカレートさせたようだ。だから、早くも八月三十一日の紅衛兵五〇万人との第二回の会見集会で、「必ず文闘を用い、武闘を用いるな」と強調されている。九月五日には、『人民日報』社説が「文闘を用い、武闘を用いるな」と呼びかけている。以後もたびたび呼びかけが続くが、いつこうに武闘は収まらず、六七年に奪権闘争が開始されると、紅衛兵は内ゲバと武闘にあけくると言っても過言ではなくなる。

馬烽の話によれば、林彪が、今回の文革は今まで革命をやってきた者を革命するもので、人を殴ることは奨励しないが、たとえ悪い奴がいい奴を殴ったとしても、殴られた人間にとっては試練になるといふようなことを言い出してから、「批判」が正常の批判ではなくなつたという。馬烽本人も看板を掛けられて街をひき回されたり、つるしあげられたりしたという。そして、江青（毛沢東夫人）が文革前の十七年間の文芸の成果を全否定したので、自分分は小さい時から革命に参加してきたのに、「黒い作家」とか、「修正主義分子」という悪人にさせられ不満でならなかつたという。そこで、弱気になつてもうやりたくないと思ひ、自分だけでなく息子や孫までも、書く仕事はやらせまいと考えたといつてゐる。

馬烽自身が後で知つたことだが、こういった考えは他の作家や俳優など文芸に携わる人びとの多くと同じであつた。

馬烽が文革を初期と後期に分け、初期はまだよかつたとし、林彪や江青の介入を匂わせて後期を否定するのは、このことばが「四人組」（王洪文・党副主席、張春橋・中央政治局常務委員・副総理、江青・政治局委員、姚文元・政治

局委員の四人を逮捕した後の七八年十月に語られているからであろう。念のために言えば、江青は文革の初期から文芸面において指導的な働きをしている。

江青は、六六年二月に、毛沢東の手が再三加わったという、「林彪同志が江青同志に委託して招集した部隊文芸工作座談会の紀要」（以下、「紀要」と略称）を作りあげ、五月には、中央文化革命小組の副組長になっている。文革前の文芸の成果を否定したのは、この「紀要」においてである。「紀要」そのものの公表は六七年五月になるが、『解放軍報』が六六年四月一日の社説で「紀要」の内容をほぼそのまま伝え、それを『人民日報』が翌日転載しているから、人びとは早くから「紀要」とは知らずに、その内容を知っていたはずである。なお、この社説は『文芸報』六六年第五期にも転載されている。

馬烽の発言は、発言の時期や相手が外国人であることなどを考慮しても、自信にみちている。党中央の文書を学習し、農村へ下放し（すなわち肉体労働に従事する）、古いブルジョア思想などを洗い流そうと互いに批判しあうという方法にも、発想にも何の誤りもなかったという自信である。延安の整風運動以来、自分たち党員が何度もやってきた思想改造の方法だからである。

馬烽は一九二二年生まれ、十六歳で党員となり、十八歳の時、延安の魯迅芸術学院附設の部隊芸術幹部訓練班に入った。一九四二年冬、馬烽は山西省にもどり、そこで整風運動に参加した。以後、農民の革新的な側面を明るく描く作品を発表して、独自の作風を形成した。

だから、文革が始まった当初は、文革をこれまでの整風運動と同じようにとらえ、それに積極的に参加したと言っている。批判と自己批判によって、「思想上のアカを洗い流すこと、すなわち思想改造をめざしたのである。

ところが今回はこれまでと違い、自分たちが打倒される対象となった。思想改造のはずがそうならず、実際には

身体的虐待と精神的屈辱を受けることになった。これは、「正常な批判」ではないのである。これは、林彪、「四人組」とそれにだまされた紅衛兵によってもたらされた。林彪、「四人組」が悪いのである。

馬烽のようなこういう文革のとらえ方は、ひとり馬烽だけでなく一般的なものであった。一方に、紅衛兵らによって迫害され殺されてしまった文学者がいることによって、この考え方はいっそう強固なものとなった。

文革で「批判」された文学上の問題はいくつかあるが、まず、大連会議での「中間人物を描け」論とその人脈、また「叛徒」（裏切り者）などの問題をみてみたい。

二、「中間人物を描け」論批判

「中間人物を描け」論（以下、「中間人物」論と略称）とは、一九六二年八月二日から一六日まで大連で開かれた、

「農村を題材とする短編小説創作座談会」（以下、大連会議と略称）で、邵荃麟シャオチンリンが主張したといわれるものである。

邵荃麟の発言は文章化されなかったが、今日では『邵荃麟評論選集』上下（人民文学出版社、一九八一年）に記録稿があるので、それで知ることができる。

選集所収の発言によると、邵荃麟が今こそ農村を題材とした短編小説を書く時期である、と強く感じていたことがよくわかる。作家は思い切って農村の題材を人民内部の矛盾として描いて、農民を教育すべきだと邵荃麟は言う。人民内部の矛盾は、先進人物や英雄人物よりも、中間状態にいる人物に集中して現れる（これが、「中間人物」論といわれるもの）。その矛盾を粉飾することなく、現実生活に一步突き進んでしつかりと認識し、分析し、理解すべきである。その方法はリアリズムであり、リアリズムの深化の上に強大な革命的ロマンチズムを生み出すことがで

きる（これが、「リアリズム深化」論といわれるもの）。

邵荃麟が、今こそ書くべき時期だと認識した背景には、六二年一月末に開かれた中央拡大工作会議（七千人大会」といわれる）後の雰囲気がある。この会議で毛沢東は、いわゆる大躍進政策に一部ゆきすぎがあつたことを認める自己批判をした。

大躍進時期、新聞は連日のように輝かしい成果を報道した。それによれば、収穫の著しい増加があつたし、著しい成果をあげた先進人物や英雄人物が輩出した。こういう人物を扱ったルポルタージュや小説が、文芸面を占領することになった。

だが実は、大躍進政策後の農村には、誇張風（収穫量などを誇張して報告する）や共産風（共産主義にもうすぐなる、あるいはもう共産主義になったとして、収益を一気に分配してしまう）などといった、農村の現実を無視する幹部（党の活動家）の作風が現われていた。口先で革命的、理想主義的なことを言い、現実には少しも働かず、役に立たない幹部が増えた。その上、そういう幹部の方が出世した。

こういう農村の実態を小説の題材としてとりあげる時期になったと判断し、先進人物や英雄人物でもない中間の人物（つまり、普通の人物）をとりあげて作品を書くべきだとしたのが、大連会議である。こういうことを理論面で位置づけ、作家たちを激励したのが邵荃麟ということになる。

ところが同じ年の九月、大連会議からひと月ほど後の中共八期十中全会では、毛沢東は「階級、情勢、矛盾と党内結問題に関して」と題する講話をし、社会主義社会にもなお階級と階級矛盾そして階級闘争が存在し、社会主義と資本主義の二つの道の闘争が存在することを指摘し、毎年、毎月、毎日、階級闘争を語らねばならぬと提起した。いわゆる毛沢東の反撃が、始まったのである。

毛沢東の問題提起は、文芸面では一九六四年六月二七日の「文学・芸術に関する指示」となつて具体化した。

これらの協会とそれが掌握している刊行物の大多数（少数のいくつかはよいことであるが）は、この十五年来、基本的な（すべての人ではない）党の政策を実行せず、官僚や旦那様になり、労働者・農民・兵士に近づかず、社会主義の革命と建設を反映しようとしなかった。ここ数年は、修正主義すれすれにまで転落した。もし真剣に改造しなければ、勢いのおもむくところ、将来のいつかは、ハンガリーのペトフィ・クラブのような団体になるだろう（一九六七年五月二八日『人民日報』に公表）。

ここにいう「ペトフィ・クラブ」とは、ハンガリーの党青年組織の討論クラブの名称で、ここで党指導部に対する批判がなされた。一九五六年のハンガリー事件の発端は、このクラブでの党批判であった。その後中国では、この名称は修正主義の理論を談合する会議という意味で使用される。なおペトフィとは、十九世紀のハンガリーの詩人の名前である。

この指示では、「ここ数年は」と強調されているが、それは大連会議の開催（六二年八月）を十分意識してのことであろう。したがって、「修正主義すれすれにまで転落した」内容として、「社会主義の革命と建設を反映しようとしなかった」というならば、英雄人物ではなく、農村の中間人物をとりあげて作品化するべきだとする「中間人物」論が、批判の対象となるのは当然のことであろう。まして邵荃麟は、「これらの協会」と名指しされた中国作家協会の副主席で、その党組書記であったのだから。

毛沢東の指示を受け入れた形で、一九六四年九月『文芸報』第八、九期合併号が、最初に「中間人物」論批判を

行なった。批判文は、編集部名による「『中間人物を描け』はブルジョア階級の文学主張である」と、「『中間人物を描け』に関する資料」の二つである。

この批判論文では、邵荃麟は大連会議で「中間人物」論と「リアリズム深化」論（いわゆる「八つの黒い理論」のうちの一つ）を主張したといい、それは、英雄人物を創造せよという任務に対抗し、革命的リアリズムと革命的ロマンチズムを結合させる社会主義文芸路線に反対したものだという。

次に、六六年四月『文芸報』第四期が再度「中間人物」論批判を行なった。

続いて、六六年五月『文芸報』第五期も批判した。

最後に、六六年七月三十日『人民日報』が批判している。この『人民日報』の批判によると、最初の六四年九月の批判も次の六六年四月の批判も、どちらもみせかけの偽りの批判であったという。批判者によれば、次のようである。

大連会議の首謀者は周揚^{チョウヤン}であつて、周揚は自分が邵荃麟の背後から指示したことを隠すため、会議の内容を嚴重に隠して公表させなかつた。

周揚は、一九〇八年に生まれ、二七年に入党している。三〇年代は上海で左翼理論家として活躍した。一九三七年限安へ行き、魯迅芸術学院院長となつた。解放後は、全国文学芸術界連合会副主席、中央文化部副部长、中国作家協会副主席、中共中央宣传部副部长などの要職について、毛沢東の文芸理論を最も忠実に応用する理論家であり、組織者であつた。周揚は当時、中央宣传部副部长として作家協会を指導し監督する地位にあつた。

『人民日報』の批判を続けて読むと、大連会議は組織的計画的に行われた「ペトフィ・クラブ」のような集会で、反党反社会主義反毛沢東思想の意見を討論するものだったということになる。ところが、二年後の六四年六月二七

日に毛沢東の「文学・芸術に関する指示」が出たため、大連会議開催の責任を邵荃麟ひとり押しつけ、黒い会議（反党的という意味で「黒い」と形容する。つまり反党的な会議）ではなく、「中間人物」論を吹聴するだけの純学問的な会議であったかのようにみせる、偽りの批判（六四年九月の批判）をして、他者からの批判をそらそうとしたのだという。この策略は一時功を奏した。

一年あまり後の六五年十一月に、姚文元ヤウウェンユェンの「新編歴史劇『海瑞、官をやめる』を評す」という論文が発表され、歴史劇の作者呉晗ウーハンが批判され出すと、周揚らはかつて成功した「中間人物」論批判を再び持ち出して、姚文元論文の批判目標を拡散させたのだ（六六年四月の批判）という。

『人民日報』の批判は、六六年五月の『文芸報』第五期（五月二〇日刊）については、何もふれていない。たぶん、前月の第四期と同種の批判とみなしたのであろう。

『文芸報』第五期は、不思議な編集がなされている。革命的バレエ劇「白毛女」のスナップ写真とスケッチが載っている頁を挿んで、前に誌上討論の形式による、労働者・農民・兵士（労働者・農民・兵士）の批判十一篇（今、これをAとする）、後に胡万春フワンチュンや浩然ハオアンなどの文学工作者の批判六篇（Bとする）があるが、前者（A）にはすべて邵荃麟同志と「同志」がついているのに、後者にはついていない。後者（B）にある「編者の按語」によれば、批判文六篇はすべて、同誌同期に転載されている『解放軍報』四月十八日の社説「毛沢東思想の偉大な赤旗を高く掲げて、社会主義の文化大革命に積極的に参加しよう」を学習して書かれたのだという。

したがって、文学工作者の批判文（B）のほとんどが、『解放軍報』社説のなかの次の文章を引用する。

建国以来十数年、文芸界には毛沢東思想と対立する反党反社会主義の一本の黒い糸が存在している。この黒

い糸とは、ブルジョア階級の文芸思想、現代修正主義の文芸思想と、いわゆる三〇年代の文芸とが結合したものである。

この社説の文章は、実は江青の「紀要」をほとんどそのまま使用したものである。社説も「紀要」もこの文章にすぐ続けて、次のように述べている。

「真実を描け」論、「リアリズム広い道」論、「リアリズム深化」論、「題材決定」反対論、「中間人物」論、「硝煙臭」反対論、「時代精神融合」論などが、彼らの代表的な論点である。これらの論点は、ほとんど毛主席が『延安の文学・芸術座談会における講話』の中で、とうの昔に批判したものであった。また映画界では、いわゆる「離典背道」論、つまりマルクス・レーニン主義、毛沢東思想の経典から離れ、人民革命戦争の道に背く主張を持ち出すものもいた。

ここに列举されている論八つが、いわゆる「八つの黒い理論」である。そこで、文学工作者の批判(B)は、建国以来の数々の批判運動と「中間人物」論との類似を指摘し、「中間人物」論を否定しようとする。ある批判文では、邵荃麟が言ったという「中間は大きく、両端は小さい」は、胡風の「中国社会の性格内容」は、「両端が細く尖り、中間が大きいし、両端が硬く、中間が軟らかい」ということばと似ていると指摘し、「中間人物」論が胡風の理論の焼き直しであると批判する。こういう批判(B)は邵荃麟の理論を批判するだけでなく、たとえば胡風が文芸界から否定されたように、邵荃麟自身の否定にもつながりうる批判である。

これに対して、労農兵の批判(A)は、たとえば「邵荃麟同志の『中間人物を描け』という主張は、反動的な文学主張であるばかりでなく、反動的な政治主張である」と言うように威勢はいいが、あまり中身の無い抽象的な言いまわしに終始している。誌上討論会というものは、主催者(編集部が担当)がテーマを決め、方向づけを定め、そのための資料を提供するものであるから、労農兵の批判(A)に具体性がないのも、それは彼らが文芸と関係がないから具体的な文芸のことに話が及ばないということではなく、明らかに主催者の意向によるものと考えられる。先に述べたように「同志」をつけていることにも、それは明白であろう。

すなわち、ここには、邵荃麟は同志であるが、その主張がよくない。だから、その誤った考え方だけを批判しようとするもの(A)と、江青の「紀要」の考え方に従って、建国以来の「黒い糸」と邵荃麟を結びつけて全否定しようとするもの(B)との二つの意向がみられるのである。

『文芸報』第五期は、周揚、邵荃麟などの意向がわずかに残った編集だった。

それはまた、邵荃麟の後ろに周揚が控えており、その周揚の後ろに誰かが控えていることが、まだ解明されていない段階のことであった。六六年七月三〇日に『人民日報』の批判が発表されたのは、邵荃麟の後ろに周揚が控えていることが何らかの形で明白になった段階だといえよう。

しかし、こうなると、人脈の問題が前面に出て、政策から路線まですべて人脈によって判断されてしまう。

そもそも「黒い糸」とか「黒いグループの一味」といった言い方が人脈を問題にしていたのだから、当然といえば当然であるが、このように周揚や邵荃麟といった文芸界の指導者となりがあつたかどうかといったことで黒い一味とされるなら、作家協会は黒い一味の巣窟ということになる。

こうして、作家協会は破壊され、『文芸報』も『人民文学』などと同じく、第六期以降停刊になったのであつた。

三、邵荃麟夫妻の悲劇

ここで、邵荃麟個人についてみてみよう。

邵荃麟は、一九〇六年浙江省慈溪県の商家に生まれた。二〇年に上海に出、二六年に入党した。二八年に中共浙江省委員会常務委員になり周恩来チョウエンライと知りあつた。三四年逮捕投獄されたが、出獄後、中共東南局の文化面を担当し、抗日戦争期には桂林、重慶で、国共内戦期には武漢、香港などで文学者を組織するかたわら雑誌を主編した。この頃、胡風を批判する文章を書いている。五三年に中国作家協会の党組書記となり、その機関誌『人民文学』の主編をつとめた。

たとえば茅盾マオトウが、第二回作家会議の報告は邵荃麟の細かい修正を経たとか、五五年の胡風批判の時も自分の原稿を邵荃麟に見てもらつて書き直したと言つているように、邵荃麟は文革までの中国文学界において、毛沢東の文芸理論を適用する際の、実際面での指導者であつた。

さて、邵荃麟の文革中の処遇については、娘小琴シヤオインの追悼文より引用してみることにしよう。

文化大革命が始まるや、私の父邵荃麟と母葛琴ゲインは、二人とも「黒いグループの一味」とみなされ引きずり出された。初め、私は思想面で大きな圧迫を受け、とても顔をあげて生活できないと思つた。私は、父や母を恨みもし、運が悪いのだと思ひもした。

家にもどつて父や母を見ると涙がとどめようもなく流れた。父はこんな私を軟弱だと批判し、「これしきのこ

とさえ耐えられないとは、鍛錬が足りぬ」と言った。このことばで逆に、連日批判や闘争を受けている父や母のことに考えをめぐらせた。二人はどんなに大きな圧力を受けていることか、またその心はどんなに沈んでいることか、私は涙など流すべきではないのだ、と。

ところが、父や母が考えていることは私とまったく違った。母は、自分たち十数人の指導幹部がどんなふう麻布をかぶり喪服を着せられ、紙で貼りあわせた棺桶をかつがされて街を歩き、「黒いグループの歌」を歌わされたかを語り聞かせた。その歌は、「私は牛鬼蛇神です。私には罪があります。私は罪人です…」というもので、母は語りながら実演してみせ、私たちを大笑いさせたのであった。母は、まるで子供たちの悪戯を語り聞かせているかのように平気な風であった。私はこの革命的樂觀主義の精神に染まり、いつとき、内心の恐れ、緊張、憂愁などをすべて吹き飛ばしてしまった。父母は私に、恨みを抱かず正確に大衆の批判に対処し、党を信じねばならぬことをわからせたのであった。

この日から、私にはひとつの信念が生まれた。これは革命幹部に対する一つの試練なのであり、この試練において革命者が失うものは、ただ自分の欠点や誤りおよびブルジョア階級の世界観や修正主義の思想による影響だけであり、獲得するのはマルクス・レーニン主義なのだ。

私は天真爛漫に信じていた。歴史は篡奪できないものだ。純粹の金なら火による鍛錬を恐れやしない、と。

私は毎日、新聞を読み社説を読んだ。そして、すべてのことは正常にもどるであろうし、時間もそんなに長くはかかるまいと思った。ところがどうであろう。半年が過ぎ、一年が過ぎ去った…情況はまったく私が想像したものではなく、また新聞が報道しているようなものでもなかった。

小琴によれば、邵荃麟はどこかへ連れ去られ、六八年二月、母親も家へもどらなくなった。七〇年十月までまるで消息がなくなった。そこで弟と彼のフィアンセが「五・七」幹部学校へ実際に乗り込んでみた。広い場所で勝手がわからぬ上、誰も相手にしてくれなかった。諦めていたところ、まったくの偶然から母の葛琴がいることがわかり、再三願ひ出て、やっと十五分というわずかな面会が許された。弟がさっそく母に体の具合を聞いた時、母はなんと、指定された『毛主席語録』の一段を暗誦し、それからやっと「ここ数年、お前たちはどこにいたの」と低くしわがれた声で尋ねるのであった。

母親である葛琴は、かつて自分の作品集『総退却』の序文を魯迅ルイシユンに書いてもらったことのある、古くからの女流作家である。一九〇七年生まれで、江蘇省宜興の人。娘小琴のほか二人の男子を生んでいる。

七二年の三月、母危篤の知らせを受けて病院に駆けつけた小琴に、一群の者が行く手をはばみ数個条の規則を申しわたす。そのうちの一条は、泣くことを許さないというものであった。

葛琴はもう目が見えなくなっていたが、小琴と会ってからは奇跡的に健康を回復した。すると特捜班の者は、半身不随で言葉が話せないままの状態で葛琴を退院させた。しかし、家に帰ることを許さず、倉庫に使われていた一間きりの小屋に住ませたのであった。

ある日、ストーブに料理をかけたまま看守が出て行ってしまった。ストーブの料理が焦げついてきた。葛琴はそれをどかそうと不自由な体で近づき、ストーブに倒れかかり、顔の右半分が一メートルほどの高さのストーブにくつき貼りついてしまった。動かすことのできる方の手でストーブを押しやって、やっと体を離すことができた。特捜班の者は、大やけどをした葛琴を病院に連れて行かないばかりか、「ストーブの上ウエイトが肉でなく窩頭ワウトウ（トウモロコシの粉などで作った蒸しパン）なら、近づかなかつたらうに。くいしん坊め」と嘲笑した。

小琴は、母葛琴について書いている。

一九二六年に入党し、党中央の秘密連絡員になり、生命の危険を冒して中央の文書を伝達した。上海での第三次労働者武装蜂起の際には、夏之栩^{シヤージュン}、曹桓馥^{ツァオホアンフ}の二人の女同志とともに「三劍客」と誉められたものだ。母は、死線をかいくぐって革命のために奮闘してきたが、数十年後の革命隊列の中で、「四人組」からこのような非人間的な待遇を受けることになるとは、万に一つも思わなかった。

母の、火傷で黄色い水が流れ出ている顔半分、腫れあがつて目も口もあけることのできない様子、ガーゼをぐるぐる巻きにした手などを見たら、党の後継者と言わぬまでも、また実の娘と言わぬまでも、たとえ一面識もない人でも、いささかなりと良心がありさえすれば、恐らく忍び難いではなからうか。

しかし私は、敢えて母の前で涙を流さなかった。母はもうこれ以上の刺激に耐えられなかった。私はただ涙をこらえて、一口一口と母に白湯を飲ませたのだった。

一方、父親の邵荃麟については、杳として行くえが知れぬまま、七一年六月、父がすでに死んだという簡単な通知が幹部学校からあって、後事を処理してはならないと命令される。つまり、葬式もしてはいけないということであった。もつとも遺骨一つないのであったが。そして七二年春、一台のマイクロバスが来てダンボールの箱を一つ置いていった。

中には、ボロボロの蒲団と衣類、それに腕時計と何冊かの本があったただけであった。蒲団とズボンは糞尿にまみれていた。拙い手でつぎもあててあった。コップの口には黒いネチネチしたものがこびりついていた。後でわかっ

たことだが、それはトチの実を粉にして溶かしたものであった。

毛主席の著作も遺物の中にあつた。娘小琴は思わずそれを手にとり、父の学習の跡をたどる。そして、かつて「中間人物」論批判の時、その反論として邵荃麟が読み聞かせてくれた一段を探しあてる。

「：人民大衆にたいし：われわれは当然称賛すべきである。人民にも欠点はある。プロレタリア階級のなかではまだ多くのものが小ブルジョア思想をもっており、農民と都市小ブルジョア階級はおくれた思想をもつていて、それらがかれらの闘争のなかでの負担になっている。われわれは、かれらが大きく前進できるように、長期にわたつて辛抱よく教育し、かれらが肩の重荷をなげすて、自分の欠点やあやまりとたたかうのをたすけるべきである。」

「われわれの文学・芸術はかれらのこの改造の過程をえがくべきである」（以上、毛沢東「延安の文学・芸術座談会における講話」より。訳文は、外文出版社『毛沢東選集』第三巻によつた）

小琴たち子供三人の調べによると、邵荃麟は、一九六七年十二月二五日から翌六八年一月二五日までの一か月間に、三十一回の訊問を受けたという。早くから肺結核を患つて体の弱かつた邵荃麟は、七一年六月一〇日に死んでいる。死の様子についてはわからないが、一時期、ホワンチンユイ黄秋耘が一緒であつた。彼は次のように書いている。

文化大革命の初期、われわれは厳しい歳月の一時期を一緒にすごした。一九六七年秋、ずいぶん長期にわたつて、われわれ二人は小さな一間の部屋に押し込まれていた。彼は、毎晩「アミノフィリン」を注射しない

と咳が鎮まらず、本人も眠れないし、ひとの眠りも妨げた。それほど重い肺気腫を彼はわずらっていた。わたしはいささか医療技術がわかる。それでわれわれは一緒にされ、彼に「アミノフィリン」を注射することとなった。ある日の、もう真夜中のこと……彼は急に氷のように冷たい二つの手でわたしの左手をぎゅゅとつかみ、とぎれとぎれに、こう言った。

「秋耘よ。わたしたちは、ともかく長いこと一緒に仕事してきた。どうか、わたしのために考えてみてくれ。わたしが革命に参加してから何十年、何か、党に対してすまないことをしたことがあったらどうか」

彼は、ひとことしゃべっては息をつきつき、「ここ数年来、多くのことがわからなくなった。でも、わたしは……信ずるよ……党を。信ずる……大衆を」

まもなく、われわれはまた離れ離れになって、顔をあわせても話をするのが許されなくなった。一九六九年秋のある日、彼は突如として連れ去られた。ひそかに投獄されたということであった。これ以後、音信は渺としてなく、生死もわからなくなった。

一九六三年四月のある会議で、邵荃麟は張春橋（ヤンチュンキョウ）や姚文元らとまっこうから対立したという。張春橋らが、「十三年を書け（すなわち、建国後のみを題材とせよ）」と提起したのに対して、邵荃麟は、周恩来の「十三年は書かねばならぬが、百八年（アヘン戦争以後）も書かねばならぬ」といった指示にもとづいて題材を制限することに反対した。このことが父を死地に置くきっかけになった、と子供たちは推測している。

これまで見てきたように、邵荃麟・葛琴夫妻に対する批判の異常な残酷さからして、思想批判や思想改造というよりも、路線闘争や権力闘争の様相が濃い。したがって、邵荃麟の子供たちの推測は当たっている。

また、一九三四年に逮捕投獄されていることから、投獄されながら獄中で自殺もせず、銃殺もされず出獄したのは、「叛徒」だったからだといじつけられたのであろう。

批判対象者の過去が潔白であるかどうかは整党の重要項目であり、厳しい検査がある。延安の整風運動以来の伝統といつてよい。文革中も、一九六七年から「叛徒」を捕え摘発するようになり、文化革命小組が出した六九年の「七・二三布告」以後、階級の隊列を整理する（「清理階級隊伍」）こととなった。邵荃麟や葛琴がどこかへ拉致されたり、投獄されたりした時期は、この運動にみあっている。

しかし、延安時代ならまだしも、解放後十数年もたって、三十年もの昔のことをどのようなやり方で判断するのだろうか。確かに、特捜班の者はかなり遠方にまで出かけ、ささいなことまで調査した。しかし、どこまで確認したかとなると不安が残る。というのも、事実調査というものは、対象や事項に対して好意ある熱意と関心が必要だからである。

先に引用した黄秋耘は、党に対して何かすまぬことをわたしはしただろうかと邵荃麟から訊かれた時、次のように答えたと言っている。

一九四七年以来、われわれはほとんど一緒にすごしてきたね。わたしの考えだけどね、われわれはひよっとすると何やかやと誤りを犯してきたかもしれない。だけど、意識的に何か陰謀詭計をはかったとか、反党反社主義の活動をしたなどということは、わたしはしなかったし、あなたもするはずがない。これは堅く信ずるよ。奴らはあなたが「反革命」だとか「叛徒」だとか言うが、かりにもしそうだとしたら、それなら、わたしだとかあなたの指導のもとで地下工作をしたほかの同志は、とつくに敵に売り渡されているだろう。どうして

安穩とつつがなく全国解放まで生きていられたらう。きっといつか、組織がこの問題をはつきりさせるにちがいない。わたしはそう思うよ。

このことばは、当時の情況からして精一杯の慰めであつたらう。

理論に対する批判が、このように個人の肉体の損傷に至るのは、痛ましい。そして、やはり正常ではないと言わざるをえない。

四、主流の作家趙樹理批判

文革の衝撃を最も悲劇的に受けたのは趙樹理^{チョウジュリ}であろう。

なぜなら、中華人民共和国成立以来、文学の主流は人民文学といわれるもので、その実態を形成していたのが趙樹理の文学だったからである。

その趙樹理が文革中に受けた虐待を考えると、文革と文学者という問題があらためて胸に迫ってくる。

毛沢東の文芸理論を最も忠実に応用した周揚は、趙樹理こそ農民の心がわかり、農民の心が描ける作家であると評価し、一九四七年に「農民作家」という称号を贈っている。また五六年には趙樹理を、「当代の語言芸術大師」と評価した。茅盾、老舍、巴金^{パァジン}などと併称されるようになったのである。

しかし、趙樹理が順風満帆に歩みを進めてきたのでないこと、これも事実である。

一九五八年は大躍進の年であった。趙樹理が、ちょうど朝鮮民主主義人民共和国を訪問している時、『人民日報』

が、山西省でもさかんに「スプートニク」（ソ連が打ち上げた人類初の人工衛星。転じて人類初の壮挙を言う）を打ち上げていることを報じていた。曰く、夏の収穫が過去の二倍になった。曰く、総生産量が、五六年の三割増になった。曰く、鉄鋼生産が二万四千七百九十一トンで、全国一位の広西鹿寨県を追い抜いた、等々。

十二月、趙樹理が故郷の、山西省沁水県にもどってみると、現実とは想像していたのとあまりにもかけ離れていた。でたらめな収穫高の数字。予備や備蓄のことも考えない行き当たりばったりの予算。共産主義生活を始めるための強制的でいっしょくたの食堂。鋤や犁それに鍋などの良い鉄器を爐に放り込んで作つたくず鉄の山、など。現実無視の高い指標、でたらめな指導、あと二年と八十日で共産主義になるという非現実的な考え、すべてを均一にすれば良いとする平均主義など、いちいち数えあげることのできない矛盾の中で、さらに県書記は、大衆を動員して、「スプートニク」を打ち上げさせようとする。

毎日六畝（一畝は六・七アル）分のトウモロコシを手入れしろ、一畝につき一五〇担（一担は五〇キログラム）の肥料をいれろ、一畝につき二二〇斤（一斤は〇・五キログラム）の種をまけ、と。趙樹理は、それがいかにでたらめな数字であるかを、ひとつひとつ計算をしてみせて反論する。県の書記は、大衆の面前で恥をかかされたと、テールをたたいて、趙樹理のことを大躍進に反対する落伍分子だと怒鳴る。しかし趙樹理は退かない。われわれは工作しているのだ、上部へ納めるためばかりでなく、人民に責任を負っているのだ、と。

こうなると、互いに「ほら吹き」「右傾分子」「嘘つき」「障害物」といった罵詈雑言の投げ合いになるが、大会そのものは、やはり県書記の提案する高指標の生産計画が通過してしまう。

趙樹理と県書記との衝突場面がしばしば見られるようになる。さらに上級の地区委員とも、趙樹理はぶつかる。趙樹理のこの態度は、上級からの反感を招いたばかりでなく、実地の農民からも煙たがられることとなった。

趙樹理は、組織上しかるべき地位については（当時、沁水と陽城とが合併したので、陽城県の書記処書記であった）、私には自分の意見を提出する権利がある。もし実際の状況を顧慮せずでたらめな指導をとるなら、それでどうして共産党員といえるか、それで人民の委託に応えることができるかといえるのかと言う。それに対して、彼に好意を持つある指導者はこう言う。君が言うような情況はないわけではないが、それは暫時の局部的なもので、ごく一部の落伍した大衆の思想表現なのだ。萌芽状態にある共産主義の新生事物を發展的に見ていかななくてはいけない、と。

趙樹理は、一九五九年八月二〇日、「人民公社がどのように農業生産を指導すべきかについての私見」を書いて、手紙とともに中国共産党の理論誌である『紅旗』の編集部宛てに郵送した。これは、一万字余りの長い理論的文章だそうだが、今は一部分を抜き書きしたものしか残っていない。

当時、江西省廬山で党中央の会議が行われ（廬山会議といわれる）、彭徳懐ペンデクワイが大躍進政策を批判し、逆に処分された。趙樹理の行為はこれと軌を一にするものとされた。彭徳懐が提出した意見書と趙樹理の文章とが同じで、ともに大躍進政策をほしいままに攻撃し資本主義の農業を復活させようとするものとみなされたのである。こうして趙樹理は、五九年十一月下旬から三カ月にわたって批判された。

右のような経緯があつて、六二年八月の大連会議が開かれたのである。会議には、八省十六人の作家、評論家が参加し、何を発言してもかまわない無礼講とされた。茅盾、邵荃麟、侯金鏡ホウジンキョウなどの主催者側のほか、趙樹理以外には、康濯カンジュク、西戎セイジウ、周立波チュウリッパといった作家が参加している。

趙樹理は、農村の長期性、複雑性、艱難性に対して深い認識をもっていたと、この会議で称賛されている。このことは、五九年の批判に対する名誉回復の意味を持っていた。地道な現実直視の観点が評価されたのであるから、

さすがに彼も興奮気味で、それは今残っている五回の発言録によって窺い知ることができる。

しかし、それだからこそ、「中間人物」論の代表的人物にされたし、文革が始まると、周揚、邵荃麟たちの文革路線を忠実に守り実行した代表として、激しく批判されることとなった。

趙樹理同志は、いつも深夜、目隠しされてベッドから引き出され、こちでやつつけられ、あちでつるしあげられました。太原から長治へ、長治から晋城へ、町から村へと、つるしあげに引っぱりまわされました。

彼は頭に高い帽子をかぶせられ、首に何十斤もの重さの鉄の看板をぶらさげられました。そうして、テーブルを三つ重ねた高い台の上に立たされ、そのテーブルの上でひざまずかされたり、立ち上がらせられたりし、その立ち上がった瞬間、凶悪なごろつきどもが背後からドンと突いたのでした。このひと突きは…

趙樹理同志は、三つ重ねたテーブルから突き落とされ人事不省になりました。死出の旅路から再び魂を呼びもどされた時、腰骨は砕け、肋骨も折れ、その折れた骨が肺を貫通していたのでした。奴ら悪党どもは、氣息奄々たるこの人間をまたしても太原湖滨会堂へ引っぱり出して、一万人批判大会を開いたので。四日ならずして、趙樹理同志は無実の罪を負ったまま人間界を去りました…

また、次のように述べる追悼文もある。

趙樹理同志は、一九六六年、「文芸の黒い糸」の「黒い唱導兵」とされ、多くの侮辱と虐待を受けるはめになった。林彪・四人組にくっついて浮かび上がったこの世のダニどもが、ある時、金を強要したことがあった。趙

さんにはお金がなかった。彼は生涯、生活は質素で労働人民の本分をいささかも失わず、原稿料も、ほとんど故郷の貧農・下層中農や人民公社、生産大隊などが家畜や農業機械を購入するのにあてていた。このダニども数人は、金がないと知るとたちまち凶暴性を発揮し、匕首を取り出してテーブルの上に突き立てた。趙さんは言った。「テーブルを傷つけなさんな。これは国家のものなんだよ」

ダニどもはいっそう狂ったように暴れ、趙樹理を激しく殴りつけ、とうとう肋骨を折ってしまった。

ここにいう「ダニども」とは、紅衛兵や造反派のことである。ここで注目したいのは、テーブルも国家財産であると言った、趙樹理の矜持である。この場面でそのようなことを言うのがどんなに場違いで、滑稽であろうとも、自立している男の自主的な発言だと感じざるをえない。

趙樹理は、「悪臭紛々としたブルジョア階級の反動作家であり、劉少奇の反革命修正主義路線を推し進め、資本主義世論を作成する急先鋒であったし、罪悪が山ほどたまった反革命修正主義分子である」とされたが、彼が異常な批判にあい、虐殺された理由の大きな部分は、やはり「叛徒」の汚名が追加された（一九六八年ごろ）ことであろう。

「叛徒」の問題が出されたのは、一九三六年の偽装転向の問題があったからである。

当時、中共中央北方局書記であった劉少奇は、抗日運動の共産党の勢力を回復するため獄中の党員に指令を出し、転向宣言に署名して出獄するようにさせた。薄一波^{ポイーボ}、安子文^{アンツーウェン}、劉瀾涛^{リュエランタオ}、楊献珍^{ヤンシェンチェン}らがそうである。

一方、この転向指令に獄中で反対し、抗日戦争期の大部分を獄中ですごしたという劉格平^{リュエグピン}が、一九六七年二月一八日、山西省で革命委員会を成立させ、山西省副省長という名目のみの地位から、一躍山西省革命委员会主任に

おさまった。山西省の奪権が、劉格平によって成功したのである。

劉格平らの暴露によって、劉少奇批判は、四月一日の戚本禹の「愛国主義か、それとも売国主義か」という論文の発表となり、本格化していった、それにもなつて、劉少奇の指示によって一九三六年八月から出獄した党员、合計六十一人についても、「六十一人叛徒集團事件」として処置されるようになったのである。

右の偽装転向の問題とは別個に、趙樹理は一九三六年二月に逮捕されたが、すぐ釈放されている。偽装転向と直接関係ないはずであるが、しかし紅衛兵新聞の中にはこれと結びつけて扱っているものがあつた。

趙樹理の党歴をふり返ると、彼は一九二七年に二十二歳で入党し、二九年共産党员の嫌疑で逮捕され、太原の国民党による政治犯収容所「自新院」に入れられた。趙樹理は、相手が何の証拠も握っていないことを知ると適当に対応し、「悔」「白馬の話」といった小説など四篇の文章を「自新院」が発行する月刊誌に発表し、三〇年春出獄した。

出獄すると、共産党の地下組織が二度連絡をとつた。一度目は、レーニンの『国家と革命』を趙樹理に送り、党に戻りたければすぐ道をつけると話した。もう一度は、関係を保つ問題について話しあいたいと人を通じて伝えた。しかし趙樹理は、二度とも拒絶した。

なぜ趙樹理が出獄後、党の申し出を断つたのかわからない。彼は一九三七年に再び党员になつたのだが、その際、党が苦しい時期に脱党して順調の時にまた入党するのは、まるで投機分子のようでいやだと、なかなか申請しなかつた。二人の入党紹介者の再三の説得によつて、やっと入党申請書を提出することに同意したという。

趙樹理は、獄中の彼に会うため五十元あまりも使つて破産に瀕していた父親のもとに帰つた。しかし、二ヵ月ほどでまた太原に出、太原綏靖公署の録事（記録係）の職をやつと探しあてた。月給は六元。生活費が足らず、仕事

のあと封筒貼りなどの内職をして過ごした。

また、出獄した一九三〇年の秋に、彼は名前を樹礼ジュレイから樹理ジュリに改めている。のちの説明によれば、封建社会の「礼」を打倒して、マルクス主義の「理」を「樹」立したかったから改名したのだという。とにかく、秋になって、趙樹理はやつと人生を再び歩み始める気になったのである。

劉格平の前の山西省第一書記は衛桓ウエイガンといった。衛桓は奪権された際、投獄されて死んでいる。衛桓の夫人はある夜突然呼び出され、火葬場に連れていかれた。当時すでに批判にさらされていた趙樹理は、六四年に作った「松を咏ず」という自作の詩をわざわざ書いて、六七年に敢然とこの衛桓に贈っている。それは口語まじりの八句よりの詩で、そのうちの四句は次のようである。

風凄まがしきとき偏ひよに勁つよさを見あわし、日暖かなとき華はなに眩まわず。衆あまより出いでてまた衆あまに依いる、哪いづに居いるも哪いづをも
楽しむに變かう。

詩を贈ることは並みの関係ではないであろう。趙樹理は衛桓に深い親愛の情を寄せていたにちがいない。奪権した劉格平が趙樹理と衛桓の関係を知り、憎悪の念から苛酷なあつかいを指示したであろうことは、十分推測できることである。

とはいえ、人民文学の輝かしい成果をなした趙樹理である。あまりに個人的関係から扱うことは注意すべきことであろう。

五、天山の詩人聞捷の死

趙樹理は人民文学の主流であったから、文革という一切を逆転する風によって否定されたのだという解釈も成り立つ。しかし、この風は主流でない文学者をも襲った。その事例は、詩人の聞捷にみることができる。

天山山脈（ソ連の中央アジアから中国新疆に横たわる山脈）を背景に、簡潔で力強く新生活と愛情を歌い、天山の詩人として名を馳せた聞捷^{ウエンジエ}、本名趙文節^{チャオウェンジエ}は、一九二三年に生まれた。四〇年に延安に着き、四四年から新聞記者として通信の文章を書き始め、土地革命を題材とした劇の脚本なども書く。五二年、新華社の新疆分社の社長となり、詩集『天山牧歌』（作家出版社、一九五六年）にまとめられる詩を書き始める。天山のもとに生活する少数民族の若者の恋と希望が歌われた。率直で明快な愛の告白は、民謡のリズムに乗って高らかに響き、読者を魅了した。五三年、中国作家協会理事および作家協会上海分会理事になる。五八年には作家協会蘭州分会副主席となり、甘粛省に移った。カザフ族の生活や河西回廊の風景を歌った詩を発表する。詩集として『祖国、輝かしい十月』『河西回廊行』などがあり、また長編叙事詩『復讐の焰』などがある。

わたしたちは、永久に忘れはしない。四人組がわたしたちの父の生命を奪い去り、遺骨さえ残らなかつたことを。奴らは屍体を隠滅し跡を抹消するといった方法で、わたしたちの良き父、人民大衆が好んだ詩人聞捷を、この地球から、わたしたちの心の中から、徹底的に抹殺しようとしたのだ。この目的を達成するために、奴らは父を党籍除名の処分にした。父が迫害によって死んだ、その後には。

詩人聞捷の娘、咏橘^{ユウキョク}、咏蘋^{ユウピン}、咏梅^{ユウバイ}が訴える遺骨さえないという悲しみは、強く胸を打つ。しかし、彼女たちとても完全な被害者であったというわけではない。もう少し、彼女たちのことばに耳を傾けよう。

しばらくして、咏橘、咏蘋は、黒竜江省へ行くことを申請した。父はあいかわらず監禁されていた。

咏蘋が上海を離れる時、許可を得て獄中の父に会いに行つた。

彼女は、自分がこらえきれずに涙を流しはしないかと、そればかりを恐れていた。父の前で涙を流すことなど、どうして許されるものか、奴らは彼女にこう言いふくめていたのだ。「お前の父は叛徒で、特務だ。お前が奴の前で涙を流すということは、とりもなおさず、はっきりと境界線を引きたくないってことだ。つまり、革命的ではないんだ」と。

咏蘋は、時に十六歳だった。革命ということに対して、彼女の理解は何と浅薄なものであったことか。彼女は自分が革命的であるからには、父や母と境界をはっきりさせねばならぬとのみ思つた。それで、彼女は父に一家の近況を告げた時、奴らのことばつきで「母さんは、人類の歯牙にもかけられぬ犬の糞になりました〔自殺したことをいう＝引用者〕。姉さんも妹も、そしてわたしも、みんな母さんと一線を画さねばなりません…」父はこういうのを聞いて頭を垂れ、涙を流し、ひとことも話すことができませんでした…

貴重な会見は、父と娘の無言のうちに過ぎていき、すぐ終了ということになりました。この時やっと父は口を開きました。彼はふるえる声で、「父さんも母さんも、二人とも敵ではない。叛徒ではない。走資派でもない。わたしたちは工作中誤りはあつたらう。しかし、二人とも延安の粟を食つて育つたのだ。三十年以上も、党の教育を受けてきたのだ」と言つた。

子供たちは、革命的立場がすっかりしていることを示すために、迫害を受けている親に涙を流すことも許されなかった。そればかりでなく、自分からすすんで批判のこぼれを投げつけたり、自白を勧めたりした。甚だしい場合には、公開の批判闘争大会で、面罵したり、唾棄したり、殴打さえした。

これこそが革命の実態である。そのように当人たちも思ったし、周囲の者すべてがそう思った。何かに魅入られたのは、紅衛兵ばかりではなかった。熱気がすべてを正当化したといえる。

一九六六年、文革が始まるとすぐ、聞捷は「黒い詩人」とか「叛徒」にされたという。六八年春には隔離審査を受け投獄されている。累が夫人にまで及び、夫人はその年の夏、自殺した。まもなく、上の娘二人が黒竜江へ行き、末娘一家が家に残された。六九年になって、聞捷は「解放」（出獄のこと）されて家にもどることができた。ただ、六九年十月に、林彪の「一号命令」なるものが出て、上海の南、奉贤県にある「文化系統五・七幹部学校」へ行かされる。この時、作家協会上海分会の造反派であった戴厚英^{ダイホウエイ}も、幹部学校に移った。

造反派の戴厚英は、聞捷の人柄およびその詩の魅力にひかれて、彼を愛するようになる。率直で情熱的な聞捷も、彼女を愛し、結婚を申し出る。それは、七〇年の末のことのようにだ。結婚申請を知った張春橋は、これは「造反派を腐蝕する」もので、「プロレタリア階級に対する気違いじみた進攻である」として、結婚を許さず、聞捷をいっそう激しく迫害させたという。

一九七一年一月三日、詩人聞捷はガス自殺した。

党員の自殺は罪なので、彼の死後、ただちに糾弾大会が開かれ党籍剥奪の処分がなされた。家も差し押さえられ、十五歳の咏梅はひとり放り出されて、住む所もなくなった。蔵書なども行くえ知れずとなった。

聞捷の「叛徒」の問題については、一九八七年に、それが事実無根であることを証言する文章がある。それによ

ると、彼は武漢で抗敵演劇隊第四隊に参加した。一九三八年末、最も若く最も活発な彼は、わずか十五歳で入党した。まもなく襄樊に行き、鄂西北区党委委員会の指導下の政治部第八中隊に入った。この地区の責任者が曹荻秋^{ツォオヂイチュウ}であった。三九年五月、聞捷は国民党に逮捕されたが、その年の冬、証拠不十分で釈放されたという。聞捷はその後重慶に出、延安に赴いた。

聞捷の罪状にはよくわからないところが多い。八つの模範劇の一つ「海港」の班にいたが、そこから追い出された。「模範劇を破壊した」という罪状から、何かがあつたような気がする。また、四十日間も北京へ逃げて行き、造反派に捕まり連れもどされたともいう。これも単なる逃避行とは思えない。

ここでは、彼がかつて曹荻秋のもとにいたということを指摘しておこう。張春橋や姚文元らの奪権闘争が、上海市党委員会の曹荻秋たちの実権派を対象としていたことは、胡月偉^{フエツェウエイ}と楊鑫基^{ヤンシンヂ}の小説『瘋狂的節日』（邦訳名『小説張春橋』阿頼耶順宏・竹内実・吉田富夫訳、中央公論社、一九八二年）でも描かれているほど、有名な事実である。

権力奪取は、単に相手を打倒するだけでなく、権力を握っていた者の側の人脈を根こそぎ排除し、そこへ自らの息のかかった者を押し込んで、はじめて完成される。このパターンは中国において古くからあるものだ。

聞捷のような詩人も、この人脈による観点から批判され、排除の対象となつたのであろう。

聞捷は邵荃麟や趙樹理よりも一世代余りも若く、馬烽とは同世代である。天山の詩のように率直で情熱的な彼は、文革の嵐に激しく翻弄され、最悪の結末を招くことになった。ただ彼の場合は、戴厚英と遭遇したことによって、次の世代（造反派や紅衛兵）への橋渡しの役割を、結果として持つことになった。

六、文革が生んだ文学

以上、文学理論については「中間人物」論批判をみ、そしてその提唱者である邵荃麟をとりあげてみてきた。また、人民文学の主流の文学者として趙樹理を、解放後の文学者として聞捷をとりあげてみた。

文革中は、既成の文学者たちが文学を生みだす余裕などとてもなかった。一方、文革に参加した紅衛兵や造反派の中で、運動の過程で疑問を抱いたり傷ついた者たちが、新たな文学を生み出した。

このことは、やはり文革と文学者というテーマから、みておかなければならない。

その一例は、女流作家戴厚英である。彼女は奇しくも、聞捷と恋愛関係を持った。

戴厚英の処女作『詩人の死』（福建人民出版社、一九八二年）は、聞捷をモデルに、自分たちの恋愛をプロットにして描いている。

工宣隊（労働者毛沢東思想宣伝隊。教育や文芸の活動を指導するため、大学や作家協会などにやってきた生産労働者）の指導者は、女主人公向南（シェンナン）と相手の詩人との恋愛と結婚申請を次のように非難する。

人と人との関係はすべて階級関係である。だから、すべての人と人との結びつきもみな政治的結びつきである。婚姻、恋愛とて、もちろん例外ではない。お前たちは、大修正主義と小修正主義、大ブルジョア階級と小ブルジョア階級の結びつきで、この結びつきの政治的基礎はいうまでもなく反動的である、と。

これに対して、向南は、友人に訴える手紙の形で次のように述べる。

反抗ですって。五四時期の女性のように、婚姻自由を勝ち取るために闘争するか、ですって。いや、私にはそんな勇氣も胆力もないわ。私は五四時代の女性じゃない。当時、先進的な女性がひとたび社会へ足を踏み入れたら、額に「反抗」の二文字を押されたわ。これは光栄な印です。革命的な印です。しかし私は、この新社会で育った私は、額にも心にも「服従」の二文字が押されているのです。これも革命の印、進歩的な印です。過去十数年、私はずっと服従的でした。党の指導に服従し、組織の決定に服従してきました。：

自分が組織の決定に、それがプロレタリア階級司令部ならなおさらのことですが、反抗しようなんて思っただけでも恐ろしくて死にそうです。まるで自分が本当にもう「反革命の崖つぶち」にまで来てしまつて、谷底に「落ちて」しまうように感じます。

しかも、文化大革命以来、この「服従」の習慣は打破されたのではなく、かえって強化されました。というのも、現在の服従は、もう頭を使う思索や理解が必要ではなく、理解しないものでさえ実行することになったのですから。もちろん、こんな服従は、もはや情熱や信頼を生み出すことなんてできません。懷疑と恐れの上にあるものなのです。

ここでいう「理解しないものでさえ実行」というのは、林彪が提起した「理解したものは実行しなければならず、理解しないものも実行しなければならぬ。実行中に理解を深めるのである」ということばをうけて、言っている。文革が要求したのが、党の命令に服従する人間、すなわち奴隷ではなかったかと批判し、奴隷を何とかして脱し

ようとする葛藤がここには描かれている。したがって、ある批判会で、「一人の男と一人の女が、よるのよなかに一緒にいて、何の良い事ができるというのか」と言われたのに対して、

「その通りです。私たちは一人の男と一人の女です。私たちは愛しあっています。私たちは結婚します。これは、人類生存の要求であり、権利です。この要求は自然なものです。この権利は神聖なものです」

と、向南に答えさせようとしている。

ここでは、高らかに、人間の独立が宣言されているのである。

この小説では、詩人は愛する向南や自分の娘たちを残して自殺する。女主人公向南も、プロレタリア司令部の命令によって黒竜江へ下放させられてしまう。階級闘争の無情さと、生活次元にまで関与してくるプロレタリア階級独裁の全面性を描いたといえるかもしれない。しかしながら、それでも人は一人では生きていられず、互いに援助しあう。生活上の、そういう人と人のつながりが固く結ばれていくさまも描かれる。そこから「我々は人間である。ほんの少しいいから、人道、人情そして人間性を」という叫びが伝わる作品となっている。

戴厚英は、一九三八年生まれ。上海師範大学中文系で文芸理論を学んだ。文革が始まると、作家協会上海分会の造反派になる。初めて聞捷と接したのは、六八年、革命模範劇「海港」創作グループから北京へ逃げた聞捷を審査する特捜班の一員としてであった。造反派の女が打倒対象の男と愛しあうようになる。二人が愛しあった時、戴厚英は三十一歳、聞捷は四十六歳であった。二人とも初婚ではない。二人の愛は、一時の激情といったものではなかったはずだ。だが、というべきか、それだから、というべきか、聞捷は一人自殺してしまった。

こういういきさつは、どれ一つとして彼女の心に傷をつくらぬものはなかったはずだ。彼女が小説を書こうとした時、既成の文学者たちが好むと好まざるとにかかわらず立たされてきた、「人民を教育する」位置とは異なるところに立つことになったであろう。

戴厚英の小説の内容が人間性の解放であり、生き生きした男女の美しい恋愛の描写があるということ以上に、彼女が自分の心のいたみを出発点として、そこから人間のあり方を作品にしたという、これまでの中国文学と異なる質が、大きな問題として提示されたのである。

ほかに女流作家遇羅錦ユイロキンスのように、他人を信じようとしながら肉親にまで裏切られたという体験から、恋愛でさえ信ずるに足りないものとする小説『春の童話』（原題「春天的童話」押川・宮田訳、田畑書店、一九八七年）など生まれた。あるいはまた、北島や舒婷シュティンといった紅衛兵世代の者によって、新しい詩が作られるようになった。

こういった文学は、一部の詩が文革中に書かれ、志を同じにする者の間で秘密裏に回し読まれていたのを除けば、作品化され発表されたのは、みな「四人組」逮捕（つまり文革終息）後のことなのである。

七、「空白の文学」

文学者たちは、文革が始まるとすぐ、紅衛兵や造反派に身体的虐待と精神的侮辱とを加えられた。それは、文学面で彼らが持っていた権力と権威を奪い去るためであった。

だが彼らは、自分たちが権力を持っているなどとは思ってもいなかったろうし、たとえ持っていたところで、それに固執するつもりはなかったにちがいない。だから、思想改造に積極的に参加したのである。

彼らがどうしても肯んじなかったのは、「叛徒」や「反党分子」というレッテルであった。彼らの過去は、革命を戦い勝利に導いた実践によつて支えられている。どうして、この厳然たる事実を否定などできよう。自分、身内、知人などの鮮血で革命の勝利は獲得された。彼らは、精神も肉体もそれに打ち込んで来た。それゆえ共産党は、彼らの生き方そのものである。党への信頼と忠誠は、虐待や侮辱によつて屈服され消滅するものではない。むしろ逆に、黨員たる彼らは迫害を受ければ受けるほど、党への信頼と忠誠をいつそう強くしたにちがいない。

また、彼らがつけていた権威にしたところで、これは自然に備わってくるはずのもので、付与したり奪取したりできる性質のものではない。

京劇革命に力を入れていた江青は、そのことにとどの程度まで気づいていただろうか。

彼女は、京劇の革命模範劇「紅灯記」などには一九六四年から意見を出しており、その完成に必死であった。六年の五月から七月にかけて、リハーサルを五回も見、そのつど修正意見を提出している。だから、革命模範劇が、六七年の「国慶節祝賀公演」を飾ることができ、毛沢東がそれを観劇したことは、江青にすれば、「社会主義の新しいものをかかげ、プロレタリア階級の独特なものをうち立て」たと自負できることになったのである。この自負が、既成の文学者たちを打倒してもかまわないという決意をいつそう固めさせたにちがいない。

だが、権力は奪取できたとしても、文学はそう簡単に奪取できるものではない。

革命模範劇は、革命現代京劇の「紅灯記」「智をもつて威虎山を取る」「海港」「沙家浜」「白虎連隊を奇襲する」と、革命的バレエ劇「紅色娘子軍」「白毛女」そして革命的交響曲「沙家浜」と八つも作られたが、七五年には、革命模範劇という一輪の花だけが独り咲いていると皮肉られるようになった。それは、舞台では革命模範劇だけが上演され、ラジオからはもっぱら革命模範劇のさわりばかりが放送されたからであるが、「労農兵の英雄的人物を

浮きぼり」にした構成や人物配置なども、単調な感じをいつそう強くしていたのである。この「英雄的人物を浮きぼり」にする方法が、「三突出」（肯定人物、英雄人物、中心人物の三つを突出すること）である。「三突出」という方法にまとめられ提出されたのは、六八年五月のことであった。

労農兵の文学は、労農兵自身によって作られるのが理にかなっている、という単純な考えもあった。だが、絵画では「戸県農民画」（陝西省西安市の西南にある戸県の農民たちが描いた絵）といわれるような独特なタッチの絵もあったが、文学となると、かつて『高玉宝』という自伝小説を書いた兵士高玉宝カオユイバオが、自作の改訂版を七二年に出版したぐらいの成果しかなかった。

また、文学専攻の学生が文学作品を書けなくてどうする、といった毛沢東の意見から、北京大学中文系文学専攻の「工農兵學員」（当時は、二年以上の実践経験をへて、労農兵の中から大衆の推薦によって大学生が選ばれた。そういう労農兵出身の学生）が、詩「理想の歌」などを七四年に発表したこともあったが、新聞に一時取り上げられただけで終わった。

同じ七四年からは、文学専門誌『朝霞』が上海で発行されるようになったが、「文革中は、八つの模範劇と『輝かしい大きな道』（原題「金光大道」）だけがあつた」と、のちに諧諷的に言われるように、文革前の諸作品を凌駕する作品はもちろん、それに匹敵する作品もなかった。『輝かしい大きな道』は浩然の長編小説で、七二年五月に出版された。これとて、文革前の彼の長編『うららかな日』（原題「艷陽天」）に及ばない。

以上は、文革が生み出した成果である。この中にも、汲み取るべきものがまったくないわけではない。しかし、これらを既成の文学者たちの抹殺の上に咲いた花だと考えるなら、あまりにも無惨ではないか。

むしろ、文革中は、文学は空白であつたと明言した方がいい。

文学を権力と同次元のものとみなし、強権が介入した。解放後の文学を否定しようとして文学者を否定してしまつたのが、文革の嵐であつた。嵐の結果が、「文学の空白」であつた。

しかし、この空白は表面上の空白にすぎず、水面下では、新たな文学を模索していて、それがまだ結実せず、表面に現われなかつた空白だと考えるなら、文革中には「空白の文学」があつたといえる。これこそ、文革が生み出した成果なのであろう。

だが、文学は、こういう現実を直視するところに成立するものである。「空白の文学」と「文学の空白」のどち
らが眞の文学であるかを、歴史は明らかにするであらう。

二 “中間人物を描け” 論について

はじめに

かつて中国に文化大革命というものがあつた、と言わねばならぬほど、プロレタリア文化大革命（以下、文革と略称する）というものが遠くなった。それは、授業で教える学生の年齢が文革時期を知らないことによつて、私に実感として反射する。それはまた、私自身の文革を良くも悪くも風化させている。もちろん、時代の変化という政治、社会、制度の変質が一層拍車をかけているのだが、私自身の肉体的衰えという生理も、実のところあたかも一つの青春の物語のように、対象への集中力をそいでいる。

少なくとも、私の思い出としてある文革は、一九六四年（以下、一九〇〇は省略する）の『文芸報』に突如として出現した「中間人物を描け」論批判であつた。一般に文革の引き金となつた論文とされている姚文元の呉晗批判^①よりも、より摩訶不思議なものとして、この「中間人物を描け」論批判はあつた。何かおかしな、無茶苦茶な論議がおこなわれ出したといったふうな感じを持ったものだ。もちろん、当時は、この批判の論を新しい正しいものとして受け入れ、正義の時流に乗ろうと懸命であつた。懸命な私の態度は嘘偽りのない確かなことであつたが、たとえ

不十分にせよ、この批判者の論理を自家薬籠中のものとすることはできなかつた。多少は利いた風なことを口走つたのであろうが、正直なところよくわからなかつたし、もう一つ肌が合わなかつた。今頃このようなことを言うのはいささか気のひけることではあるが、あえて言うのは、「中間人物を描け」論批判が、何かいつまでも私には気になる、変な論争であつたということを言いたいがためである。

七九年末から、文革中の数々の人物、作品、論などが名譽回復され出し、ある場合は随分内容が詳しくわかるようになった。「中間人物を描け」論及びその批判についてもかなりのところ詳しくわかるようになったが、私にはまだ幾つかの点が不明である。例えば、「中間人物を描け」論がなされたという大連会議に出席したのは、何人で誰なのかといったことも、私は知りたい。どうやら、十六人ぐらゐという。それなら、その十六人とは誰々なのか。名前を明らかにしたい。だが、これが意外とわからない。中国においては、類推するに、あるところ、或いは、ある人たちには、こういう事実わかっていることのようにだ。また類推するに、一方ではこのような瑣末な事実関係のことは問題意識にのぼらないようだ。私は、この二つのことが、大いなる問題のような気がする。この二つのことが、中国の制度であり、習わしであり、発想であるとしても、私は事態をできるだけ事実通りに再現すべきだと思う。それが何になるのかと言われたら、何にもならないかもしれない。しかし、事柄の事実をどこかで公に明白にしておくことが、知識人の支えであり、知識の強さではないかと思う。そして、こういう私の発想は日本において、そう大げさに構えなくても受け入れられるものと思う。だから、この発想の違いに私はこだわっておきたいと思う。

文革を通して、いろいろの論が批判の対象とされたが、そのことよって逆に、その論の重大性が印象づけられたといえる。例えば、人間性Ⅱヒューマニズムの問題や、典型の問題などがそうである。その中で、「中間人物を

描け“論というのは、マイナーな問題であるかもしれない。すでに、八〇年代の初めには、“中間人物を描け“論は論じられなくなっている。つまり、一応の決着がついているということで、決着がつくということは、それだけ広がりがない、マイナーな論ということにもなる。

だが日本では、紹介者の視点によつて、幾つかの問題の広がり⁽²⁾が提示されていた。

そこで私は、“中間人物を描け“論及びその批判そのものを論ずるのではなく、“中間人物を描け“論が提出されたという大連会議についての若干の事実について述べておきたいと思う。

一

“中間人物を描け“論というものがあつて、それが批判されるべきものであるということを、我々は唐突に知らされた。六四年の『文芸報』第八一九期合併号（九月三〇日出版）の次の文章によつてである。

『文芸報』編輯部「“中間人物を描け“はブルジョア階級の文学主張である」と、同じく『文芸報』編輯部「“中間人物を描け“に関する材料」が、それである。

この批判文章によれば、“中間人物を描け“という主張は、六二年八月に大連で開かれた“農村を題材とする短編小説創作の座談会”（以下、大連会議という）で、邵荃麟が提出したものという。

批判される人物が邵荃麟であるということが、先ず驚きであつた。彼は中国作家協会副主席であり、この僅か二期前の『文芸報』第六期に、反米戦争下のベトナム人民からの手紙二十二通を集めたという『南方来信』という本の紹介推薦の文章「青山はとこしえに在り、革命は永久に存す」を、七頁から九頁に発表していたからである。

だから、『文芸報』の批判は、いかにも唐突に思えた。しかも、邵荃麟批判の内容は、彼が六二年八月に密かに会議を開いたことを中心にしている。ほぼ二年間或いは、「中間人物を描け」と主張し出したのは六〇年冬からであったと批判者は言うから、四年間、彼は『文芸報』編輯部を含めた多くの人々を騙しおおせてきたということになる。

この驚くべき事柄の、不可解な経緯に、今でこそ私は、ここには文芸理論そのものの問題とは異なる、別の論理が動いているに違ひなからうと思うのだが、当時はむしろ、批判者の理論が新しい文芸理論を代表するかの如き錯覚を持ったのであった。今にして思えば、この錯覚が私の文革であったといえるかもしれない。

「中間人物を描け」論がどういうものか、については、批判者の引用によつて邵荃麟の言葉を知りうるだけなので、当時においてはそれから再現しなければならなかった。このことが先ず大きな問題であるが、この問題についてはすでに多くの人によつて指摘されてきているので、繰り返さない。ただ、文革終息後、『邵荃麟評論選集』⁴によつて知りえたところによると、意外と正確に邵荃麟の言葉を引用していた。もつとも、論というものは、言葉を部分的に取捨選択してよいかどうか問題なのであつて、その部分部分が正確であるかどうか問題なのではない。正確さは、言葉のシチュエーションにかかっているものである。それを認めた上で、批判者がわりと正確に相手の言葉を引用していたことは私にとって、意外であつた。どうやら、邵荃麟の発言稿が残っていて、それが唯一の出所のようであつた。ここでは、批判者の引用による邵荃麟の「中間人物を描け」論の再現も、批判者の論の要約整理も、しないことにする。「中間人物を描け」論そのものを、またその批判の論そのものを私は問題としていたわけではないからである。ただ、そうは言つても最小限度のことを注に簡単にまとめておくので、それを参照していただきたい。⁵

「中間人物を描け」論批判を日本でいち早く整理し紹介したのは、竹内実「『中間人物』論について」である。⁽⁶⁾竹内氏は、文学が世界の読者に普遍性をもつことをふまえて、邵荃麟の論が建国後の中国文学への日本の多くの読者の不満と一致するであろうことを指摘する。また、中国の独自性もあるとして、「中間人物を描け」論への批判文章から、文学と政治との違いをも指摘している。今ここでは、竹内氏が批判者の論理には、ある前提があることを指摘して、次のように言うことに注目しておこう。

*しかし、いわば「文学以前の文学理論」として、文学上の善悪が社会上の善悪に密接に対応するという前提がないかぎり、批判者の論理は足場がないはずである。作中人物の思想と行動はしばしば読者の思想と行動になる、創作と鑑賞のサイクル……

りっぱな作家によつてりっぱな作品が書かれるなら社会の進歩にプラスするだろうというのは、「文学有用説」として、中国ではかなり強く、文学の領域に存在してきた。それは中国文学の伝統的主流、というより、文学の前提であるといえるのではないか。しかし、文学の有用性を「社会の進歩にプラスする」というところに根拠づけるなら、文学によらず政治によつてそれを実現しても差支えないわけである。こうして、この「文学有用説」は「文学無用説」と表裏一体のものであり、矛盾することがなかったのである。⁽⁷⁾

社会の進歩にプラスするのは、文芸（文学と芸術のこと）をいう中国語をそのまま使う。以下同じ）という迂遠な方法よりも政治によつておこなった方が直截で、明瞭である。少なくとも、そう考える者がいて当然である。「中間人物を描け」論にあった、中間という社会上の曖昧なフアジーな部分は、近視眼的な目的至上主義者からみれば、切

り捨てるべき遅れた¹¹消極的¹²否定的な部分にすぎない。批判者がそういう立場に立っていて、文革という大きな社会の動向が、その後、一層即効を求める方向に拍車をかけた。その結果、仲間を結束しようとして、敵対者を作り、仲間を抱擁する度量と力量とが無くなってしまったが、その一つの原因は、即効を求めるに急なことがあったからかもしれない。いづれにせよ、こういう思考からは文芸の問題は放擲されてしまう。事実、文革の経緯は専ら政治的になってしまったのである。

一一

邵荃麟の「中間人物を描け」論批判は、思わぬ展開をみせた。

『人民日報』六六年七月三〇日に、李基凱・呉松亭・楊匡滿・侯聚元による『文芸報』の二度にわたる偽りの批判」が掲載された。(以下、付録資料の「中間人物を描け」論をめぐる論議の一覧表」五八頁以下を参照されたい。)

この文章によれば、六二年八月の大連会議の主人役は周揚であり、彼は農民の個人経営や自留地の必要性といった政治向きのことまで発言していたという。この会議の一ヵ月後に党の十中全会がおこなわれ、社会主義社会における階級闘争の必要性を確認した。「絶対に階級闘争を忘れてはならない」というスローガンが、この時期の風潮を象徴している。周揚は、大連会議の内容が十中全会の精神と違うため、外部に漏れることを恐れてこの会議を秘密のものとし、記録を封鎖したという。毛沢東は、六三年十二月と六四年六月に文芸に関する批示を出して、文芸が修正主義におちいり、作家協会などがハンガリーのペトフィ・クラブのような団体になろうとしていると警告した。こうした情勢に身の危険を感じた周揚は、邵荃麟を身代わりにしたて、「中間人物を描け」論批判をおこなっ

たという。これが『文芸報』六四年第八一九期合併号の編輯部の文章で、第一回目の偽りの批判であるという。これは、周揚とその上司にあたる陸定一⁽⁹⁾とが、批判を邵荃麟の文学主張だけに限定し、政治問題となることを避けようとしたものであり、みずから筆を取って添削したという。

文革が進行した六六年に、周揚らは李方紅「中間人物を描け」論はどの階級の政治要求を反映しているか」を『文芸報』第四期に書かせた。ここでは、邵荃麟の文学主張の骨子は「中間人物を描け」と「リアリズム深化」の二つであり、前者は十八、十九世紀ヨーロッパ文学の小人物を内容とし、後者は同じく十八、十九世紀ヨーロッパ文学の批判的リアリズムを内容とした。こうして、批判の矛先をヨーロッパ文学の批判的リアリズムという文学問題に限定しようとしたのだという。これが第二回目の偽りの批判である。陸定一と周揚は李方紅の文章に四回も手を入れたという。

文芸面における文革の進行は、国防部長の林彪が毛沢東夫人江青に委託して部隊で開いた、部隊文芸座談会で顕著なものとなった。この座談会の出席者は明らかでないが、六六年二月二日から二〇日まで上海で開かれている。ここでは、建国後の文芸指導の誤りを指摘し、それらを八つの黒い論にまとめて批判している。⁽¹⁰⁾この八つの毛沢東思想に反し、資本主義の道を進めるといふ黒い論に、「中間人物を描け」論も「リアリズム深化」論ももちろん入っている。この座談会の記録の公表は、六七年五月二七日の『人民日報』であるが、党内には六六年四月に配付されたので、周揚たちは江青たちの動きを知って、上述の第二回目の偽りの批判をしたのである。

周揚らは、文革の進展に際して、いち早く「自己批判」或いは上述のような「批判」をおこなって批判目標を限定することにしたのだ。こういう手段を、この「中間人物を描け」論だけに止まらず、姚文元による呉晗批判のときもそうしたのであった。その手段を綱領化したのが、六六年二月の彭真の「二月要綱」だといわれている。批判

を学術問題に限定して、政治面に拡大しないように画策したのであった。

自分の身内で批判をして、批判の範囲を限定するというのは、実に巧妙な手段である。だが、巧妙さのもつ巧智に、むしろ不誠実を感じないでもない。当時の私は、周揚一派の不誠実をのみ感じ、周揚らの手段を官僚主義の悪いあり方とのみ思っていたのだが、このような奇形な批判をするにはそうせざるをえない状況があったのであろうから、片一方のみを責めるわけにはいかないと思うようになった。批判が人身攻撃と一体になっていて、批判する側もされる側も、論の内容以上に情況の方が重大になっている。したがって、論の中身よりも論が誰によって、何時、何処で出されたかというようなことの方が重いのであり、そういう動きの中の論争なのである。こういう論争を、私は初めて知ったのである。これは、論争というより政治的闘争といふべきなのであろう。

以上の経緯についても、すでに相浦杲「現代文学における思想闘争」が整理し、紹介している⁽¹⁾。相浦論文は、建国後の中国文学におけるソ連との関係を視野に入れて、社会主義リアリズムとソ連修正主義文芸理論の問題点を指摘している。つまり、「中間人物を描け」論批判を、なるべく文学上の問題として扱おうとしたといっている。だが現実には、以後いつそう顕著に個人攻撃のための批判文章が多くなり、文学の問題は飛んでしまったといっている。換言すれば、ほとんど権力奪取のための暴露文章になったのである。

三

権力奪取としての文章の見本のようなものとして、六七年八月二七日『光明日報』に載った、満江紅「大連会議の要所は資本主義復活のためにドラを鳴らして道を開けることであつた 文芸の黒い線の総大将周揚は大連会議の

主犯元凶である」という文章がある。

この文章によれば、大連会議の内容を秘密にしておいたのに、それを暴露したのは、劉白羽⁽¹²⁾だという。いささか長くなるが、文章の一部を引用しよう。

* 彼ら（周揚たちのこと＝引用者）はさらに、偽りの現象を社会に作りだした。大連会議は、せいぜい誤った文学理論の問題を提出したにすぎず、それもすべて邵荃麟がしたことだ、周揚とは関係ないことだ、というのがそれである。

この偽りの現象は、彼らが一九六四年偽りの整風をしたときに作りだしたものである。一九六四年「六・二七」指示を毛主席が下した後、周揚一味は旧作家協会の党内の資本主義の道を歩む実権派劉白羽と、偽りの整風をして毛主席の指示に対抗した。邵荃麟は、この偽りの整風をしたとき放り出されたのである。但し、彼らは「中間人物」論と「リアリズム深化」論とを持ち出して所謂批判なるものをしただけで、反動的なこの二つの「論」の政治的基礎、つまり、大連会議の反党反社会主義の政治的要所については、一言も触れず、嚴重に封じ込めたのである。その時、周揚は邵荃麟に人をやって、「上にも下にも、右にも左にも、ことを押しつけるな。ひとりで責任を引つ被れ」と命じる一方、「中間人物」論と「リアリズム深化」論に対する批判を嚴重に「學術」範囲内に限定させた。（略）

この偽りの整風において、もともと主犯元凶である周揚は、またしても進歩的役どころを演じた。そして劉白羽は、周揚を庇い、黒い線を保護した功績によって、たちまちのうちに閻魔殿によって文化部副部長に抜擢されたのである。

六六年初め、反革命修正主義の頭目彭真の「二月要綱」を貫徹し、革命左派の「海瑞の免官」に対する批判を抑えて闘争の方向を変えるために、三反分子林黙涵¹³は劉白羽と密議を凝らし、「再び」中間人物論を持ち出して「再批判」をおこなった。しかも、「批判」の筋道を、「中間人物 小人物；リアリズム深化 ブルジョア階級のリアリズム」とすることに決め、劉白羽の言葉によれば、「我々は中間人物から始め、政治観から文芸観に至るまで批判しなければならぬ。さらに一歩進めて、リアリズム深化からブルジョア階級リアリズムの創作方法を打ち破るところまで批判を深めなければならない」ということであつた。この視線変更をもくろんだ偽りの批判は、相変わらず周揚を庇い、大連会議の要所の問題を回避することを企んだものであつた。彼らは、偽りの批判真の庇護という任務を、三反分子何其芳¹⁴に渡した。何其芳は人を組織して、『文学評論』に偽りの批判文章を発表させた。

一九六六年四月、中共中央が批准した「林彪同志の委託で江青同志が開いた部隊文芸工作座談会の紀要」は、明確に文芸黒い線の独裁の問題を指摘し、三〇年代の二つのスローガン論争の実質をも指摘した。反革命二面派劉白羽は「紀要」から、「十二級の台風」が吹いてくることを予感し、彼のボスである周揚の立場が危うくなると思つた。風向きをみて舵を取るのがうまいこの輩は、大連会議の要所の部分を放り出し、彼自身を保護しようとした。但し、狡猾なこの狐は二組の材料を準備した。一組は周揚を放り出すもの、もう一組は周揚を保護するものである。この二組の材料を手持って、この年老いた狐は洞穴の入口に座つて情勢を伺い、時機を待った。情勢の発展はこいつら反革命修正主義分子に大いに不利になつた。「三家村」が暴き出された。中共中央が「五・一六通知」を発令した。林彪同志が中央政治局拡大会議で、ひっくり返された地主やブルジョア階級が彼らの失われた天国を随時回復しようとして夢見ていると指摘し、全党に次のように呼びかけた。「階

級闘争を片時も忘れず、プロレタリア階級独裁を片時も忘れるな。政治を突出することを片時も忘れず、毛沢東思想の偉大な紅旗を高く掲げることを片時も忘れるな”と。プロレタリア文化大革命がすさまじい雷鳴のような勢いで、この一撮みの反革命修正主義分子たちをなぎ倒した。五月末になると、劉白羽は大勢が決着したのを見て、とうとう周揚を含めた大連会議の要所の問題を放り出すことに決めたのだ¹⁵。

以上長くなったが、この引用から、邵荃麟が提出した“中間人物を描け”論はすでに問題ではなく、大連会議に出席した周揚が問題だということがわかるであろう。満江紅によれば、会議で周揚は“徹底的に反動的な”報告をしたという。その報告の内容が、毛沢東がとった大躍進政策の“三面紅旗に反対し、資本主義復活のために”道を開く、反党反社会主義のものであったというのである。そして、この周揚報告などの資料を提供したのが劉白羽だということである。

では、大連会議なるものは、いつ開かれ、誰が参加したのか。すでに、『文芸報』六四年第八・九期合併号の、『文芸報』編輯部“中間人物を描け”に関する材料”で、会議については次のように書かれていた。

*一九六二年八月、中国作家協会は大連で、農村を題材とする短編小説創作の座談会を開いた。八つの省や市から来た十六人の作家と評論家が、この会議に出席した。¹⁶

会議は八月の二日から一六日まで開かれ、邵荃麟は序言と総括的発言とをしたことが、他の部分からわかっている

る。問題は、この十六人である。陳丹晨によれば、次のようである。

* 荃麟同志がこの会議を司会し、何度も発言した。作家協会主席茅盾同志も会議に参加し、発言をした。中央宣伝部副部長、文学芸術界連合会副主席周揚同志は会で講話をした。会議に参加したのは八つの省や市の十六人の作家評論家であり、多くのものは農村の生活を描くのを得意としており、大衆によく知られ、好まれており、影響力のある作家である。彼らは趙樹理、周立波、康濯、李准、西戎、李束為、李滿天、馬加、韶華、方冰、劉澍徳、侯金鏡、陳笑雨、胡采などである。⁽¹⁷⁾

ここには十四人の名前が上がっている。

趙樹理、西戎、李束為は中国作家協会山西分会に属する作家である。趙樹理の「鍛えよ、鍛えよ」や西戎の「頼おばさん」という作品が「中間人物」を描いた作品として邵荃麟から称揚されていた。それは同時に、批判の対象ともなったということである。

また、彭放は次のようにいう。

* 一九六二年八月二日から一六日までの大連小説座談会は、まさに中央の工作会議の精神を貫徹するために、『廣州會議』の後を受けて、中国作家協会が主催し開いたものである。会議に参加した人は、中宣部と文芸界の指導同志周揚、茅盾、邵荃麟などを除くと、ほかには一部の文芸評論家及び、北方よりやって来た農村を題材とする短編小説を書く著名な作家であった。その中には、趙樹理、周立波、康濯、西戎、李准、韶華、馬加、

胡采、李滿天、束為、劉澍德、方冰、侯金鏡、陳笑雨などがいた。このほかにまだ、中国作家協会や党中央宣傳部、そして遼寧作家協会の工作人員がいた。彼らは八つの省市からやって来、その大部分が黨員であった。周揚同志は会で当時ちょうど開かれていた北戴河の中央工作會議の精神を伝えた。そして農村の情勢と創作問題に関する重要な講話をした。茅盾同志も大会（總會をさすのか？未詳である）引用者¹⁸にきて重要な発言をした。

八つの省市については、山西省（趙樹理、西戎、李束為）、湖南省（周立波）、河北省（康濯、李滿天）、河南省（李准）、遼寧省（留華、馬加）、陝西省（胡采）、雲南省（劉澍德）、大連市（方冰）が考えられる。侯金鏡は『文芸報』副主編であったから、むしろ指導グループの一員ではなかったかと思う。少なくとも會議の組織、運営者であつたろう。陳笑雨はたぶん『新觀察』主編の身分で参加したのであろう。

参加者の人数は、陳丹晨と同じく十四人である。順番は変わっているが、メンバーに変わりはない。普通、参加人員の中には、周揚・茅盾・邵荃麟といった指導者は数えない。では、あとの二人は誰なのであろうか。

ある人は、張慶田と李曙光だというのが、確証はない。¹⁹張慶田については、やや留保するところがある。彼は河北省晋県の農村を拠点として作品を書いているので、この會議に出席したとしても不思議はないのだが、七九年五月九日に書いた『老堅決集』小序²⁰によると、大連會議の様子を康濯の報告で知ったように書いている。李曙光は中央宣傳部文芸局にいたから、出席していたとしても、工作人員でなかったかとも考えられる。彼の筆名は『黎之』といい、『文芸報』六十二年第十二期に、「我々の時代の英雄形象を創造せよ 邵順宝、梁三爺さんから思いついたこと……」を評す²¹という文章を書いている。この文章は、同年第九期の『文芸報』に載った沐陽（謝永旺の筆名）「邵順宝、梁三爺さんから思いついたこと……」に反対し、唐克新の短編小説「沙桂英」中の人物邵順宝や柳

青の長編小説「創業史」の登場人物である梁三爺さんといった「中間人物」よりも、「創業史」の若い主人公梁生宝などの英雄人物をもっと評価すべきだというものである。大連会議で邵荃麟の「中間人物を描け」論を聞きながら、その意見に最も早く反対した公開の文章といえよう。

大連会議に出席して、「中間人物を描け」論に反対した者に胡采がいるが、彼の文章は、満江紅のいう「第二回目の偽りの批判」がおこなわれつつある時期に発表されている。⁽¹⁾大連会議出席者がひしひしと身の危険を感じ出すような六五年のことである。(付録資料の「中間人物を描け」論をめぐる論議の一覧表」を参照されたい。六〇頁以下)ただ、参加者が十六人というのは、他に指導者や工作人員がいたとしても、いかにも数が少なく、秘密の臭いがないでもない。この秘密性を、文革は毛沢東思想に反対するものと位置づけ、周揚からその上司の陸定一、そしてかれらの元締めである劉少奇へと結び付け、打倒したのである。邵荃麟も趙樹理も侯金鏡も陳笑雨も劉澍徳も、理由はいろいろあろうが、結局のところ殺害されている。会議の参加者としてではなく、身体の弱い夫・邵荃麟の生活の面倒をみるために葛琴も来ていたという。彼女も迫害され、障害ある身となってしまった。

いずれにせよ、劉白羽は会議に出席してはいなかったようだ。彼は、その地位からして会議の内容を知りえたであろう。こんな小規模の、参加者からして政治的にも軍事的にもさして力のありそうにない会議が、非公開であったがために、暴露だ白状だということになったような気がしてならない。

おわりに

私は別のところですでに触れたことがあるのでここでは述べないが、邵荃麟と趙樹理の二人の大連会議での発言

稿が残っていて、現在では見ることができ⁽²²⁾。趙樹理がこの会議では、かなり激情的になっていたが、それは農民と密着して生活している者としての熱意からであった。こういう熱意を為政者が汲んでくれるように願う心が、“中間人物を描け”論に収斂していくような感想をもった。

文革の時期は、その為政者が劉少奇に比せられたのであった。

文革終息後の、“中間人物を描け”論の名誉回復の文章に特徴的なことは、例えば陳丹晨や彭放に見られるように、周恩来への言及である。大連会議の開催を、周恩来が開いた六二年三月の“広州会議”と同じ系列に位置づけるのである。それは、作家という知識人を文芸のテクノクラートとして保護し育成する政策を強く意識し、そうであれかしと願う心の表現のように思える。⁽²³⁾

だがこれは、参加者十六人の問題について、文革前と後と、相変わらず何もわかっていないのと同じように、“文学有用性”という面からみれば、文学に対する態度が何も変わっていないことを示すものといえるのではなからうか。

注

(1) 姚文元「評新編歴史劇『海瑞罷官』、『文匯報』一九六五年十一月一〇日のことをいう。

また、一九六六年五月一〇日の『解放日報』と『文匯報』に発表された「評『三家村』——『燕山夜話』、『三家村札記』的反動本質」は、全国の新聞雑誌に転載されたが、このことは文革が社会運動になったものと意識された。

なお、姚文元は“中間人物を描け”論について、「使社会主义文艺发生蜕化变质的理论——提唱“写中间人物”的反动实质」（『解放日報』一九六四年十二月一四日）を発表している。

(2) 幾つかを時代順に列挙する。

- ①竹内実「『中間人物』論について」『思想』四九一（一九六五年五月五日）。
- ②木村シゲ子「中間人物論紹介」『中国文芸座談会』一五（一九六五年七月）。
- ・おもに『文芸報』を整理したもの。
- ③相浦杲「現代文学における思想闘争」（菅沼正久他共同編集『講座現代中国』3 文化大革命）一九六九年九月二〇日、大修館書店所収）
- ④新村徹「英雄人物像の一系譜——いわゆる『中間人物論』をめぐる」『野草』3（一九七一年四月一五日）。
- ・一九六五年四月までを文芸思想論争とみて、『中間人物論』を『英雄人物像の多様化の要求』ととらえる。そして社会主義文芸の典型、人物形象の多様化の問題に広げ、中国の三〇年代文芸や社会主義リアリズムとの関連などを考察する。
- ⑤牧田英二「農業集団化のなかの『中間人物』」『中国文学研究』5（一九七九年十二月二五日）。
- ・李准の作品を紹介し、彼が一九五八年の大躍進以後は英雄人物の形象にとめたことを述べる。だが李准のみならず、人民公社化以後の農村を反映した中国の作品はまだ成功していないことを指摘する。
- ⑥拙論「文化大革命と文学者」（竹内実編『講座現代中国』5 文学芸術の新潮流）一九九〇年一月一九日、岩波書店所収。（本書七頁以下がそれである。）
- ・大連会議が趙樹理の名誉回復の会議であったことを指摘する。
- ③ 邵荃麟（一九〇六—一九七二）本名邵駿運。浙江慈谿鉛原の人。文芸評論家。二六年党员。五三年より中国作家協会副主席兼党组書記、創作委員会第一副書記。『人民文学』主編など。
- ④ 『邵荃麟評論選集』上下。全七二八頁。一九八一年四月、北京人民文学出版社
- なお、上冊三八九—四〇三頁に（根拠記録稿整理）という「在大連『農村題材短篇小説創作座談会』上の講話」がある。また、編者の名前はないが、茅盾の（代序）「沈痛哀悼邵荃麟同志」がある。これは、最後の三行が人民文学出版社へあてたものである以外は、『人民文学』七九年九月号に発表された文章と同じである。
- なお、この本では邵荃麟が胡風の意見に同意した部分は削除されている。

(5) 『文芸報』編集部が、『中間人物を描け』論の内容を以下の四点にまとめている。

① 人民大衆の中では、正面の英雄人物は少数であり、『中間人物』が大多数である。だから『中間人物』を大量に描かねばならない。② 文芸創作は社会矛盾を反映しなければならぬ。そして、『矛盾は往々にして中間人物に集中しがちである』。だから筆力を集中して、『中間人物を描け』ねばならない。③ 『文芸の主要な教育対象は中間人物である』。当然、『中間人物を描く』ことを通じて、『中間人物』を教育すべきである。④ 文芸創作の中で、『英雄人物は多く描かれたが、『中間人物』は少ししか描かれていない。皆が英雄人物を描いたら、『道が狭くなってしまう』。道を広くさせるには、『中間人物』をたくさん描かねばならない。また、批判としては次の三点が主なことである。

① 社会主義文芸創作の最も主要な、最も中心的な任務は、『英雄人物を創造することである』。② 邵奎麟はこれに対して、『中間人物』という特殊概念を創造し、『中間人物を描け』という理論的主張を提起して拮抗した。③ 『中間人物』などという概念は存在せず、それは結局、遅れた『消極的』否定的人物のことである。

(6) 竹内実『中間人物』論について、『思想』四九一（一九六五年五月五日）六四二〜六五一頁。

(7) 同注6・六五一頁。

(8) 「批示」というのは、指導者が下から上がってきた報告書に決裁、指示、批評などを記したものをいう。皇帝に使用する言葉。

① 一九六三年十二月二日の批示：

各種の芸術形態——演劇、演芸、音楽、美術、舞踏、映画、詩、文学などには問題が少なくなく、その人数も多く、多くの部門で、社会主義的改造は、いまだに、ごくわずかな効果しかあげていない。多くの部門はいまなお「亡者」が支配している。映画、新詩、民謡、美術、小説の成果を過小評価してはならないが、そのなかの問題も少なくない。演劇などの部門になると、問題はさらに大きい。社会の経済的土台がすでにかわっているが、この土台に奉仕する上部構造のひとつである芸術部門は、いまなお大きな問題である。これに対しては調査・研究をすることから着手して、真剣にとりくむ必要がある。

多くの共産党員が、封建主義や資本主義の芸術の提唱には熱心でありながら、社会主義の芸術の提唱には不熱心であるというのは、奇怪千万なことではないか。

②一九六四年六月二七日の批示：

これらの協会とそれが掌握している刊行物の大多数（少数のいくつかは、よいとのことである）は、この十五年らい、基本的に（すべての人ではない）、党の政策を実行せず、役人風や旦那風を吹かして、労働者、農民、兵士に近づかず、社会主義の革命と建設を反映しようとしなかった。この数年は、なんと、修正主義者すれすれのところまで転落してしまつた。もし真剣に改造しなければ、将来いつかは、きつとハンガリーのペトフィ・クラブのような団体になつてしまふにちがいない。

なお、ペトフィ・クラブとは、十九世紀のハンガリーの愛国詩人ペトフィにちなむ作家組織で、一九五六年のハンガリー事件に、理論面での中心的役割を果たしたという。

以上のことは、吉田富夫他編『原典中国現代史5 思想・文学』（一九九四年七月二〇日、岩波書店）を参照した。

(9) 陸定一（一九〇七—一九六）江蘇無錫市の人。二四年入党。四五年より党中央宣伝部長。五九年國務院副首相。六二年第八期中央書記処書記を兼任。六五年には文化部部長になつた。七九年七月政治協商會議第五期副主席として復活。三〇年代から文革期まで宣伝部門を担当した。

(10) 八つの黒い論とは次のものをいう。①『真実描写』論 ②『リアリズム大道』論 ③『リアリズム深化』論 ④『題材決定』反対論 ⑤『中間人物を描け』論 ⑥『硝煙臭』反対論 ⑦『時代精神融合』論 ⑧『離典背道』論。

なお、『黒い』とは、『反党反社会主義反毛沢東思想』のことを意味する。

(11) 相浦杲『現代文学における思想闘争』（菅沼正久他共同編集『講座現代中国3 文化大革命』一九六九年九月二〇日、大修館書店所収）一五七—一七七頁。

(12) 劉白羽（一九一六—二〇〇五）北京の人。ルポルタージュ作家。三八年入党。五五年より中国作家協会副主席、書記処書記。六五年文化部副部長。文革後は八二年まで中国人民解放軍総政治部文化部長。八一年の『白樺批判』でタカ派として活躍。『人民文学』主編となつた。

(13) 林默涵（一九一三—二〇〇八）福建武平県の人。文芸理論家。三二年入党。五三年より中国作家協会理事、文化部副部長、中央宣伝部副部長。文革後文化部副部長、七九年中国文联副主席。全国少年兒童芸術委員会主任。

なお、「三反分子」とは、『共産党・社会主義・毛沢東思想の三つに反対する者』という意味である。

- (14) 何其芳（一九二二—七七） 四川万県の人。詩人、文芸評論家。三八年入党。五三年より中国社会科学院文学研究所所长、『文学評論』主编。

- (15) 滿江紅「大連會議的要害是為資本主義復辟辟鳴鑼開道——文芸黑線總頭目周揚是大連會議的罪魁禍首」『光明日報』一九六七年八月二十九日。

- (16) 『文芸報』編輯部「關於『寫中間人物』的材料」『文芸報』一九六四年八月九期合併号（九月三〇日）一五頁。

- (17) 丹晨「評大連會議和『中間人物』論」『文芸報』一九七九年三月（三月二二日）二〇頁。

なお、陳丹晨は七八年に『文芸報』編集部副主任兼理論組組長になり、『文芸報』復刊工作に尽力し、『中間人物を描け』論の名譽回復に務めた。この文章は八五年三月花山文芸出版社より出版された彼の評論集『芸術的妙諦』に収められた。

- (18) 彭放「『中間人物』論必須連根拔掉」『學習与探索』一九七九年一期。八三頁。

- (19) 中国の文芸評論家との私信による。

- (20) 張慶田「『老堅決集』小序——兼答××同志」二頁。（『老堅決集』一九八〇年一月、河北人民出版社所収）で次のようにいう。

* 拋出席大連會議的康濯同志回來說、茅盾同志、趙樹理同志都談到它、說它『投鼠沒有傷器。』

（この「它」とは、張慶田の短編小説「『老堅決』外伝」のこと）

- (21) 胡采「駁『寫中間人物』論」『收穫』一九六五年三期（五月二五日）。

- (22) 拙論「文化大革命と文学者」〔竹内実編『講座現代中国』5 文学芸術の新潮流〕一九九〇年一月一九日、岩波書店所収）を参照されたい。（本書七頁以下がそれである。）

邵荃麟の発言については、注4参照。

趙樹理の発言は『趙樹理文集』4（一九八〇年十月、工人出版社）一七一〇～一七二二頁と、『趙樹理全集』4（一九九〇年十月、北岳文芸出版社）五〇九～五二二頁に見られる。これによれば、発言稿ばかりでなく、他人の発言に口を挿んだ「挿話」まで見られる。

(23) 一九六二年三月の『広州会議』及び当時の周恩来の知識人政策などについては、吉田富夫他編『原典中国現代史5 思想・文学』(一九九四年七月二〇日、岩波書店)を参照されたい。

付録

資料…『中間人物を描け』論をめぐる論議の一覧表

1. この資料は『中間人物を描け』論、及び大連会議に直接関係する中国における論議の文章だけを集めたものである。したがって、「題材問題」とか「黒い線の独裁」などに関するものは省いてある。但し、本文に関連する文章は参考のため、『中間人物を描け』論に直接関係なくとも採り上げた。それには*印をつけ便宜をはかった。

2. 私が見ることができたもの、及び日本で見る事が可能なものに限ったので、例えば、『火花』などの地方雑誌はほとんど採っていない。

3. 収集にあたり、いちいち名前を挙げないが、多くの人の手を煩わせた。感謝する。

一九五八年

*趙樹理『鍛練鍛練』、『人民文学』一九五八年九期(九月八日)〔原載『火花』一九五八年八月〕

一九五九年

*王西彦『鍛練鍛練』和反映人民内部矛盾〔文芸作品如何反映人民内部矛盾〕、『文芸報』一九五九年一〇期(五月二六日)

*柳青『創業史』第一部『延河』一九五九年四期(四月一日)→十一期(十一月一日)↓『收穫』一九五九年六期(十一月二四日)

一九六二年

*唐克新『沙桂英』、『上海文学』一九六二年二期(?)

*魏金枝『為『沙桂英』弁護』、『文芸報』一九六二年七期(七月二一日)

*西戎『頼大嫂』、『人民文学』一九六二年七期(七月二一日)

二、中間人物を描け、論について

- 沐陽「從邵順宝、梁三老漢所想到的……」〔文芸筆談〕『文芸報』一九六二年九月（九月一日）。〔謝永旺の筆名〕
- 康濯「試論近年間的短篇小說——在河北省短篇小說座談會上的發言」『文學評論』一九六二年五月（十月一四日）
- 黎之「創造我們時代的英雄形象——評『從邵順宝、梁三老漢所想到的……』」『文芸報』一九六二年十二月（二一日）。〔李曙光の筆名〕
- 一九六三年
- 敵家炎「關於梁生宝形象」『文學評論』一九六三年三期（六月一四日）
- 一九六四年
- 朝耘「對『關於梁生宝形象』一文的意思」『文學評論』一九六四年二期（四月一四日）
- 吳中傑・高雲「談梁生宝形象的創造」『文學評論』一九六四年三期（六月一四日）
- 張鐘「梁生宝形象的性格內容與藝術表現——與敵家炎同志商榷」『文學評論』一九六四年三期（六月一四日）
- 黎之「描写英雄人物的報告文學」『文學評論』一九六四年四期（八月一四日）
- 敵家炎「梁生宝形象和新英雄人物創造問題」『文學評論』一九六四年四期（八月一四日）
- 編輯部「寫中間人物」是資產階級的文學主張」『文芸報』一九六四年八月九期（九月三〇日）
- 編輯部「關於『寫中間人物』的材料」『文芸報』一九六四年八月九期（九月三〇日）
- 王春元「究竟誰是我們時代的主人？」『文芸報』一九六四年八月九期（九月三〇日）
- 張羽霏・李輝凡「寫中間人物」的資產階級主張必須批判」『文學評論』一九六四年五月（十月一四日）
- 毛邦傑・郭宝根「戰士愛說英雄譜」〔工農兵談〕『寫中間人物』問題」『解放日報』一九六四年十一月一九日
- 吳劍卿「英雄人物形象給我的教育」〔工農兵談〕『寫中間人物』問題」『解放日報』一九六四年十一月一九日
- 李景祥・田永昌「駁用『中間人物』教育『中間人物』的主張」〔工農兵談〕『寫中間人物』問題」『解放日報』一九六四年十一月一九日
- 顧順福「不許誑誘我們貧下中農」〔工農兵談〕『寫中間人物』問題」『解放日報』一九六四年十一月一九日
- 閔德保「我們不同意邵荃麟同志的意見」〔讀者論壇〕『文芸報』一九六四年一〇期（十一月二八日）
- 董洪光「下來看看我們工廠農村的變化吧」〔讀者論壇〕『文芸報』一九六四年一〇期（十一月二八日）

金蔚然「哪来『芸芸衆生』？」〔読者論壇〕『文芸報』一九六四年一〇期（十一月二八日）

錢光培「現實主義深化」是資產階級現實主義的復活〔読者論壇〕『文芸報』一九六四年一〇期（十一月二八日）

李秉直「從『中間人物』到『問題小說』」『火花』一九六四年十二月（？）

朱寨「從對梁三老漢的評價看『中間人物』主張實質」『文學評論』一九六四年六月（十二月一四日）

姚文元「使社會主義文藝蛻化變質的理論——提倡『中間人物』的反動實質」『解放日報』一九六四年十二月一四日。（學術陣地）第三期
五期

陸貴山「『中間人物』的理論是『合二而一』論和時代精神『匯合』論在文學理論上的表現」『文芸報』一九六四年一一二期（十二月三〇日）

王先霈「關於『矛盾的人物』和『人物的矛盾』」『文芸報』一九六四年一一二期（十二月三〇日）

紫兮「『中間人物』的一個標本——短篇小說『賴大嫂』剖析」『文芸報』一九六四年一一二期（十二月三〇日）

「革命戰士愛讀英雄書——鐵道兵直屬單位戰士批判『中間人物』的主張」『文芸報』一九六四年一一二期（十二月三〇日）

趙錦良「都是紅臉，人家就不愛看了嗎？」『文芸報』一九六四年一一二期（十二月三〇日）

范子保「在『最進步最先進的人，用不着你教育』的背后」『文芸報』一九六四年一一二期（十二月三〇日）

資料室「十五年來資產階級是怎樣反對創造工農兵英雄人物的？」『文芸報』一九六四年一一二期（十二月三〇日）
一九六五年

吳聖昔「這是反社會主義的文學主張——批判『中間人物』的錯誤理論及其實質」『收穫』一九六五年一期（一月二五日）

項紅「我們和康灌同志的根本分歧——評『試論近年間的短篇小說』一文」『文芸報』一九六五年一期（一月三〇日）

趙錦良「邵荃麟同志為什麼反對寫理想的英雄人物」『文芸報』一九六五年二期（二月一六日）

丁川「透視『矛盾』往往集中在中間人物身上」一說的事實」『收穫』一九六五年二期（三月二五日）

范子保·趙錦良·王先霈「怎樣評論梁三老漢、亭面糊、嚴志和」『文芸報』一九六五年三期（三月二八日）

賈文昭「創造光輝燦爛的新英雄形象——駁邵荃麟同志的『中間人物』理論」『文學評論』一九六五年二期（四月一四日）

二 “中間人物”を描け、論について

李基凱「閔于怎樣寫中間狀態人物問題——用“不能走那條路”“年青的一代”“千万不要忘記”的成功經驗談“寫中間人物”論」『文芸報』一九六五年四期（五月一〇日）

胡采「駁“寫中間人物”論」『收穫』一九六五年三期（五月二十五日）

李輝凡「“現實主義深化”論批判」『文學評論』一九六五年三期（六月一四日）

黃起袁・周健明・張盛裕・封浩・周寅賓「代理人」宣揚了什麼——評康濯同志的短篇小說“代理人”『文芸報』一九六五年八期（八月二十七日）

*姚文元「評新編歷史劇“海瑞罷官”」『文匯報』一九六五年十一月一〇日↓『文芸報』一九六五年二期（十二月三十一日）など

王文生「“現實主義深化”論的貨色從何而來」『文芸報』一九六五年二期（十一月三〇日）

一九六六年

*公盾・朱通「為古而古、還是借古諷今——評“閔于、海瑞罷官”的自我批評」『文芸報』一九六六年二期（二月二十七日）

*「高舉毛沢東思想偉大紅旗積極參加社會主義文化大革命——“解放軍報”四月一八日社論」↓『文芸報』一九六六年五期（五月二〇日）など

李方紅「“寫中間人物”論反映了哪個階級的政治要求」『文芸報』一九六六年四期（四月二〇日）

*姚文元「評“三家村”——“燕山夜話”“三家村札記”的反動本質」『解放日報』・『文匯報』一九六六年五月一〇日↓『文芸報』一九六六年五期（五月二〇日）など

李嘉良「為誰請命？向誰請命？」（鋤掉“寫中間人物”論這株大毒草——工農兵滿懷革命 義憤參加關爭）『文芸報』一九六六年五期（五月二〇日）

齊繼東「不准挑弄貧下中農同黨的關係」（鋤掉“寫中間人物”論這株大毒草——工農兵滿懷革命 義憤參加關爭）『文芸報』一九六六年五期（五月二〇日）

胡緒曾「總路線給農民帶來了“苦難”和“痛苦”嗎？」（鋤掉“寫中間人物”論這株大毒草——工農兵滿懷革命 義憤參加關爭）『文芸報』一九六六年五期（五月二〇日）

- 孟憲忠「誹謗人民群眾就是誹謗革命」〔鋤掉「寫中間人物」論這株大毒草——工農兵滿懷革命 義憤參加鬪爭〕『文芸報』一九六六年五月二〇日
- 蔡炳堂「貧下中農是農村社會主義革命的頂梁柱」〔鋤掉「寫中間人物」論這株大毒草——工農兵滿懷革命 義憤參加鬪爭〕『文芸報』一九六六年五月二〇日
- 辛鳳英「不許丑化貧下中農」〔鋤掉「寫中間人物」論這株大毒草——工農兵滿懷革命 義憤參加鬪爭〕『文芸報』一九六六年五月二〇日
- 朱經通「寫中間人物」論是反毛澤東思想的一株大毒草〔鋤掉「寫中間人物」論這株大毒草——工農兵滿懷革命 義憤參加鬪爭〕『文芸報』一九六六年五月二〇日
- 米揚「我們愛看『紅臉』，我們要當『紅臉』」〔鋤掉「寫中間人物」論這株大毒草——工農兵滿懷革命 義憤參加鬪爭〕『文芸報』一九六六年五月二〇日
- 閔希彤「寫中間人物」論是同黨爭奪群眾〔鋤掉「寫中間人物」論這株大毒草——工農兵滿懷革命 義憤參加鬪爭〕『文芸報』一九六六年五月二〇日
- 吳國藩・蔣先雁・邵荃麟跟吳晗坐一條板凳〔鋤掉「寫中間人物」論這株大毒草——工農兵滿懷革命 義憤參加鬪爭〕『文芸報』一九六六年五月二〇日
- 文生才「堅決拔掉反黨、反社會主義的黑旗」〔鋤掉「寫中間人物」論這株大毒草——工農兵滿懷革命 義憤參加鬪爭〕『文芸報』一九六六年五月二〇日
- 林雨「寫中間人物」論是突出資產階級政治的「反動主張」〔堅決、徹底與文藝界的反黨反社會主義黑線展開鬪爭〕『文芸報』一九六六年五月二〇日
- 李学鰲「把一切牛鬼蛇神打它个落花流水！」〔堅決、徹底與文藝界的反黨反社會主義黑線展開鬪爭〕『文芸報』一九六六年五月二〇日
- 胡万春「我們必須勇敢地起來鬪爭」〔堅決、徹底與文藝界的反黨反社會主義黑線展開鬪爭〕『文芸報』一九六六年五月二〇日

二 “中間人物を描け、論について

- 高纓「躍出戦壕、向黒線展開進攻」〔堅決、徹底与文芸界の反党反社会主義黒線展開闘争〕『文芸報』一九六六年五月二〇日（五月二〇日）
- 浩然「戦闘の号角」〔堅決、徹底与文芸界の反党反社会主義黒線展開闘争〕『文芸報』一九六六年五月二〇日（五月二〇日）
- 黄天明・高中午・吳源植「徹底搞掉黒線、努力塑造工农兵英雄形象」〔堅決、徹底与文芸界の反党反社会主義黒線展開闘争〕『文芸報』一九六六年五月二〇日（五月二〇日）
- 李基凱・吳松亭・楊匡滿・侯聚元「『文芸報』の兩次仮批判」『人民日報』一九六六年七月三〇日
- 一九六七年
- *「林彪同志委托江青同志召開の部隊文芸工作座談会紀要」『人民日報』一九六七年五月二七日
- *旧中宣部革命造反派聯合總部「大閻王陸定一是文芸黒線の后台」〔高拳毛沢東思想偉大紅旗 徹底搞掉反革命修正主義文芸路線〕『光明日報』一九六七年八月二五日
- 滿江紅「大連會議的要害是辯資本主義復闢鳴鑼開道——文芸黒線総頭目周揚是大連會議的罪魁禍首」『光明日報』一九六七年八月二九日
- *曉東・侯作卿「中国赫魯曉夫和所謂『三十年代文芸』」〔高拳毛沢東思想偉大紅旗 把文芸黒線の総后台批倒批臭〕『光明日報』一九六七年九月一七日
- 一九六八年
- *天兵「陸定一・周揚鼓吹反『題材決定』論的反動實質」『光明日報』一九六八年六月二〇日
- 一九七〇年
- *広西壮族自治区文芸革命大批判写作小組「徹底粉碎反革命文芸黒線の総綱領——批判周揚一夥炮制的『文芸十条』」〔高拳毛沢東思想偉大紅旗 深入開展革命大批判〕『光明日報』一九七〇年十月一九日
- 一九七七年
- 李准「后記」一九七七年八月『李双双小伝』（人民文学出版社、一九七七年十二月）

一九七八年

思基「鎮正文芸工作者的鐐铐和枷鎖——批判『文芸黑線專政』論」『遼寧文芸』一九七八年四期（？）

林默涵「解放后十七年文芸戰線上的思想鬭爭」『人民文学』一九七八年五期（五月二〇日）

楊光「『反』題材決定，論」的冤案必須昭雪」『遼寧大学学报』一九七八年四期（？）

「中間人物」論的罪名应当推倒——『汾水』編輯部召開文芸理論座談會、就『寫中間人物』等問題展開熱烈討論」『山西日報』一九七八年十二月七日↓『新華月報（文摘版）』（綜合報道）一九七九年二期（？）

劉夢溪「革命現實主義是兩結合創作方法的基礎——評『四人幫』對『現實主義深化』論的批判」『文学評論』一九七八年六期（十二月二五日）

一九七九年

彭放「中間人物」論必須連根拔掉」『學習與探索』一九七九年一期（？）

*黎之「『文芸黑線』論與江青一夥的陰謀」（『文芸短論』）『人民文学』一九七九年一期（二月二〇日）

西戎「后記」一九七九春節（『宋老大進城』）人民文学出版社、一九八〇年二月

狄遐水「寫『中間人物』主張的再評價」『文学評論』一九七九年一期（二月二五日）

本刊評論員「『現實主義深化』是正確的文学主張——為大連小說會議弁白」『鴨綠江』一九七九年二期（？）

夏康達「『寫中間人物』弁——說『李双双小伝』後記」『光明日報』一九七九年三月六日

丹晨「評大連會議和『中間人物』論」『文芸報』一九七九年三期（三月二日）↓陣丹晨「藝術的妙諦」（花山文芸出版社、一九八五年三月）

黃偉宗「『寫中間人物』是資產階級的文学主張嗎？」『人民日報』一九七九年四月二日

艾蕪「悼邵荃麟同志」『文芸報』一九七九年四期（四月二日）

黃秋耘「往事與哀思——追念邵荃麟同志」『光明日報』一九七九年四月一日

鐘明「文芸創作不能寫中間人物嗎？」——批判『四人幫』關於寫中間人物問題的謬論」『光明日報』一九七九年四月一七日

二 “中間人物”を描け、論について

- 小琴「願它永遠成為過去——紀念我的父親邵荃麟」、『詩刊』一九七九年五月（五月一〇日）
- 陳新・茹辛「試論『寫中間人物』」、『汾水』一九七九年五月（？）
- 韓玉峰「圍繞『寫中間人物』的一場鬭爭」、『汾水』一九七九年五月（？）
- 沙汀「憶邵荃麟同志」、『人民文學』一九七九年五月（五月二〇日）
- 李榮峰「有勇氣的典型塑造的見解——評『寫中間人物』」、『四川文學』一九七九年七月（？）
- 曹湘渠「悼念邵荃麟同志」、『東海』一九七九年七月（？）
- 丁寧「孺子牛——憶邵荃麟同志」、『上海文學』一九七九年八月（八月二〇日）
- 邵小琴・邵小鷹・邵小鷗「戰鬪者的一生——追念我們的父親邵荃麟」、『人民日報』一九七九年八月二九日
- 曲本陸「評『寫中間人物』主張和對它的批判」、『社會科學戰線』一九七九年三月（八月三〇日）
- 羅謙怡「寫中間人物」主張的歷史背景及其作用」、『吉林大學學報』一九七九年五月（九月五日）
- 茅盾「沈痛悼念邵荃麟同志」、『人民文學』一九七九年九月（九月二〇日）↓『邵荃麟評論選集』「代序」（人民文學出版社，一九八一年四月）
- 邵家天「弔荃麟」、『詩刊』一九七九年一〇期（十月一〇日）
- 胡余「首都文芸界集會悼念金麟同志」、『文芸報』一九七九年一〇期（十月二日）
- 聶紺弩「挽邵荃麟同志」、『上海文學』一九七九年一〇期（十月二〇日）
- 駱賓基「我的創作歷程——為了悼念荃麟、雪峰和彭康等同志」、『文學評論叢刊』四期（一九七九年十月）
- 曾文淵「發展社會主義文學流派——兼談六十年代對山西一些作家的所謂『批判』」、『文匯報』一九七九年十月二三日
- 王春元「關於寫英雄人物理論問題的探討」、『文學評論』一九七九年五月（十月二五日）
- 王西彥「回憶荃麟同志」、『收穫』一九七九年六期（十一月二五日）
- 陳丹晨「寫『中間人物』問題再探討」、『新文學論叢』一九七九年二期（十二月）↓陳丹晨『藝術的妙諦』（花山文芸出版社，一九八五年三月）

- 康濯「再談革命的現實主義」『文学評論』一九七九年六月（十二月二十五日）
一九八〇年
- 張慶田『老堅決集』礼花文学創作叢書（河北出版社（石家庄）、一九八〇年一月）
聶紺弩「用『野草』意挽荃麟 七首」『魯迅研究文叢』一九八〇年一期（三月）
周而復「回憶荃麟同志」『新文学史料』一九八〇年三期（八月）
竹可羽「懷念荃麟同志」『新文学史料』一九八〇年三期（八月）
一九八一年
- 『邵荃麟評論選集』上下（人民文学出版社、一九八一年四月）
楚雨「旧事新思偶記——讀『邵荃麟評論選集』」『讀書』一九八一年九期（九月一〇日）
一九八二年
- 孫瑞珍「葛琴、戰士的胸懷」『新文学史料』一九八二年一期（二月）
張鐘「農村題材小說的再評價問題」『新文学論叢』一九八二年二期（六月）
一九八三年
- 小琴「辛勤奮鬥的一生——追念我的父親邵荃麟」『新文学史料』一九八三年二期（五月）
一九八五年
- 陳丹晨『芸術の妙諦』（花山文芸出版社、一九八五年三月）
黄秋耘「『中間人物』事件始末」『文史哲』一九八五年四期（七月）

三 五七幹部学校

文革と一口に言っても、幾つかの時期に分かれる。最初の時期は、一九六六年の紅衛兵が造反有理（反逆には道理がある）のスローガンを叫び、活発に行動した時期である。多くの作家たちは、「ブルジョア階級の黒い作家」とされ、批判され、一九六六年十月から六九年末まで、北京にある中国作家協会の建物の中の「牛小屋（簡易監獄）」に入れられていた。

一九七〇年からは、知識青年の「上山下郷（山村や辺境の村へ行く）」の運動が始まり、紅衛兵たちは辺境の地へ下りて行った。同時に、作家協会に所属していた作家たちも「下放労働」させられる段階に進んだのである。その行き先が、五七幹部学校であった。

五七幹部学校とはどんなものであったのか、簡単に概観しよう。

① 概 観

五七幹部学校は幹部の再教育の学校である。これは文革の一端を担い、機関幹部（中央と地方の政府行政の役人す

なわち公務員)を主とする知識分子の思想改造の方策であり、具体的実践であった。知識人の思想改造は、肉体労働の鍛錬を通じてこそ完成されるとするのが文革を推進する思想であった。都市と農村、農業と工業、そして頭脳労働と肉体労働といった三大差別の解消が社会主義革命の重大な任務であるとされたが、そのうちの一つ、頭脳労働と肉体労働の乖離は誰の目にも明らかであったから、知識人たちも強制的ではあったが、労働者・農民に学ぶべく覚悟を決めて労働改造に参加した。その改造が全国に一五〇〇ほどあった五七幹部学校で行なわれたのである。¹⁾

② 名称について

なぜ、「五七幹部学校」というのか、かいつまんで経緯を説明すると以下のようなになる。

一九六六年五月七日、毛沢東は、林彪が転送した中国人民解放军総後勤部の「部隊が農業や副業の生産をさらにうまくやることに関する報告」を読んだあと、林彪軍事委員会副主席に手紙を書いて、こう言った。

「軍隊は大きな学校となるべきであり、政治・軍事・文化を学び、生産活動を行なえ」と。そして、「労働者・農民・学生・機関幹部も同様の学習をしなければならない」と主張した。

五月十五日、中共中央は全党にこの手紙を伝達した上、八月一日、『人民日報』の建軍三十九周年記念の社説で「全国がみな毛沢東思想の大学校とならねばならない」と毛沢東の指示を公布した。労働者・農民・学生・機関幹部が「五七」指示に従い、下放するように呼びかけたのである。

二年後の一九六八年五月七日、「五七」指示発表二周年を記念して、黒龍江省革命委員会が慶安県柳河に農場を作ったことを報告した。ここでは、機関の幹部と所謂「走資派(資本主義の道を歩む実権派)」を下放させて労働改

造をしたのである。これを五七幹部学校と名づけたとも報告された。十月五日、『人民日報』は第一面のトップに「柳河『五七』幹部学校が機関の革命化のために新しい経験を提供した」という記事を発表した。あわせて、編者の言葉として、毛沢東の最新指示「広範な幹部が下放して労働すること、これは幹部が再度学習する極めて良い機会である。老人や身体障害者のほか、すべての者がこのようにすべきである。在職中の幹部も時期と人数を分けて下放労働すべきである」を伝えた。

この最高指示が伝わると、すぐ全国に五七幹部学校が雨後の筍のように出現したのである。

③ 任 務

五七幹部学校での主な任務は、二つある。

一つは肉体労働としての農作業である。荒地を開拓して田畑を作り、穀物・油・肉・野菜の「四自給」をするこ
とであった。

二つめは、学習と批判を同時に行ない、自らの革命精神を鍛えることであった。特に、文化部には「黒い線の仲間^②」と言われた、特別に批判されるべき人物（中央特捜班の審査対象の者）もいたので、こういう「牛鬼蛇神」は一日の仕事が終わった後も革命大衆から批判されねばならなかった。これは、「闘・批・改^③」と言われた。一時期には、「五一六分子」を深く抉り出す運動が繰り広げられたこともあった。^④

④ 咸寧五七幹部学校について

文化部は、一九六〇年代の末に、現在は咸安区に属する咸寧市の郊外の向陽湖に五七幹部学校を創立した。ここは昔から雲夢沢として知られた湿地帯であった。六千名余りの文化部の指導幹部とその家族とがここで三年ほどの労働鍛錬を行なった。⁵⁾

本部は、海拔四五・二メートルの甘棠「四五二高地」に設置された。今は、向陽湖乳牛良種場となっている。責任者には、李曉祥、徐光霄、楊岩、聶鳴九、常萍などがなった。先遣隊が、一九六九年四月一二日に入った。同年九月二六日に第一陣が、十二月一九日に第二陣が、一九七〇年五月一八日に、第三陣が下放してきた。謝冰心は老人病弱者として、七〇年一月に到着したが、ここに言う第二陣に入るであろう。冰心は、しかし、まもなく夫・呉文藻とともに沙洋の五七幹部学校に移ったので、三十八日間しかここにはいなかったのである。

最初の時期には、咸寧高級中学に、中継ステーションと子弟学校が設けられた。この高級中学は現在咸寧師專となつている。武昌の金口と烏龍泉には家族が住む中隊が設けられた。この二つの地区は当時咸寧地区が管轄していたのである。

汀泗橋に居を構えたのは第十三中隊で、石灰を窯で焼いた。これは、人民出版社から来た者の仕事であった。双溪の第二十六中隊は、石炭を掘り出した。これは、新華書店の貯蔵運搬会社の者の仕事であった。作家の沈從文は当時歴史博物館に所属していたが、咸寧に来ると手続き上の齟齬から双溪に移されている。一年後、老人や身体障害者の百余人が湖北省西北の丹江分校に移った。それで、ある者の回想では、冰心も丹江に移ったとしているが、それは間違いである。

初めは、北京軍区駐校解放軍毛沢東思想宣傳隊（「軍宣隊」と略称された）が管理した。一九七〇年六月二日から、湖北軍区軍宣隊が引き継いだ。一九七〇年秋から、周恩来総理の配慮によって、機関幹部が次々と北京に戻るよう

になり、一九七三年になると、殆どの者がここを離れた。一九七四年十二月末、咸寧五七幹部学校は解散し、天津の静海团泊窪五七幹部学校と合併した。一九七九年二月一七日に国務院は「五七」幹部学校を停止することに關する通知」を發布した。

⑤ 咸寧の五七幹部学校に下放した人々

咸寧の五七幹部学校に下放した人々は、家族を含めて六千人余りいる。当時は殆どすべての文化人が、ここ咸寧に集められたのである。どんな人がいたか。主な人々を幾つかのグループに分類すると、次のようになる。⁽⁶⁾

1 文化部の指導者：李琦（副部長）、趙辛初（副部長）、徐光霄（副部長）、周巍峙（部長代理）、司徒慧敏（のち副部長）、吳雪（のち副部長）、仲秋元（のち副部長）、馬彥祥（顧問）など。

2 作家・詩人：沈從文、馮雪峰、冰心、張天翼、陳白塵、李季、張光年、嚴文井、樓適夷、孟超、蕭乾、郭小川、臧克家、韋君宜、牛漢、綠原など。

3 評論家：侯金鏡、馮牧、許覺民、閻綱など。

4 翻訳家：金人、孫用、納訓、趙少侯、劉遼逸、文潔若、許磊然、陳羽綸、孫繩武、蔣路など。

5 画家：邵宇、鄒雅、劉繼卣、馮忠蓮、李平凡、秦嶺雲、盧光照、許麟廬、張世簡、林鏊、張立辰、張広、徐希、范曾など。

6 書家：李長路、劉炳森、謝冰岩、佟韋、王景芬など。

7 出版家：陳翰伯、王子野、金燦然、史枚、陳原、王益、王仿子、丁樹奇、范用、宋木文、劉杲、薛德震、陳

早春、楊徳炎など。

8 文物の専門家：呉仲超、唐蘭、单士元、王治秋、龍潜、劉九庵、耿宝昌、徐邦達、史樹青、王世襄、羅哲文、謝辰生、呂濟民、楊伯達、胡繼高など。

9 学者：宋雲彬、楊伯峻、馬非百、趙守儼、陳邇冬、王利器、顧学頤、傅振倫、程代熙、林辰、周汝昌、周紹良、金冲及、王士菁、傅璇琮など。

10 編集者：鄭效洵、張惠卿、李侃、江秉祥、崔道怡、何啓治など。

11 映画関係者：唐瑜、洪臧、季洪、丁達明、胡健、韓生義、石梅音、王君壮、楼青蘭、劉建中、康玉潔、徐真、陳宝国（スター）など。

12 書籍出版関係：汪軼千、鄭士徳、杜克、曹辛之（装丁デザイン）など。

13 民間芸術家：傅雪漪、木非など。

以上の分類は、所属に従ったものであるが、このうち、次の十五名は、作家協会の「黒い線の仲間」とされた者である。

陳白塵、陳黙、馮牧、葛洛、韓北屏、侯金鏡、黄秋耘、李季、劉白羽、劉劍青、塗光群、嚴文井、張光年、張天翼、張禧。

また、陳遼によれば、心理的には次の幾つかに分かれるという。⁽⁷⁾

1 ごく少数の確信のあった人：蕭乾、張光年、潔泯（＝許覚民）、張惠卿、閻綱など。

2 確信などないところから確信するまでの過渡的な人で：

(1) 五七幹部学校に来たのは、毛主席の革命路線を執行するために、労働を鍛錬して、思想を改造するのだと

する者：郭小川を代表とする。

(2) 五七幹部学校を避難港とする者：謝永旺を代表とする。

(3) 五七幹部学校において、心静かに少しも激動せず、悲観もしない。遙か青い空白い雲を見、緑の水青い山に對し、冷やかな目で文革の発展を觀察する者：冰心を代表とする。

(4) 身は向陽湖にありとも、心は周總理と繋がるとする者：周巍峙を代表とする。

(5) 非常に少ないが、五七幹部学校の生活に慣れ、天地広大な咸寧で、多くの詩篇を書いた者：臧克家を代表とする。

以上からわかるように、確かに五七幹部学校に対する心構えや心理は複雑で、一つに固まっていたわけではないことがわかる。

⑥ 組織について

当時は、中国人民解放军毛沢東思想宣伝隊が五七幹部学校に駐留して軍代表が全面的に指導をした。この下に、咸寧では五つの大隊と、二十六の中隊があった。人民解放军に見習って組織が作られたのである。

第一大隊：文化部事務局、政治部、政治研究室、映画局、芸術局、出版局、文物局、計理財務課、連絡課、教育課、群文課など。

第二大隊：北京図書館、文物出版社、文博研究所、中国革命博物館、故宫博物院。

第三大隊：新華書店本店、北京発行所、貯蔵運輸公司、中国印刷公司、中印器材公司、人民出版社、農村読物出

版社、人民美術出版社（荣宝齋）、版本図書館、紅旗越劇団、勇進評劇団など。

第四大隊：中国作協、中国文聯、人民文学出版社、商務印書館、中華書局、北京印刷技術研究所など。

第五大隊：中国映画公司、器材公司、中国映画発行放映公司、ニュース記録映画製作所、科学映画製作所、中国映画科学研究所、現像所、スライド工場、中国映画資料館など。

以上の五つの大隊につき、それぞれ五つほどの中隊が所属していた。第四大隊配下の中国作家協会は第五中隊であった。沈從文、馮雪峰、冰心、樓適夷、張天翼、孟超、陳白塵、蕭乾、郭小川、李季、臧克家、張光年、嚴文井、章君宜、牛漢、綠原、侯金鏡、馮牧、許覺民、閻綱など百十八名の有名な作家がおり、家族を入れて約百五十名がここに所属した。人民文学出版社は第十三中隊であり、作協と隣り合わせであったという。

⑦ 他の主な五七幹部学校について

上述したように、全国で一五〇〇ほどの五七幹部学校があったのであるが、一番早く出来たのは、黒龍江省慶安県柳河五七幹部学校である。規模が一番大きかったのは、江西省の中央弁公庁の五七幹部学校で、これは中央の機関幹部が下放した。冰心の長女・呉冰は、夫の李志昌が外交部（日本の外務省に当たる）に勤めていたので、江西省上高県の外交部五七幹部学校に、息子の李丹とともに家族三人で下放した。

次に規模が大きかったのが咸寧の五七幹部学校であった。文化部の管轄には、咸寧と天津の団泊窪五七幹部学校の二つがあり、天津の団泊窪の方は、一九七四年十二月に、審査が終わっていない者や、仕事の配分がまだ決まっていない者を集めた。最初は、天津の宝坻などにあつたが、静海の団泊窪に定まった。

河南省の息県には、中国社会科学院（哲学社会科学部）の五七幹部学校があった。『紅樓夢』研究で名高い俞平伯が六十九歳の高齢で下放したことも有名である。最初は河南省信陽の羅山に五七幹部学校を開設した。ここでの生活を描いたものに、楊絳『干校六記』がある。

そのほか、中央民族学院の湖北省沙洋五七幹部学校など多数あるが、最後に地方の五七幹部学校に触れておこう。中央の機関の五七幹部学校があるだけでなく、地方政府の機関の幹部が下放する五七幹部学校もあったのである。そのうち有名なものは、上海市の奉賢五七幹部学校である。そのほかに西安市の五七幹部学校が延安の南泥湾にあった。

上海市の奉賢五七幹部学校は、巴金も下放したところであるが、詩人・聞捷も下放させられた。その時、造反派として聞捷を管理し、監視する側であった戴厚英という若き女性が詩人の人柄に打たれ、恋をし、二人は結婚まで申請することになった。この結婚は許可されないまま、聞捷がガス自殺して終わった。戴厚英は後年、このことをもとに、『詩人之死』という長編小説を書いた。⁽¹⁰⁾

奉賢の五七幹部学校に一九六九年冬から七五年九月までの六年間下放した丁景唐によると、上海市の五七幹部学校は二箇所あったようだ。一つは一九六九年から七二年にかけて奉賢塘外にあった文化局系統の幹部学校である。ここには作家協会が含まれている。もう一つは、一九七二年秋に奉賢柘林の新聞出版社五七幹部学校があった場所に、新聞出版、映画、文化の三つの五七幹部学校を併せて統一した、文化五七幹部学校である。新聞出版五七幹部学校は部隊の制度に倣って二つの大隊に分かれていた。一つは、『解放』『文匯』『新民』の三紙と一放送局（人民放送局）の九つの中隊であり、もう一つは、出版局の行政部門と局に所属する十数個の出版社であった。総計三千五百人から四千人に達した。映画五七幹部学校は新聞出版社の南側にあった。文化局系統と作家協会などが組織し

た文化五七幹部学校は、塘外の杭州湾ベリのもう一つの荒れた砂州にあった。新聞出版社五七幹部学校との間には、解放军の射撃場や農場がある広大な土地が広がっていた。この文化五七幹部学校には、巴金、孔羅荪、王西彦、王元化、吳強、杜宣、函子、黄宗英などの著名な文芸家や俳優がいたという。

⑧ 時期区分

賀黎・楊健の「前言」によれば、五七幹部学校は、次の三つの時期に分かれるという。⁽¹²⁾

草創期（一九六八・七〇年）と、落潮期（一九七二―七四年）、そして晩期（一九七四―七六年）の三期である。落潮期は七一年九月一三日の林彪がモンゴルで墜落死したときより始まる。このニュースが幹部学校に伝わると、それは勿論秘密情報であったのだが、すっかり厭戦気分が広がったという。七四年からは、江青が鄧小平の復活に対して「右傾翻案風」反対のキャンペーンを起こして、五七幹部学校をまた持ち上げたことから始まるが、七六年十月初めの「四人組」逮捕で終了することになる。

注

(一) 李城外「話説向陽湖」【転帖】咸寧向陽湖中央文化部五七幹校 <http://bbs.chubei.com/dispbbs/aspboardid=74&id=464948>より。

ここでは、中央一級の機関が開いた「五七」幹校が百六ヶ所あり、各省に計千四百九十七ヶ所あったとされている。李城外は湖北省咸寧市の出身で、「幹校文化」を思考して咸寧から文化を起こそうとしている。咸寧市版權局局長。著書に『向陽湖文化人采風』や『向陽情結』などがある。

- (2) 建国以来十七年間の文芸界は、毛沢東思想に対立した反党・反社会主義の黒い線が独裁してきた反革命文芸路線であると、江青が六六年二月の『部隊文芸工作座談会紀要』に纏めた。黒い線とは、ブルジョア階級の文学・芸術思想、現代修正主義の文学・芸術思想と、三〇年代の文学・芸術思想とが結びついたものとされた。後に文芸界だけではなく、学術教育等の文化面にも拡大され、知識人が「黒い線の仲間」として弾圧された。なお、「牛鬼蛇神」とは悪質分子を意味する比喩的言葉であるが、中央特捜班などの審査に掛けられ、拘禁された者を指して言うことが多い。
- (3) 資本主義の道歩む実権派を闘争によって打倒することが「闘」であり、ブルジョア階級の反動的な学術権威とそのイデオロギ―を批判することが「批」である。教育や文芸を改革し、社会主義の経済基盤に適さないすべての上部構造を改革することが「改」であった。これは、一九六六年八月八日の「プロレタリア文化大革命に関する決定」に基づいていた。実際には、党や政府機関の走資派幹部や、反動的、ブルジョア的な考えを持つ学者や作家のつるし上げが行なわれた。文革の進展によって内容が変化し、特に「改」は進まなかった。
- (4) この事について詳しいことは、拙著「過去の残影——咸寧の五七幹部学校について」(関西大学『中国文学会紀要』第一八号所収)を参照されたい。(本書七九頁以下がそれである。)
- なお、「五一六分子」とは、一九六七年五月一七日に公表された毛沢東の「五一六通知」に基づき、「中央文革小組の設置、党・政府・軍と文化界のブルジョア階級の代表的人物」や「フルシチョフのような人物」の批判・更迭」を要求するグループのことを指す。江青が「プロレタリア司令部、人民解放軍、革命委員会を批判した者」を「五一六分子」と定義したため、全国で数百万人の幹部や大衆が迫害されたという。
- (5) 咸寧五七幹部学校の生活については、陳白塵著『雲夢斷憶』(生活・読書・新知三聯書店、一九八四年一月)が詳しい。
- (6) 同注(1)。
- (7) 陳遼「論『千校文化』」(『咸寧学院学報』第二四卷第二期)。
- (8) 何西来「往事如烟」(賀黎、楊健采写『無罪流放——六十六位知識分子五七千校告白』(光明日報出版社、一九九八年九月、所収)にやや詳しく触れている。

- (9) 中央民族学院の五七幹部学校は、湖北省潜江市にあつて、沙洋県ではない。このことについては、拙著『探花嚙語』（三恵社、二〇〇九年三月）を参照されたい。
- (10) このことについては、拙著『文化大革命と文学者』（竹内実編『文学芸術の新潮流』岩波講座 現代講座第五卷、一九九〇年一月、所収）を参照されたい。（本書三頁以下がそれである。）
 なお、黄宗英「但願長睡不願醒」（賀黎、楊健采写『無罪流放——六十六位知識分子五七千校告白』（光明日報出版社、一九九八年九月、所収）でも触れられている。
- また、奉賢『五七千校については、二〇〇四年二月に、上海に留学していた関西大学大学院生・水野善寛君に、現地に行つて写真を撮ってくれるように頼んだ。水野君は、実際に奉賢「塘四線」までバスを乗り継いで行き、今は「上海市財貿管理干部学院分部」と看板のある敷地を調査してくれたが、すでに「五七千校当時のものは、レンガ造りの倉庫以外は殆ど残っていないかつたし、当時を知っている人もそこにはいなかった、という。彼が撮つた写真は、CDに入れて私が保持している。彼の名前を特にここに挙げて謝意を表する。
- (11) 丁景唐「柘林殘夢」（賀黎、楊健采写『無罪流放——六十六位知識分子五七千校告白』（光明日報出版社、一九九八年九月、所収） 丁景唐は、一九二〇年四月二五日の生まれ。詩人。上海出版局副局長、上海文艺出版社社長などを勤める。魯迅や左聯の研究者としても有名である。
- (12) 賀黎、楊健「前言」（賀黎、楊健采写『無罪流放——六十六位知識分子五七千校告白』（光明日報出版社、一九九八年九月、所収）。また、拙著『過去の残影——咸寧の五七幹部学校について』（本書七九頁以下がそれである）も参照されたい。

四 過去の残影

はじめに

文革は、正式にはプロレタリア文化大革命と言⁽¹⁾い、ここでは文革と略称するが、今から見れば、壮大なるバカなことのように思える。この驚くべき過去は、一人二人がしたバカなことではなく、何千万、何億もの人間が同時にしたバカなことであることに特徴がある。世界でも古今でも類を見ないがゆえに、壮大なると言うのである。しかし、どんなに今から見てバカなことであっても、その当時においては、やる方も真剣であったし、又、やられる方も真剣であった。それなのにバカなことというのは、死者や障害者を、その真剣さゆえに出したからである。

人は、過去の一こまを振り返ると、バカなことをしたと思うことがある。過去というものが一こま一こまの堆積であれば、人はバカなことの累積で生きているのかもしれない。バカなこと、滑稽なことは、しかし、真剣であることから生じている。文革中の、赤い宝物と称された『毛主席語録』を振りかざして、絶叫する紅衛兵を見るが良い。批判大会で首から罪状を書いた鉄板をぶら下げられている指導者や作家の写真を見るが良い。私には滑稽でバカげたことに見えるが、その時彼らは、実に真剣に対処していたのである。何に真剣に対処していたかというなら

ば、彼らは勿論「革命」に対処していたのである。これからの良き社会を作るために、旧悪を排して、新しい社会と自己の再生とを信じての真剣さであった。このことを忘れては、文革のもう一つの面を見失うことになる。

すなわち、文革は、三大差別の解消を実行するための一つの試みであったのである。農業と工業、都市と農村、頭脳労働と肉体労働のこの三つの差異を如何に少なくし、無くすかを目指す、壮大な実験のために、人々は「革命」に投じたのであった。

三大差別を解消するために、すなわち差別のない社会にこの世を改造するために、知識人は真つ先に肉体労働を体験し、労働者・農民の世界観を身につけようとした。すなわち、上級幹部が直接生産現場に下りて労働し、自分の工作态度や思想をチェックすること。これが「下放」ということであった。⁽²⁾

とはいえ、その熱気が冷めた時、そこに見る自らの過去は、あまりにも矮小で、貧弱で哀切なものであった。私がかつたこととして打ち消すことは出来ないものであろう。

今、張光年の『江漢日記』⁽³⁾から、一部を引用してみよう。一九八八年十月一五日の日記である。

☆多分、堤の周りに雑草が一杯生えてしまったのが原因であろうが、私には向陽堤の高さが低くなってしまうように感じた。当時の勇壮な景観とはまるで違った。堤に登って遙かに湖面を望み見て、私はびっくりした。我々が当時初めて咸寧に着いた時に見た、あの鏡のような水をたたえた湖ではない。しおれた蓮や葦の茂みが雑多に生えているのだ。湖を囲んで田んぼを作ったが、そこに縦横に走る田のあぜ道さえ、また、拙い手つき鈍な足つきで開墾した張り巡らされた碁盤のような水田も、麦畑も、みんな跡形もなくなっていたのだ。

今、見えるのは、目一杯の干からびた湖と荒れた草地であり、雑色の羊と牛の群れである。向陽湖はなくなつてしまったのだ。稲の田んぼも、麦の畑も、野菜畑もなくなつた。あの時、我々第五中隊の陳白塵や侯金鏡同志がアヒルを放した長い溝の浅い水溜りは、彼らと日差しを除け、雨を避けた柳の木陰と共に、なくなつたのだ。⁴

ここには、あれだけのことをした五七幹部学校の喪失に対する驚きの目がある。ここには、過去に注いだ、それは自らの生命を込めて注いだ、人の営為が何の価値もなく捨て去られたという無念さが滲み出ている。

この引用の後、張光年は五七幹部学校が閉鎖した後、あのような大勢の労働力がなくなつたので、今や間に合わせの牧場になってしまったことを述べ、滄海變じて桑田になると言うが、荒湖變じて牧場になつた、と時の移り変わりの無情さに慨嘆している。

人は過去を振り返り、過去の人生を確認したがるものだ。この文章にある驚きは、過去の変えがたい人生が、なんとバカらしく、矮小で、貧しいものであつたかと認めざるをえない無念さに裏打ちされている。過去を冷静に見れば、この「向陽湖」や湖を巡る堤だとして、決して光り輝くものではなかつたはずだ。しかし、人はそこに自らのある思いを込めて新たな一ページを開こうとしたのだ。それゆえに、過去すなわち、その時は、大きく、厳然と動かしがたいものとして自らに対処していたのであろう。

ある種の夢心地から目覚めた時、そこに見る実態の貧相な哀切な姿を、現在の生から無視し、軽蔑し、排除することが可能であるのか、私にはわからない。但し、多くの作家たちは過去を時間の距離に比例して懐かしみ、着色して思い出す。文字というものが必然的に、過去を良きものとするからであらうか。貧相な哀切な姿がそこにあれ

ば、バカげた過去に嫌悪を示すかもしれないが、普通は、人は一層良き残影として過去をいとおしむに違いない。「彼らと日差しを除け、雨を避けた柳の木陰」が当時如何に辛い、艱難の生活によるものであったかに関係なく、すでに残影として瞭に見えるそれは、浄化されているような気がする。

私には過去が回想され、いとおしむ作家の気持ちも嬉しく読むが、過去の実態を幾らかでも明確にすることにも、関心がある。文化大革命の下の知識人たちの生活について、幾つかの回想録が出ているが、過去をバカなこととしてスタンスを求めたい。

一

ここで、上述の引用につき、幾つかの説明をしておこう。

まず、張光年であるが、一九一三年に生まれ、二〇〇二年一月二八日に死んだ。湖北省光化（現在の老河口市）の人。筆名、光未然。詩人で、「黄河大合唱」の詩が特に有名。この四百余行の詩を彼は一九三九年三月一日に延安で朗誦した。それを聞いた冼星海が六日間窑洞に籠もって曲をつけ、全国に広まったというエピソードがある。『文芸報』主編、中国作家協会副主席、党組書記などを歴任。詩集『五月的鮮花』や論文集『戲劇的現實主義問題』などがある。⁽⁶⁾

張光年は、一九六九年から一九七二年まで、文化部が設置した「咸寧五七幹部学校」に下放した。彼は文革が始まると、「文芸の黒い線の仲間」として、江青や康生などが作った「中央專案組」の直接管理に置かれ、北京で「隔離審査」を二年間受けた後、何度か申請書を出して、やっと咸寧の幹部学校に下放することが許可された。⁽⁷⁾

「五七幹部学校」についての説明は、ごく簡単にするが、⁽⁸⁾一九六六年五月七日に毛沢東が林彪に送った指示に基づいている。毛沢東は「軍隊は大きな学校となるべきであり、政治・軍事・文化を学び、生産活動を行え」と主張した。そして、「労働者・農民・学生・機関幹部も同様の学習をしなければならない」と言った。この指示は五月一日に全国に伝達され、八月一日の『人民日報』の「社説」が「各業種もみな工と農、文と武を実践する革命の大学校となれ」と号令をかけた。これ以後、各地に「五七工場」「五七農場」「五七大学」などが設置された。

「五七幹部学校」は全国に千カ所以上作られ、中央から県レベルまでの幹部が送り込まれた。最初に出たのは、黒龍江省の柳河五七幹部学校であり、一番大きなものは、中央弁公庁系統が設けた江西省にあつたもので、ここに登場する張光年が下放した湖北省咸寧の向陽湖文化部五七幹部学校は、規模として二番目に属する。文化部には、江青が力を入れた天津静海团泊窪五七幹部学校もある。他に有名なものとして、楊絳やそのご主人である錢鍾書が下放した中国科学院哲学社会科学部五七幹部学校が、河南省の羅山にある。⁽⁹⁾また、当時造反派であつた戴厚英が批判対象の詩人・聞捷を愛し、結婚しようとした中国作家協会上海分会の奉賢上海文化五七幹部学校などがある。⁽¹¹⁾こ

こは巴金もいた所であつた。⁽¹²⁾

五七幹部学校を時期的に分けると、一九六八年から一九七〇年までの草創期、一九七一年から一九七三年までの落潮期、そして一九七四年から一九七六年までの晩期に分けられるという。

草創期：穀物、油、肉、卵の「四自給」のスローガンに見られるように、生活、生存が最大の目標であつた。塩やアルカリの荒れ果てた土地、平原丘陵の土地に素手で住む家を建てることから始めた。田植えや種まき、日干しレンガや家造り、囲いを作って豚を飼ったり、開墾して野菜を植えたりするなど、生存のために奮闘した。原始的に人が犁などを引っ張ったり、天秤棒を担ぐ労働で苦勞した。おまけに、「昼間労働、夜批判」という階級闘争の

過酷さがあつた。

落潮期：林彪が墜落した一九七一年の「九・一三事件」の後、目に見えて規律が弛緩した。一九七二年から周恩来首相が中央の日常工作をつかさどり、「幹部を解放して、幹部を使用する」ようになったので、多くが幹部学校を離れた。

晩期：一九七四年の初め、江青らは「右傾翻案風に反撃する」運動を開始した。そして「五七幹部学校」を「新生事物」だと鼓吹した。江青は「老幹部の七五％は民主派だ。民主派が走資派になるのは、客観的な規律だ」と言い、「四人組」が逮捕されるまで五七幹部学校を続けた。⁽¹³⁾

以上が、五七幹部学校の大略である。

この咸寧の五七幹部学校について、張光年は次のように書いている。

☆中国作家協会が咸寧の向陽湖に分配した人たちは、第五中隊に編入された。人民文学出版社の人が第一四中隊として隣におり、それぞれ一つの小さな丘に居を構えた。日の出（それ以前から）に起き、日の入り（それ以後まで）に憩う。建物建築、野菜を植えること、堤を築くこと（湖の周りに田んぼを作ること）、並びに膝まで浸かつて田植えを学ぶこと、草を抜くことなどの労働に従事した。実は、日入りて憩うべき夜が一層緊張した。というのも各班や小隊ではしょっちゅう夜を利用して「学習」したり、「走資派」を批判したり、「五一六」分子を批判する会を開いたからである。⁽¹⁶⁾

下放した人々は軍隊組織に学んで、中隊とか小隊などに編入された。咸寧には家族係累を合わせて約五千八百人

がいたという。作家協会からは、張光年、侯金鏡、謝冰心、臧克家、張天翼、嚴文井、李季、郭小川、馮牧、葛洛などの有名作家を含めて百十八人、家族を入れて約百五十名がここに下放した。葛洛、甘棠惠、夏更起、劉劍青など第一陣が一九六九年四月一日に行き、十一月三〇日には陳白塵たち第二陣が下放した。

一九七二年十二月に咸寧五七幹部学校が事実上取り止めになり、⁽¹⁷⁾ そのあとは咸寧地区がこの場所を向陽湖農場とし、一九七五年、そこは国営になった。一九八〇年には咸寧地区乳牛良種場となった。当時の第五中隊や第一四中隊が住んだ建物は、一九八八年張光年が再び行った時には牛小屋になっていたという。⁽¹⁸⁾

牛小屋と言っても、ここでは本当の乳牛の小屋であるが、文革時期には、「牛小屋」と言えば、「牛鬼蛇神」と言われた者が入れられた私的監獄を指して言った。一九四九年以来十七年間中国の文芸を指導してきた者たちは、徹底したプロレタリア路線をとらなかつたという批判のもとで、「黒い線」を推し進めたと言われたが、そういう人たちは「文芸の黒い線の仲間」と言った。殆どの文芸工作者が「走資派」（資本主義、ブルジョア路線を歩む者たち）として批判の対象になった。そういう人たちは、労働者宣伝組などの指導の下、「革命大衆」と言われた他の文芸関係の知識人が批判し、革命を進めていることにしたのである。⁽¹⁹⁾

一般の下放した文芸工作者たちは、毛沢東の呼びかけに応え、本当に一生を貧農・下層中農（或いは肉体労働者）に学び、農民となる覚悟で咸寧にやって来た。北京を出る時には、家も家財も売り払って来た者が多い。彼らは自分たちの思想改革は肉体労働によって改善されると深く信じたのである。⁽²⁰⁾ だから、「革命大衆」と言われたのである。勿論、この覚悟は、張光年のように「文芸の黒い線の仲間」の間でも同じであったから、殆どすべての文芸関係者はこの咸寧に、農民となる覚悟を以ってやって来たのであった。

だが、その実態はどうであったかと言えば、楊絳や陳白塵がその回想記で書いているように、貧農・下層中農に

学び交流するどころか、却って乖離し分断するものであった。

☆このような不毛の地にわれわれ幹部学校は「桃源郷」を作り出そうとしていた。——別の言い方をすれば、私たち文化人を今からここに定住させ、徹底的に改造して額に汗する労働者とし、もとの文化関係の仕事には永久にもどきないということであった。これはまさに「文化」の「命」を「革（と）り除く」ということである。この解釈には根拠があるように思われる。その一は下放の動員の時に、老人子供を連れて一家全員で行くように特に強調されたことだ。その二は、この農民がわれわれを題材に作った順口溜（民間の口語詩）だった。その詞にいわく、／「五七宝ちゃん、五七宝ちゃん、／着物はボロボロ、食事は上等、腕にでっかい腕時計、／五七宝ちゃん、五七宝ちゃん、／たくさん 播いて、とり入れ少し、／北京には帰りたくても帰れない」（略）

「たくさん播いて、とり入れ少し」についていえば、これも実情だった。その原因は簡単である。耕作ができない。または播時を知らないせいである。お百姓たちは次の文句で私たちのことをたくみにいい表している。／「大雨で大働き、／小雨で小働き、／晴天は働かない」／「大雨で大働き」というのは、私たちは皆「一に苦を恐れず、二に死を恐れない」革命者であったから、雨がたくさん降れば降るほどはりきって働いたのだ。それでこそ革命精神を表現できるというわけだ。しかし、ある日麦刈りの最中に雨が降りだし、みんなは、「中止だ、刈るわけにはいかない」と言ったのだが、われわれの中隊長は類まれなる雄々しきで叫んだ。「お天道様とあくまでも張り合うんだ！」。麦はもちろん全部刈りおえた。しかしお天道様は、この努力をかってくれなかった。三日間雨が降りつ放して、刈りとった麦はすっかり腐ってしまったのだ。「小雨で小働き」は注

積はいらないだろう。「晴天は働かない」というのはまたなぜか。答は「会議」である。革命は規律を重んじなければならぬ。中隊本部ですでに決めた計画に従い、会議を開くと決めた日には必ず会議は開かねばならぬ！これがすなわち「たくさん播いて、とりいれ少し」のゆえんである。⁽²¹⁾

長い引用になつたが、ここから、知識人の五七幹部学校での実情がよくわかるであろう。知識人と下層の農民とには抜きがたい格差があつて、その中間に存在した造反派が如何にバカげた指導をしたかがよくわかる。⁽²²⁾農民の「あんたたちの幹部学校は口さえ開きや貧農下層中農に学ぶというけど、あんたたちときたらおれたたちの意見をきかないんだ。作物を植えるのだから、おれたたちのいうことを信じない。大雨に大働きで……」⁽²³⁾という言葉が示すようにに理念と実態との乖離ははなはだしかった。しかもこの実態を目の当たりにした造反派が事態の修正を活かそうとしない所に問題がある。革命にせよ、その造反派者にせよ、物事を推し進める時には、往々にしてよい発想とひらめきがあるものだ。ことを推し進めることの快楽がここにある。だが、ここに報告されているように、五七幹部学校にはどの面からも、そういう活き活きした柔軟性がなく、上意下達の硬直した技巧と発想だけが目に付く。文革の知識人への側面は大きく言つて二つあつた。一つは、「牛鬼蛇神」と言われた文筆に携つた者への迫害である。もう一つは、「貧農・下層中農」に学んで一生を農民（或いは肉体労働者）として暮らすということである。私は過去に、第一に挙げた迫害の面から、「文学者の死」という論文を書いたことがある。その中で、侯金鏡が幹部学校で如何に悲惨な目にあつたかを書いた。⁽²⁴⁾「現行反革命」とされた侯金鏡は懲罰的な重労働をさせられたが、彼について陳白塵は次のように書いている。

☆八月八日 日曜

侯金鏡同志は今朝突然亡くなった。悲しみこの上ないことだ！ 昨日、彼は野菜班にしたがって田んぼ開拓の大労働にやって来た。中隊に戻ってから、Sが彼に野菜畑への水汲みを無理にやらせた。連続して十回も天秤棒で水を汲んだ。夜十時、心臓病が急に起こり、救急が間に合わず、明け方哀れにも急逝した。Sというこの「積極分子」は、間接的な殺人犯だ！侯金鏡は有名な病氣持ちだ。たとえ配慮をしてやらなくても、このように人を痛みつけることが出来たであろうか。

侯金鏡がアヒル番の時、しょっちゅう病氣を起こしていたので、危険を感じて私は小隊長に彼を配置換えすることを提案した。彼の身体のことを配慮したのだ。凶らずも、侯金鏡は野菜班に戻り、私のもとの持ち場になった。おまけに労働量が増えた。これは私の初心と全く相反することであった。

「私は伯仁を殺しはしなかったが、伯仁は私によって死んだのだ！」⁽²⁶⁾ 私はいつの間にか共犯者となっていたのだ。こう思うと悲痛の中に無限の悔恨が加わる！

この文章の特徴は「S」という人物が出てくることである。ここに出てくる「S」というのが誰を指すのか不明であるが、作協の造反派で小隊長であった。侯金鏡や陳白塵などを管理する者である。陳白塵の日記には、「S」は一九七〇年二月二三日以来、十六回も出てくるが、「S」は陳白塵にも侯金鏡にやらせたような水汲みや下肥の桶を何度も担がせている。陳もやはり肥桶を何度も野菜畑に担いで行ったのである。造反派としては、侯や陳のような「牛鬼蛇神」に肉体労働で酷使することが「革命」の唯一の手段になったのであろう。

但し、侯金鏡が如何に苦しくても、またここで陳白塵を加えても良いが、自分の体調の異変を感じても、肉体勞

働を回避しなかったのには、上述の第二の側面、肉体労働こそが唯一の思想改造の道、すなわち再生の道であると固く信じていたからである。このことを強調しておこう。今となれば、自らの死に代替出来るわけではないバカバカしい行為に違いないが、過去をバカバカしいと評価する不遜さを私は持つていない。

一一

侯金鏡は、張光年が言う「アヒル」の飼育にも携わったが、のちに野菜畑の管理に移り、その過労で死んだ。アヒルの飼育に力を入れていたのは、そしてアヒルに愛情を注いだのは、陳白塵であった。彼の『雲夢沢の思い出』——文革下の中国知識人』にはそのことが詳しく書かれている。⁽²⁷⁾

その陳白塵には、また『牛棚日記 一九六六—一九七二』という回想記がある。これは、生活・読書・新知三聯書店から一九九五年五月に出版された二三三頁の本である。本人の「前言」（一九九四年一月二十八日于南京）があり、娘の陳虹の「后記」（一九九四年十二月一〇日）がある。

この『牛棚日記 一九六六—一九七二』には延べ三百七十六人の人名が出てくる。労働者宣伝隊の者や軍宣伝隊の者、「專案組」（特捜部）の者まで、時には「××」とか「王某」、あるいは「S」や「Y」などイニシャルで出てくる。他には陳白塵の身内の者、奥さんの「金玲」は33回も出てくる。一番多く出てくるのは、49回の張光年と張天翼であり、次が劉白羽の44回である。この四人（陳白塵を入れて）は同じく「專案組」に早くから取調べを受けていた者であり、それぞれ、『人民文学』や『文芸報』の主編や副主編を勤めていた仲間である。いわゆる「文芸の黒い線の仲間」なのであった。

より正確に言えば、一九六六年八月八日に、プロレタリア文化大革命の決定が公布され、作協に造反派が出来た。彼らが造反した対象は、作協の党組と書記処の指導者たちであった。そこで作協の「牛鬼蛇神」となったのは、劉白羽、嚴文井、張光年、李季、馮牧、侯金鏡、張天翼、張儻、葛洛、韓北屏、陳默に、南京から連れて来られた陳白塵、広州から引き戻された黄秋耘の十三名であった。後に劉劍青と塗光群が加わったので十五名になった。⁽²⁰⁾ 彼は「牛棚」(牛小屋)にいれられたばかりではなく「抄家」(家宅捜査)にあい、肉体労働を強いられ、行動の自由は勿論なかった。

彼らが、咸寧の五七幹部学校に下放しても、やはり造反派の監督を受けた。というより一層厳しくなったと言っても良いかもしれない。したがって、陳白塵の日記も、彼が咸寧の五七幹部学校に下放した一九六九年十一月三日からは、俄然造反派の人間が出てくる回数が多くなる。以下の表は、陳白塵の五七幹部学校に下放してから4回以上出てくる人物の表である。

「表」：陳白塵の『牛棚日記』一九六九年十一月三日以降に出てくる人物の回数。

杜麦青：6回	馮牧：5回	侯金鏡：5回	李季：9回
嚴文井：4回	張光年：8回	張天翼：5回	
老趙：9回	小李：4回	××：23回	×：16回
L：4回	R：5回	S：16回	W：9回
		Y：11回	Z：5回
金玲：13回			

「表」の右側は、所謂「文芸の黒い線の仲間」である。杜麦青は『人民文学』の副主任であった。左側の「金玲」は南京にいる陳白塵の奥さんであるから、出てくる回数が多いのは当然としても、それよりも多いのが中段の「××」

の23回であり、「X」と「S」の16回である。彼らの名前はイニシヤルなどによって、すでに我々にはわからなくなっているが、そこに込めた陳白塵の気持ちは理解できよう。

☆まるまる七年の間、父は中国作家協会の「牛小屋」に半ば幽閉されながら、毎夜人が寝静まった深夜に、こつそりと起き上がって、ただ父だけが見てわかる符号と各種の「縮写」で、あの「偉大な」時代を記録したのだ。私は父に聞いたことがある。「こんな大きな危険を冒してこんな日記をつけるなんて、一体どんなつもりだったの？」父は冗談のように次に答えた、「ただ、一旦いつの日か誰かがお前たちの『犬の老人』がどんな人かを尋ねた時に、これを持ち出してありのままに述べるためにだよ」と。これは父のユーモアだろう。がまた、憤りでもあろう。——父の字や行間から確かに一つの忠実な心を、誠実な心を、そして、ドクドクと血の流れる心を見ることが出来るではないか！

これは、娘の陳虹の「后記」の言葉である。人でなしということから「犬の老人」と罵られた陳白塵の確かな憤懣が、彼の日記にも現れている。彼には、「ありのままに」語りたいという強い欲求があった。彼自身が知る真実をいつか世の人が知ってくれるという強い欲求である。それは自分がこの時誠実に忠実に生きたという強い信念があるからであろう。自らの生への強い矜持を感じることが出来る。

☆五月二一日 金曜

丁字河の野菜畑に行つてかぼちゃのために下肥を入れる。Sは、私が中隊に戻つて下肥を担いで来なければ

ダメだと言ひ張る。午前中に三回担いだ。往復五、六里ある。もう精根尽き果ててしまった。昼少し休んで、また一担ぎした。しかし、野菜畑からもう少しのところまで、少しも動けなくなつてしまった。胡海珠がこの様子を見て、駆けつけて助けてくれたが、しかし、××はまだ許さないで、もつと続けろと言う。中隊に戻つてみると、肥溜めはもう掬い尽くされて、僅かに二桶半しか残つていなかった。——糞が私を救つたのだ！「労働懲罰論」は確かに存在するのだ。⁽³²⁾

ここには「S」や「××」という者の、非人間的な行為が描かれている。彼らは人を改革しようとしたのかも知れないが、実体としては、あくどい残虐な行為をしたことにしかならない。人の生命への配慮と信頼がないからであらう。それ故、彼らは本名が書き残されていないのだともいえよう。

むしろここで注目されるのは、胡海珠⁽³³⁾のように、他人を助けることが出来る人物がいることだ。ほんの少しでも良い、こういう好意がどんなに人を救うものか、想像できる。そこには人間の本来持つ生の肯定面・善意が示されるからであらう。生の肯定を感じることは、どんなに苦しく困難な時にあつても、人を浄化し、力を喚起する。奇しくも、ここに出てきた胡海珠は、侯金鏡の妻であつた。

おわりに

過去を思い出したくないというのは、胡海珠もそうであつた。特に一九七一年の八月七日から八日にかけてのこととは思ひ出したくないと言う。それが、ご主人の侯金鏡が死んだ日であれば、十分理解できる。だが、いつかは胡

海珠もそうであるように、記録し残しておかねばと思うようである。そこには懐かしさだけではない、事実を残しておきたいとする、或いは真実を残しておきたいとする心の叫びがあるような気がする。この文章に拠れば、侯金鏡が言った「林彪はピエロみたいだ」という言葉を馮牧が漏らしてしまったことや、一九七一年に今まで抑えられていた給料の千二百元をそっくり党費として差し出したことなどがわかるが、次のような事実も伝える。

☆我想起丁力同志曾經告訴我、說金鏡同志去世那天（八月八日）早晨、一位「革命群眾」像是報喜似的、對正在湖里勞動的同志幸災樂禍地高聲喊道：「侯金鏡早上，格兒屁了！」³⁴。

侯金鏡は「現行反革命分子」（反革命現行犯）であつたので、革命大衆から批判される対象ではあつた。しかし、「報喜似的」（嬉しい知らせのように）「格兒屁了」（お陀仏になつたぞ！）と知らせる者がいる事実は、哀切極まりない。

とはいえ、陳白塵がそうであつた³⁵、張光年も数々の日記の存在がそれを証明しているように、人は結局のところ、過去から離れられないのであろう。過去とは自らの生であつたのだから。

他の言葉で換言すれば、文革という大きな外から加わつた圧力の中で、如何に自由に生を続けたかという被害者の矜持が、そこにはあるのであろう。³⁷

いついかなる時代でも、生命の強さは、我々を感動させる。過去にかけた生命は決してバカにできるものではないはずだ。

注

(1) 一九八一年六月二七日に中国共産党第十一期中央委員会第六回全体会議は「建国以来の党の若干の歴史問題に関する決議」を通した。その中で、文化大革命は一九六六年五月から一九七六年十月までと定められた。一九六六年八月八日には、党の八期十一中全会で「プロレタリア文化大革命に関する決定」が通過した。文化大革命の目的は、「資本主義の道を歩む実権派を打ち負かし、ブルジョア階級の反動學術『権威』を批判し、ブルジョア階級と一切の搾取階級のイデオロギーを批判し、教育を改革し、文芸を改革し、一切の社会主義の経済基礎に不適切な上部構造を改革するのである」と言っていた。

文革については、たくさんの本が出ているが、高阜・嚴家祺『文化大革命』十年史（天津人民出版社、一九八六年九月）が最も基本的な読み物であろう。

なお、ウェブサイトとして、溝口喜郎氏の「文革期文学研究」<http://www.goukou.com/>がある。

(2) 天児・石原等編『岩波 現代中国事典』（岩波書店、一九九九年五月）を参照した。

(3) 『長江文芸』一九八九年六月号から八月号まで、三回に分けて掲載された。一九八八年に張光年が故郷湖北の老河口市に戻った時のことを日記風に記したもの。

なお、上海遠東出版社から、『向陽日記』（一九九七年九月）や『江漢日記』（二〇〇四年五月）が出ている。また、『江漢日記』は『張光年文集 第四卷』（人民文学出版社、二〇〇二年五月）に収められている。

また、咸寧の五七幹部学校について、張光年は「自嘲」（賀黎・楊健編『無罪流放——六十六位知識分子五七幹部告白』光明日報出版社、一九八八年九月所収）という題で口述している。これはほぼ、上述の「江漢日記」と同じである。

(4) 『長江文芸』一九八九年第六月号二八—二九頁。

(5) 日本語訳として出ているものに、楊絳著・中島みどり訳『幹校六記——文化大革命下の知識人』（みすず書房、一九八五年二月）と、陳白塵著・中島咲子訳『雲夢沢の思い出——文革下の中国知識人』（凱風社、一九九一年五月）がある。

楊絳の原本『幹校六記』は、中島みどり氏の解説によれば香港から出たらしいが、今は『楊絳文集 第2巻』（人民文学出版社、二〇〇四年五月）に収められている。

陳白塵の方は『雲夢斷憶』という。これは生活・読書・新知三聯書店から一九八四年一月に出版された。一三三頁ほどの本である。

(6) 張光年のことは、たくさんの文学辞典に載っているが、ここでは主として、劉可興「光未然生平与文学活動年表」（『張光年文集第四卷』人民文学出版社、二〇〇二年五月所収）と、「張光年辭世」（『文芸報』二〇〇二年一月三十一日、第一面）及び「著名詩人張光年在京辭世」（『文学報』一二七〇期、二〇〇二年一月三十一日、第一面と第二面）に従っている。

張光年が「黒い線の仲間」になったことで、家宅捜査を二度受けた。父親はそのショックにより、脳血栓の発作を起こして死んでいる。弟・文華は沙洋の農場に労働改造にやられ、上の妹・張蓬、その下の妹・藍光とも「文芸の黒い線」の一味にされた。一番下の妹・張惠芳は、周揚の「黒い線」の一味とされて自殺した。張光年は、一九七五年六月「專案組」が解散したことにより、党籍が回復されたが、「反革命修正主義の文芸路線を推し進めた」という罪名は残っていた。一九八一年中央組織部は、徹底的に彼の名誉回復をした。一九七五年十月には、張光年は国家出版局の顧問となった。

なお、張光年は一九六五年四月に老舎を团长とする代表团で日本に来たことがある。私はまだ学生であったが、彼の出席する座談会に参加したことがあった。張光年は静かな人であったが、心底からの理論家という感じで凄みがあった。ここで、私が張光年をわざわざ出したのは、私なりのレクイエムのためである。

(7) この間のことは、注(3)の「江漢日記」（『長江文芸』一九八九年六月号所収）に従った。

なお、幹部学校に下放することは、辛い厭なことではなく、実は嬉しい良いことであったことを王炳根氏が教授してくれた。王炳根著・拙訳「文革中の謝冰心」（関西大学 文学論集、第五五巻第四号所収）一一七頁。

(8) 天児・石原等編『岩波 現代中国事典』（岩波書店、一九九九年五月）を参照した。

なお、賀黎・楊健編『無罪流放——六十六位知識分子五七幹校告白』（光明日報出版社、一九八八年九月）の「前言」にやや詳しい説明がある。また、李城外編『向陽情結——文化名人與威寧』（人民文学出版社、上二一九九七年、下二〇〇一年）がある。

(9) 楊絳著・中島みどり訳『幹校六記』（みすず書房、一九八五年二月）。この幹部学校は何度か移転を繰り返している。息県に移ったこともある。

- (10) このことについては、拙著「文化大革命と文学者」(竹内実編『文学芸術の新潮流』岩波講座 現代講座第五巻、一九九〇年一月所収、本書二八頁以下)を参照されたい。
- なお、黄宗英「但願長睡不願醒」(賀黎・楊健編『無罪流放——六十六位知識分子五七幹校告白』光明日報出版社、一九八八年九月所収)でも触れられている。
- (11) 奉賢の幹部学校に関しては、私は、当時上海にいた関西大学大学院生の氷野善寛君に奉賢に行つて写真を撮つてくれるように要請した。彼はそれを実行してくれ、写真を撮つて来てくれたが、一部の建物以外それらしいものは何も残っていないかつた。私は、ここに載せた「江漢日記」などで後で知つたのだが、立ち去る時は、自分たちが使つた建物も田畑さえも、綺麗になくしてしまふのであつた。幾つかのまだ使えるものを土地の人が要請して、許可が下りれば(それも少ないようである)残すようであるが、殆ど始末してしまふ。こういう考えに驚いたものである。残っていないのは、単なる年月の経過によるのではなかつた。
- (12) 王西彦「焚心煮骨的日子」(賀黎・楊健編『無罪流放——六十六位知識分子五七幹校告白』光明日報出版社、一九八八年九月所収)にも触れられている。
- (13) 賀黎・楊健「前言」(賀黎・楊健編『無罪流放——六十六位知識分子五七幹校告白』光明日報出版社、一九八八年九月所収)。
- (14) 人民出版社の下放については、楊静遠『咸寧幹校一千天』(長江文芸出版社、二〇〇〇年一月)があり、幹部学校の生活が詳細にわかる。
- 楊静遠は、一九二三年二月湖南省長沙に生まれた。父は有名な経済学者・楊瑞六、母は作家で商務印書館に勤めた袁昌英である。楊静遠は、一九四五年に武漢大学を卒業すると、アメリカのミシガン大学に留学し、修士号を取つた。帰国後、武漢大学外文系の講師になつた後、人民出版社に配属された。中国社会科学院外国文学研究所の編輯、編輯審定者、中国訳者協会理事などを歴任。翻訳に『ブロンテ姉妹全集』十巻や『ピーターパン』などがある。
- (15) 一九六七年五月一七日に公表された毛沢東の「五一六通知」に基づき、「中央文革小組の設置、党・政府・軍と文化界の『ブルジョア階級の代表的人物』や『フルシチョフのような人物』の批判・更迭」を要求するグループ。江青が「プロレタリア司令部、人民解放軍、革命委員会を批判した者」を「五一六分子」と定義したため、全国で数百万人の幹部や大衆が迫害されたという。以

上、天児・石原等編『岩波 現代中国事典』（岩波書店、一九九九年五月）を参照した。

(16) 同注(4)、二八頁。

(17) 一九七四年十二月に、残りの審査が終わっていない者や仕事の分配がまだの者を天津静海団泊窪五七幹部学校に入れた。詩人の郭小川はここで「団泊窪的秋天」を書いた。

(18) 同注(4)、二八頁。

(19) 黄慶雲『我的文化大革命』（OXFORD、二〇〇六年）に拠れば、「我々の広東作協について言えば、当時は作家、運転手、雑務係の人を入れても全部で三十九人に過ぎなかった。このうち、牛鬼蛇神にされたのは十九人（みな作家である）で、一人が自殺し、六人が別のリストに載せられた。造反派になって隊を間違えて所属していたのが四人いた。残りの者で革命大衆と言われた者はたった九人に過ぎなかった」（二四頁）と言っている。これは、広東の例であるが、牛鬼蛇神にされた作家が率として如何に多く、革命大衆というものがどういう人であるか、わかると言えよう。

(20) このことで有名なのは、兪平伯である。文学研究所の研究員で、『紅樓夢』の研究で名高い兪平伯は一九六九年十一月一日に妻を伴い、河南省羅山の中国社会科学院の五七幹部学校に出かけた。時に六十九歳の最高齢であった。

以上は、何西来「往事如煙」（賀黎・楊健編『無罪流放——六十六位知識分子五七幹部校告白』光明日報出版社、一九八八年九月所収）による。

(21) 陳白塵著・中島咲子訳『雲夢沢の思い出——文革下の中国知識人』（凱風社、一九九一年五月）二二五頁。

(22) これについては、注(5)で挙げた楊絳著・中島みどり訳『幹校六記——文化大革命下の知識人』の、中島みどり氏の「訳者あとがき」が参考になる。

(23) 同注(21)、の四一頁。

(24) 拙著「文学者の死について」（『中国 新时期文学』論考——思想解放の作家群』関西大学出版部、一九九五年九月所収）を参照された。

なお、侯金鏡の急死については、とりわけ衝撃が強かったせいもあって、多くの文章で触れられている。代表的なものに、張光

- 年の『侯金鏡文芸評論選集』（人民文学出版社、一九七九年五月）の「序」がある。
- (25) この言葉は、『晋書・周顛伝』にある王導の言葉である。周顛が嘗て王導を助けたの知らなかった王導が、周顛のために命乞いしなかったため、周顛が殺された。後で、周顛の恩を知った時に、王導が言った言葉。伯仁とは周顛の字である。転じて「伯仁」と言えば「亡友」のこととなった。
- (26) 陳白塵『牛棚日記一九六六一一九七二』（生活・読書・新知三聯書店、一九九五年五月）の一九七一年八月八日の日記、二二六頁。
- (27) 注(5)の陳白塵のところを参照されたい。
- ト仲康「陳白塵小伝」および「陳白塵生平紀略」、「自伝」（いずれも、ト仲康編『陳白塵專集』江蘇人民出版社、一九八三年一月、中国当代文学研究資料、所収）によれば、陳白塵は一九〇三年三月に江蘇清河県に生まれ、一九九四年五月二八日に逝去した。
- (28) 張光年自身は「懷念老友陳白塵——『牛棚日記』讀後感」（『張光年文集 第四卷』（人民文学出版社、二〇〇二年五月所収）一五四頁で、自分の名前は63回挙げられていると言う。これは、張光年は自分の名前が出てくるたびに数えたのであろうが、私の数え方が、同じ日に何度も出てきても、その日1回として数えたこととの違いである。
- (29) この間のことは、塗光群「中国作協『文革』親歴記（下）」（『中国三代作家紀実』（中国文聯出版公司、一九九五年六月、所収）に詳しい。
- (30) 肉体労働といっても、実際にはトイレ掃除であった。トイレは当時、他所からも人が大勢やって来て、しかも汚い使い方をするので、汚れた上に直ぐ詰った。たとえば、謝冰心は毎日の労働として、文聯ビルの四階の二つの女子トイレ掃除をしたが、弱音を吐かずに黙々と掃除をしたという。上述の注(29)の三九二頁に拠る。
- (31) 同注(26)、の陳虹の「后記」、一三二頁。
- (32) 同注(26)、二二一頁。
- (33) 侯金鏡夫人。一九二二年の生まれ。中国作家協会会員。『人民文学』編集部主任。北京電影製片廠編導室主任。話劇「妯娌倆」や短編小説「朝着太陽出来的那边走」など。咸寧の五七幹部学校にいた時は、侯金鏡が「現行反革命」とされていたので、一緒に住むことも、仕事をすることも出来なかった。

- (34) 胡海珠は次のように言っている。「我很害怕回憶湖北咸寧文化部幹校那一段生活，也不願意回憶起一九七一年八月七日晚，侯金鏡同志突發腦溢血，八日凌晨逝世時那一幕悲慘的情景。」（胡海珠「追思幹校中的金鏡」。日月星博客）
これらの文章は、次のウェブサイトに拠った。<http://ryx.fyfc.cn/blog/ryx/index.aspx?blogid=46400>。
なお、「格兒屁」は、北京方言で「格兒屁着涼」ともいい、「不恭敬而調侃」のニュアンスがあるとのことである。張麗華氏と巴璽維氏の教示を受けた。記して感謝の意を表する。
- (35) 陳白塵は「前言」（『牛棚日記一九六六—一九七二』生活・讀書・新知三聯書店、一九九五年五月、所収）で、日記を整理したら、合計十余冊になったと言う。
- (36) 張光年には、「江漢日記」や「江海日記」、「向陽日記」など六種ほどの日記がある。ただし、一九七〇年の初めに咸寧の五七幹部学校に行ってから書き始めた。それ以前の隔離審査の時期には書くことが出来なかったと言っている。張光年「生命史上最荒謬的一頁——『向陽日記』引言」（『張光年文集 第4卷』人民文學出版社、二〇〇二年五月所収）。
- (37) 注(5)に挙げた、楊絳著・中島みどり訳『幹校六記——文化大革命下の知識人』（みすず書房、一九八五年二月）と、陳白塵著・中島咲子訳『雲夢沢の思い出——文革下の中国知識人』（凱風社、一九九一年五月）は、特にその傾向が強い。
その他、韋君宜『思痛錄』（北京一〇月文芸出版社、七月）や、黃慶雲『我的文化大革命』（OXFORD、二〇〇六年）などでも、理不尽な圧迫への憤りが書かれてあるもの、やはり日記をつけ、自らの生命の証を残している。

五 沙洋の五七幹部学校と費孝通

一

沙洋の五七幹部学校は、湖北省の沙洋鎮を中心にして、元の沙洋農場管理局の基盤と範囲を基にして形成されたので、「沙洋五七幹部学校」という。

今、中央の沙洋五七幹部学校の概略について、二つの文献をもとに述べてみよう。⁽¹⁾

五七幹部学校そのものについては、詳細を別のところに書いたことがあるので、⁽²⁾既知のこととして話を進める。簡単に言えば、中央や地方の政府幹部及び知識分子を再教育させるために一九六八年より始まった解放軍の編成を模した学校である。

沙洋には二十七の機関の「五七幹部学校」が建てられ、千三百五十七校あった。それぞれの場所は、

- 1 財政部：范家台
- 2 統戦部：はじめは黄土坡、のち七里湖二中隊
- 3 外交部：上羅漢寺農場十三中隊（沙崗）

- 4 北京外国語学院：七里湖一中隊
 - 5 中央民族学院：広華二農場彭河大隊
 - 6 ○二四（総参）：上羅漢寺農場
 - 7 総後二七四：苗子湖農場
 - 8 武漢空軍後勤：広華周磯
 - 9 七機部：羅漢寺
 - 10 中国地質学院：七里湖七中隊
 - 11 鉄道部大橋工程局：楊集五中隊
 - 12 交通部長江航道管理局：楊集六中隊
 - 13 農林部：李市新灯四組
 - 14 “三高”（＝最高人民検察院、最高人民法院、公安部）：小江湖監獄
- などである。

たぐさんの機関や単位があつたので、この江漢平原のあちこちに分散して建てられたといつてよいだろう。湖北の沙洋に五七幹部学校を建てた主な理由として以下のいくつかの理由が考えられるという。

第一、政治的原因。毛沢東の一九六六年五月七日の“五七”指示から二年後に発表された黒龍江省革命委員会の安慶県柳河の“五七”幹部学校が、文革中の機関幹部再教育の具体策となり、農場で労働鍛錬をする方向が定まった。

第二、地理的位置と水資源。沙洋は湖北省八大重鎮の一つであり、「小漢口」とも言われた。漢江に臨み、江漢

平原に位置して荆楚の要地であり、物資集散の地でもあった。川鄂豫陝（四川、湖北、河南、陝西）の商品が流通する中心でもある。ここは気候も温和で雨水も十分あり、土地は肥沃である。漢江や荆門の漳河ダムがこの地の豊富な水資源の拠り所となっている。ここは土地が広く人口がまばらなので、多くの土地が耕作と開墾を待っていた。

第三、戦争に備えて安全であること。一九六九年三月の「珍宝島事件」⁽³⁾以来中ソ関係が緊張し、全国が緊急に戦争準備状態になった。東北に建設予定だった中央直属の機関もこの中原の地に五七幹部学校を建てるようになった。

第四、労働改造農場が良い基礎と条件となった。この農場は、一九五二年九月にソ連の専門家の設計で作られた、全国最大の労働改造農場の一つである。この農場は次の五つの県市に分かれていた。荆門、鐘祥、京山、天門、潜江。

以上の理由などにより、沙洋に中央の機関の五七幹部学校が建設されたのである。

七里湖沙洋一農場の場長を勤めた李維龍（一九四〇年革命に参加し、二〇〇五年段階で七十九歳）によると、湖北省委員会書記の張体学が自ら乗り出して指揮を執った。もとあった労働改造農場を移して、五七幹部学校を定めたい⁽⁴⁾う。

李場長は、六万ム⁽⁵⁾余りの農田を五七幹部学校に譲り、労働改造⁽⁶⁾の六万人余りの犯人を引き連れて七里湖から楊集に引越していったという。一九六九年初め、沙洋農場管理局は湖北省革命委員会の指示により、所属の一農場、二農場、上羅漢寺、周磯、苗子湖などの農場と、黄土坡や范家台農場の家屋、土地、林木、家畜、農機具設備などを、中央国家机关の部や委員会、また省と直接関係ある単位と解放軍幹部学校に、引き渡した。そして、これらの

農場に元いた幹部が七里湖農場に配置され、湖北省五七幹部学校第六分校を創設した。

一般的に言って、全国の五七幹部学校は、そのほとんどが労働改造農場を基に作られたのは象徴的である。五七幹部学校で労働し学ぶ者は、誤解を恐れずに言えば、まさに犯人として扱われたと言ってもよいからである。特に、同じ湖北省の咸寧に下放した文化部の者たちは、当時とりわけ文科系の知識分子が社会的に低い地位の者とされ、社会から「臭老九」⁽⁷⁾と言われたように排撃の対象であったことから、犯人そのものであったと言ってもよい。ここでいう「犯人」とは、上述の「六万人余りの犯人」のことで、それは国民党時期の役人や、国民党員のことである。⁽⁸⁾したがって彼らは、反共産党、反社会主義、反毛沢東主義の者とみなされ、その思想を批判会で批判され、反省文を書かねばならなかった。労働も、懲罰的な重労働が多かったのである。五七幹部学校の指導者となった「軍宣隊」⁽⁹⁾は、国民党軍と戦った人民解放軍の将兵であったのだから。

ところで、中央の五七幹部学校が沙洋にやって来たことは、実は湖北省という地方政府に多大な困難をもたらした。労働改造農場を幹部学校に移し変えることを説得したり、調整したりする工作のほか、多くの建物を建設したり、建築費用や材料をすぐさま必要としたからである。

一九六九年五月二三日、湖北省革命委員会は國務院業務弁公室に報告し、中央が湖北で開設する五七幹部学校の経費と物資などを国が解決するように要求している。報告書には次のように言う。

* 目下、中央の部と委員会及び部隊からわが省に来て五七幹部学校を行なうものは三十八単位ある。十万人近く（家族を含めず）がおり、既に土地三五・一万平米を所属単位に分け与えた。わが省の県以上の革命委員会が行なう五七幹部学校の人数も十万人近くおり、家族を含めて三十五万人となり、土地四七・二万平米を分

け与えた。僅かにわが省の五七幹部学校だけで、移動着任費が五・五万元、建物建設用材が二十六万余立方メートル、鋼材二万余トン、セメント二・九万トンが必要である。中央がこれらを按配して解決することを求めるものである。⁽¹⁰⁾

なかでも、食事が大問題であった。穀物と食用油の供給は、計画経済と経済不足の時代にあつては容易なことではなかつた。このため、湖北省革命委員会生産指揮組は、一九六九年四月二八日に「五七幹部学校の穀物と食用油の供給基準に関する規定」を作つた。そこでは次のように規定している。

* 中央と省の五七幹部学校の幹部は、毎月食糧三十八斤⁽¹¹⁾とする。所在地の糧食部門が月ごとに供給する。穀物と食用油の所屬単位についてはしばし転用しない。上述の基準定量を穀物配給切符によつて購入する。不足部分は差額補助を実行する。

幹部に從つて学校に来て集団労働に從う家族は、その食糧は幹部の基準に從つて執行する。労働に参加しない者、また、満十六歳以下の子供は、その地の城鎮居民の定量に應じて供給する。

学生は当地の学生の食糧基準に應じて供給する。既に穀物と食用油の供給関係を転じて学校に來た者は、省の穀物配給切符や食用油配給切符によつて供給する。全国通用糧食油配給切符による者は、当地の城鎮居民の食用油の基準によつて供給する。供給期間は、学校に到着した日からとする。

幹部学校が生産した穀物と食用油については、定量がまだ自給できない間は、国家により差額部分を補充する。⁽¹²⁾

以上のことは、食事一つをとってみても、人の移住に伴う戸籍や配給制度による穀物や食用油の切符の手配などがあつて複雑であり、如何に重要で煩瑣であつたかを示すものである。更には、当時配給制であつた綿花や小麦粉などの配給切符などの問題もあり、五七幹部学校への下放と一言で言う移住が行政的にも如何に大変な事業であつたかがわかる。

二

実際に五七幹部学校で労働し学習させられていた者はどのような状態にあつたのだろうか。どうせ帰れば元に戻るのだと、ここで下放したという「お墨付き」を得れば良いのだという発想がなかつたわけではなさそうだ。こういう発想を「下放メッキ論」といつて批判会が開かれてもいたのであるから。しかし、労働と学習を通じて再生を図るといふ五七幹部学校が、本当に知識分子再生の有効な道であつたかどうかということは、大きな疑問がある。先ず、知識分子を農民と同じようにすることが社会にとつて意義あることなのであるか、疑わしいことである。

同じ五七幹部学校でも中央の機関や部からの幹部は、まだしも幹部としての待遇が維持されたと言える。田畑での労働がたとえ本人たちには辛い労働であっても、それは本人の不慣れや体力不足から来るもので、懲罰的な重労働は少なかったと言える。沙洋の五七幹部学校は、本来の「柳河五七幹部学校」の形態を守つていたので、幹部の再教育という面を強く持つていた。したがつて、再教育が終わればもう一度中央に戻つて働くこと、すなわち権力の復活が暗黙のうちに了解されていたからであらう。

たとえば、次のような報告がある。

* 彼此感情親近起来、有的老鄉告訴我們說：你們剛來時、大家都說這一批新來的勞改犯比過去的有錢、你看他們「穿的破、喫的好、光着膀子戴手表」。可生產隊給我們介紹說：「你們不是勞改犯、是北京下放來的。」有的干脆就直問：「你們都是幹部、在北京當大官的吧？為什麼跑這麼遠來幫助我們干活？」有的婦女還湊到我的耳邊問我：「這老人（指費）是你的長輩吧！是不是親戚？」我和費先生解釋說：我們都是學校教書的、不是當官的、毛主席說知識分子要接受貧下中農再教育、所以下來要向你們學習。說的他們都搖頭不認可。說我們沒講實話、但都認為我們都是好人、老實人、將來會官復原職回到北京。⁽¹⁴⁾

（お互い氣心が知れるようになると、あるお百姓がこう言った。「あんたたちが来た時、みんなはこう言ったものさ。今度来た勞改⁽¹⁵⁾は金持ちだぞ。見てみろや、奴らは着ているものは破けているが、食い物は良いし、上半身裸でも腕には時計をはめているじゃねえか、とね」。でも、生産隊⁽¹⁶⁾の者はこう言う。「あんたたちは勞改じゃねえ。北京からやって来なされたもの」と。するとある人がざざりと聞く。「あんたたちは幹部なんじゃろう。北京じゃ大旦那様じゃねえのかい？それが何でこんな遠いところまで来てわしらの仕事を手伝おうというのじゃ？」。また、ある婦人などは私の耳元に口をつけて、「この老人（費孝通のこと）は、あんたのおじいさんだろう。ご親戚かい？」と聞いたりした。私と費孝通先生は「私たちは学校の教師で、お役人なんかではない。毛主席は、知識分子は貧農・下層中農の再教育を受けねばならないとおっしゃっている。だから、ここへ来てあなたたちに学ぼうとしているのだ」と説明したが、みんな首を振って信じなかった。そして、私たちは正直に話をしていないけれど、良い人で真面目な人にはちがいないと認めて、将来きっと北京に帰り、職も元通りになるだろうと言うのであった。）

腕に時計をはめていることだけでも、もう自分たちとは違うことを農民たちは意識している。知識分子と農民と

の壁は厚い。生活に差があるから、一朝一夕では縮まらない。着ているものが皮のジャンパーであれば、それこそすぐに自分たちと違うことを農民たちは察知する。⁽¹⁷⁾吸っているタバコだって違うのだ。⁽¹⁸⁾(一二七頁以下の「別表：費孝通の手紙」を参照されたい)

この五七幹部学校の「學員」(正規の教育機関以外の各種学校や養成所などの学生を言う)には、文学界の巨匠や各界の専門家、外交官、社会的有名人などがおり、その後政界などで有名になった人物がいた。役人でもあるが、また最高の知識人でもあった。

たとえば、元全国人民代表大会常务委员会副委員長として有名な費孝通、中央統一戦線部副部長の張執一、最高人民檢察院副檢察長の黄火星と江文、公安部副部長の胡之光、中央財經指導小組弁公室副主任の李克木、財政部部長の項懷誠、財政部常務副部長の吳波、「文壇祖母」冰心、社会学者の吳文藻、作家の馮亦代、画家の周紹華、数学者の羅声雄、外交部副部長の楊文昌、駐英国大使の查培新、駐フィンランド大使の張直鑒、国連副代表の張義山、李宗仁夫人の胡友松、チベット学者の于道泉、刑事訴訟法の専門家で中国公安大学法律系教授の崔敏、中国蔵学研究院名誉院長の王堯などがいた。

五七幹部学校の學員は自らレンガを運び、瓦を鋸で切り、壁を築いた。こうして細くてヤワな手に大小のマメを作って働き、きわめて迅速に赤いレンガの瓦葺の建物を幾つも建てた。

基本的な生活が安定すると、綿花、蔬菜などを植え、豚や牛を飼った。最初は農業がわからず、今でも思い出すと笑いがこみ上げるような失敗をしかした。たとえば、牛を使って耕耘することなどしたことがないので、牛に向かって、田のへりに来た時、「おい、右に曲がれ!」とか「左に行くのだ!」などと怒鳴った。途中で休む時も、「牛よ、生まれ!」と喚いたが、牛は少しも言うことを聞かなかつた、などということがあった。また、ひどいの

になると、小麦をニラと間違える者もいた。

そこで、農業の知識をつけるために、幹部学校では、沙洋農場の公安部門の警察官や技術のわかる生産隊の社員に指導に来てもらった。學員たちは基礎建設を行なったほかに、農繁期には付近の大隊に田植えや刈り取りの手にいに派遣された。また、「貧農・下層中農の再教育を受ける小組」を組織して、人民公社員たちの家に分かれて共に食べ共に住み共に労働して、田畑を耕す技術を学んだ。⁽¹⁹⁾一方、社員たちの農作業を助け、家事の手伝いをし、少なからずの良いことをしたのであった。これは互いの深くて厚い感情を打ち立てることになった。

學員たちは、植樹や、穀物、蔬菜の育て方やブタの飼い方などをマスターし、各種各様の緊張した労働をこなした。たとえば、范家台農場管轄区の財政部の五つの中隊は二千ムー余りの農田を植えたが、この農田は、多くが砂で固まった田んぼで、とても硬く、苗を手で植え込むことができない。學員たちはそこで竹べらで苗床に穴を開けてから植えたのであった。ある學員は年を取っていて、収穫のとき腰が曲がらなくなり、小さな板の上に坐って、刈り取っては前に移動したのであった。

穀物、食用油、肉、野菜の四つの自給を実現するために、學員たちは年の初めから十分に忙しく働いた。農繁期のときなど、朝の星を見ながら田んぼに出、夜は月を戴いて戻った。食事さえも炊事員が田んぼに運んで来てそこで食べるのであった。苦しく疲れたけれど、誰も恨みや愚痴をこぼさなかった。財政部の五七幹部学校の學員たちは、次のような「五七戦士の歌」を作った。⁽²⁰⁾

*東に昇る太陽を迎え 五七戦士は整然と田に並ぶ；かの豊作賛歌を声にすれば 歌声は空を飛び巡る……⁽²¹⁾

自ら育てた稻が黄色にたわわに実る時、また野菜が緑に育った時、すべての学員たちは、苦しみと疲れそして悩みをきれいさっぱりと忘れるのであった。

労働の傍ら、学員たちは積極的に歌や、ピンポンやバスケットなどの球技をしたほか、簡単な舞台を作成して、そこで革命現代模範劇⁽²²⁾を演じた。これには近隣の大衆が観劇につめかけ、学員たちの最も愉快な活動となった。この舞台やバスケットのゴールはそのまま残っている。

五七幹部学校の最大の任務は、学習をし、運動をし、思想改造をすることである。一般的に、天気が晴れると労働し、雨が降れば批判闘争をした。「大批判」、「昔の苦しみを思い今の良さを思う」、「決心の表明」などの活動は当時の特殊な年代の特殊な産物である。学員が最も触れたくない痛ましい思い出である。

この思想改造については、文革の一番の問題であり、すでに幾つかの回想録などが出ているが、今、たとえば一〇七頁に「作家の馮亦代」として名前の挙がっていた馮亦代（一九三二—二〇〇五）の回想を一部引用すれば、次のように言っている。

*十年の動乱中、私は南の荒地の労働改造農場に下放させられた。毎日自分の力以上の労役をしながら、心は惨憺たる思いで自分でも恐ろしいほどであった。⁽²⁴⁾

*幹部学校の中では「地面に打ち倒されてもまだ千万にも上る足で踏みつけられねばならない」罪を待つ身として、労働改造の監督下にあった。たとえ年が五十を越えていようと、なお毎日午前午後五百斤余りの肥やし車を押ししたり引いたりして往復し、新たな人間となることを目指さねばならなかった。⁽²⁵⁾

批判会の詳細についてはここでは触れないが、下放して一定の箔をつける「下放メッキ論」を批判して、農村に入って働くことや、反革命の破壊活動を打ち壊すこと（「一打という」や、汚職窃盗反対、投機売買反対、見栄を張り無駄遣いをするに反対（「三反という」）など、いろいろな批判会が次から次へと開かれた。但し、後になると批判会も惰性となり、批判の内容よりも、会が重労働後の夜に開かれることが肉体的及び精神的苦痛を伴うものになったようだ。⁽²⁶⁾

ついでに述べると、幹部が沙洋の五七幹部学校に下放して来た時には、その子女も父母についてやって来た。彼らは、農場子弟学校、蒋台小学、新灯小学、新城中学などで学んだ。また、幹部たちは自分たちで学校を起こした。

一九七一年以後、沙洋の五七幹部学校の学員は続々と北京に戻っていった。⁽²⁷⁾ 知識青年も次々と仕事が割り当てられ、数十名が沙洋農場化纖工場や農場旋盤工場に就業した。⁽²⁸⁾

一九七二年末に、中央国家机关と各部委員会は中央統一戦線部の撤収にしたがって、沙洋に創設した五七幹部学校すべてを解散した。五七幹部学校の財産は沙洋農場と当地の人民公社に委譲されたり売却されたりした。

以上が沙洋の五七幹部学校についての概況である。

三

次に沙洋の五七幹部学校に下放した個人について、より詳しくみてみよう。

まず、一〇七頁で、「文壇祖母」冰心」と紹介されていた謝冰心（一九〇〇—一九九）について見てみる。

筆者は二〇〇八年九月に沙洋の五七幹部学校の跡地を訪れたことがあるが、それは冰心とその夫の呉文藻（一九〇一—八五）がここで働き、学習したからである。

冰心は同じ湖北省の咸寧の五七幹部学校に最初は下放された³⁰。彼女は中国作家協会に所属していた。中国作家協会は文化部に所属し、文化部の五七幹部学校が咸寧に設けられたので咸寧に下放したのである。しかし体のよくない夫・呉文藻との共同の生活が許され、呉文藻が所属する中央民族学院の五七幹部学校に来たのであった。中央民族学院の五七幹部学校が沙洋に設けられていたので、彼女も沙洋に来たというわけである。冰心は実は咸寧の五七幹部学校には三十八日間しかいなかったため、本当に辛い肉体労働は、この沙洋の五七幹部学校で行なったと言える。それでも、六十九歳という高齢のために優遇処置が取られ、畑でマメをいんだり、綿を採ったり、畑の番をする比較的軽い仕事がほとんどであった。麦を植えるときだけは総出で行なったので、彼女も腰をかがめて精を出したが、これは大いに肉体的に辛い仕事であった。一九七一年八月七日、夫である社会学者の呉文藻と共に沙洋を離れ、八日に北京に戻った。約十四ヶ月の下放であった。

彼女はこう回想している。

*まもなく二人は、別々の集団宿舍から個室の部屋に移れた。私たちは十分に幸せで心地よかった。実際、反右派闘争³¹の期間の驚愕驚倒する荒波のあと、「十年の大災難³²」に至るまで、国家主席や開国の元勳までもが災いから免れることができなかったというのに、私たちのような「九番目の鼻つまみ者³⁴」が家敗れ人も死ななかつたのは、何よりも幸運なことであった。また、民族学院のよく知った同僚たちと一緒に労働したので、どんなことでも新鮮で面白かった。たとえば、綿花を植えるにも甕の水に種を漬けて選定することから、綿畑で花

を摘むことまで、私たちは多くの技術を学んだし、多くの汗を流した。湖北の夏は、灼熱の太陽が火のように照りつけた。綿花が育つて人の背の高さと同じになると、密集した綿の木の中で花を摘むのは息苦しくなった。上も下も全身汗びっしょりとなる。綿畑を出て学校に戻る道では、衣服はたちまち日に照らされて乾いてしまふ。このとき、私たちは古詩のいう「稲を鋤いて日は中天に達し 汗は滴る稲の下の地に」⁽³⁶⁾ という句の苦楽を体得したのであった。私たちが着ているひとすじひとひだも辛苦な労働の果実なのであった!⁽³⁷⁾

冰心は、いつでも困難な境遇に対して樂觀的な対応をしている。大状況を個人の力では如何ともしようがないことを知っていたからであろうと思われるが、それだからこそ、小さな幸運を大事に、その時を生きていこうとする姿勢がある。夫婦が一緒の部屋に住むことができたこと、よく知った同僚たちと労働出来ることなどの交わりの微細な接触を生活上の大切さと考える生き方に、私は確固たる年輪よりする生活者の気概を感じる。だから古詩の句も単に辛酸さを訴えるだけでないものを、冰心は感じ取ったに違いないと思う。労働の「苦楽」すなわち苦と楽とを感じたのであろうし、それが冰心の独特な点であると思う。

もう一人、一〇七頁で「元全国人民代表大会常务委员会副委員長で社会学者として有名な費孝通」と紹介されていた、費孝通（一九一〇—二〇〇五）についても見ておこう。

費孝通の五七幹部学校での生活及び対応については、劉曉の文章と、同じく弟子であった王堯の文章とがある。⁽³⁸⁾ 王堯の記念の文でも、劉曉と同じく費孝通の樂觀的で不屈な、そして規則正しい生活が描かれている。たとえば、三年ほどの五七幹部学校で、費孝通がなした幾つかのことをあげている。1 大田労働（＝畑仕事）として綿を植えて、綿花を摘み、綿の木を抜き取った一連の綿の手入れの仕事をした。2 基本建設労働として、家を建築するの

に用いる石灰膏を作成した。なお、この仕事で石灰の粉を吸ったことが彼の喘息の原因かもしれない。もちろんマスクをしていたそうであるが。3 炊事員の仕事。火をつけることから野菜の料理や、食事の分配まで、炊事のことを一から学んだ。王堯は次のように描写している。

* 費孝通博士一本正経地分飯分菜、也還是笑吟吟地、笑吟吟地⁽⁴⁰⁾！

(費孝通博士は真面目腐つて飯を分けおかずを分けたが、やはりニコニコと、ニコニコとしていた。)

そのほかにも大きな竹の棒を使ってセーターを編んだことなど、若者の範となるように努力している費孝通が報告されている。

今、費孝通が書いた手紙が二十二通残っているの、それを見てみると、必ずしも、このように気楽に仕事をしていたわけではなかったようだ。

手紙は、費孝通の一番上の兄・費振東⁽⁴²⁾に宛てたものである。費孝通は五男なので、年上の兄に自分の生活状況を伝えようとする手紙ではあるが、日常のこまごました事物には触れることが少なく、五七幹部学校での生活で考えたことを述べることが多い。その中には、今行なわれている運動についての思考や、「国家」、「階級」といった概念への再考察も社会学者らしく述べられている。一二七頁の別表の私のメモによる「費孝通の手紙」を参照して欲しい。さらに一言付け加えるならば、国際社会への関心を絶やさなかったこともあるが、そういうことにはここでは触れない。ここでは費孝通の五七幹部学校での心理の一端について触れるだけである。

残された第一信は、どうやら七日の日付から一九七〇年一月に出されたらしいが、六九年十二月から書き始めら

れたと思われる。彼の手紙が、書き始められてから出されるまで、随分と時間が掛かっているのは、彼の他の手紙にも書かれているように、部屋の中は暑さにせよ寒さにせよどちらも劣悪な条件であり、また書き物をする机さえなかったからである。だがそれ以上に、労働の疲れと、会議などの呼び出しがあったためであることがわかる。

* 好久没有给你去信了、一則近来搞运动、开会多、坐下写信的时间少、…（第一信）

（長いこと手紙を差し上げませんでした。一つには、近頃キャンペーンをやっております、会議が多く、坐って手紙を書く時間が少なかったからです。…）

* 最近信写得少了些、一是热、二是能用来写信时间不多、三是没有桌子、四是蚊子多、烧香只是减少一些干扰、五是要说的太多、无从下笔。（第一四信）

（最近手紙を書くことが少なくなりました。一つには暑いことです。二つには手紙を書くことのできる時間が少ないことです。三つには机がないことです。四つには蚊が多いことです。蚊遣りを焚いても襲撃を少なくするだけです。五つには言いたいことがあまりにも多くて、筆の下しようがないからです。）

費孝通は何度か部屋を替わった（別表の第九信や第一一信を見て欲しい）が、条件は引用文の如く良くなつたわけではなかった。当代の代表的な知識人たる費孝通の生活として、机もないような生活環境におくことが果たしてどれだけの意義があつたのだろうかと思わずにはいられない。「言いたいことがあまりにも多くて」ということばに、私は悲痛な思いをいたすしかない。

筆者が夏に沙洋を尋ねた時は、確かに気温が四十度にも達することがあつたが、稲やとうもろこし、そして綿に、

蓮、大豆などの穀物が青々と茂っていた。見渡す限り平原で、山並みが見えなかった。だから、冬や春の寒さは勿論のこと、湿気については思いもよらぬことであった。湖北の咸寧の五七幹部学校に下放した者は皆、雨や湿気が耐えられぬほどの苦労であったと述べている。沙洋に居た費孝通も雨と湿気とに苦しめられたことを書いている。

* 湖北的天气今年抛説也别致、雨下得早、陰沈沈的天气已經有二十来天。我從一五日那天出去洗了澡以後、沒有出過校門。路上泥濘、大小便都不方便、(略) 天一下雨、衣服就沒法洗、我已經有半箇月沒有換內衣了、汗出的不多、所以還不算臭。(第三信)

(湖北の天气は、今年は風変わりだと言います。雨の降るのが早かったですし、陰鬱な天气がもう二〇日間も続いております。私は一五日に出かけて風呂に入ってから学校の門を出ていません。道は泥だらけで、大小便をしに行くにも不便です。(略) 雨がひとたび降ると、衣服は洗いようがありませんから、私はもう半月ほど下着を代えています。汗が少ないからまだ臭くはなっていませんけれども。)

* 入秋後、此間已見降溫、沒有到過四十度、但比較潮濕、加上一箇悶字。(第一六信)

(秋に入つて、このごろは温度が低くなってきました。四十度を越えることはなくなりましたが、かなり湿気が多いです。それで、「蒸し暑さ」が加わりました。)

生活上の不便さについては、費孝通はあまり詳しくは書いていないが、薬用酒について述べていることは注目値しよう。

* 泡制的薬酒、相当成功。八毛多一斤的普通白酒、加枸杞、橘皮和糖、經過一個月、很香。(第二信)

(漬け込んだ薬用酒は、かなり成功しています。一斤八毛(11500グラム八十銭)ほどの普通の白酒に、クコやミカンの皮や砂糖を入れて、一箇月経つととてもおいしくなります。)

* 今天托人帶去北京一些何首烏、已告訴孟吟、分你一半、用來泡酒。上次信上已經說到過、這里不少人借提倡中草藥的機會、可以喝点合法酒、這是一方面、另一方面也需要些補助營養、壯健筋骨的藥物。勞働人民愛喝酒是有生理基礎的。何首烏、枸杞等等是比較普通的、在中藥也算是較貴的。(第四信)

(今日人に託してツルドクダミの根を少し北京に持つていつてもらいました。兄さんに半分分けてお酒に漬けるようにと、すでに妻の孟吟に言つてあります。この前の手紙ですでに言いましたが、この多くの人は漢方薬を提唱している機会を捉えて、合法的に酒が飲めるのです。それとは別に、栄養補給と筋骨を壮健にする薬が必要なのです。労働人民が酒を好んで飲むのは生理的な基礎があるのです。ツルドクダミの根やクコなどはごく普通のもですが、漢方薬の中ではやや高価なものと言えましょう。)

* 来信説起喝了何首烏泡的酒、对痔瘡不利。最近我又查了查中草藥的書、看来關係不大、因為它還可以治大便干結、以及瘡癩、講其効力应当对痔瘡有利。抄了一些条条、另紙寄你参考。(第一九信)

(お手紙では、ツルドクダミの根を漬けた酒を飲むと、痔に良くないとのことでした。最近私はまた漢方薬の本を調べましたが、どうやら関係はあまりないようです。というのも、それは大便の乾燥や痔瘡を治すことができるので、効き目は痔に有利であると書いてありました。幾つかの項目を別紙に書き写しましたので、参考に供します。)

* 何首烏酒中可加枸杞子、最好的是寧夏產品、北京藥店也可以買得到、不妨試試。我最近已有半箇月每晚喝一点、好处是喝後就入睡、睡眠比較深、也比較長。因而对体力回復有幫助。(第二一信)

(ツルドクダミの根の酒の中にクコを加えると良いです。一番良いのは寧夏産のものです。北京の薬屋でも買えますから。是非お試し下さい。私はここ半月ほど毎晩少し飲んでいますが。とても良いことに、飲むとすぐ眠れますし、眠りが深いですし長続きます。ですから、体力の回復に有益です。)

このように、費孝通は何首烏(アかしゅう)と言われる漢方薬で、ツルドクダミの塊根のことを白酒(バイジュー。コーリャン・トウモロコシ・サツマイモなどの穀物を原料とした蒸留酒。アルコールの度数が高い。)に漬けて、強壯剤や栄養補給酒として飲んだ。第四信では、さらに漬け方の方法や、広西特産の何首烏のことなどを書き、一九七〇年四月一日に書いた手紙の半分のスペースを費やしている(別表参照)。第一九信でも、別紙に何首烏のことについて、『赤脚医生手冊』『河北中薬手冊』『常用中草薬手冊』などから、その効用などを書き写している。これらは、兄に対して発している手紙であるが、薬用酒を飲むことは費孝通自身にとっても必要なことであつたに違いない。彼は下に引用するように、体がかなり悪くなっていた。単に酒を飲むのではなく、薬用酒であることが、自分の体を含めた環境の厳しさを一層感じさせる。

*也許已經告訴過你我從伙房調回連隊了、這是主動爭取的結果。近來一個月身體不太好、再拖下去怕出問題、所以因為肘骨酸痛、去広華寺醫院診治、取得医生診斷、可以向連隊反映、併建議換人。(略)退出伙房那天已經感冒發燒。這是上星期二的事。休息了三天、勉強去上班、這幾天又不太好、今天又休息了(星期天、但是別人照常去勞動、我在戶靜養、因為昨天又發燒、打青霉素要三天)。原因是積勞所致、支撐的決心沒有過去大、年紀又長了一歲、看來還得拖幾天、也是符合我體質規律的。病是不那麼嚴重、就是不舒暢、有時有點低溫。(第二

○信

(もしかしたらすでに私が厨房から中隊に戻ったことをお知らせしたかもしれませんが。これは私が主体的に動いた結果です。この一ヶ月ほど体の調子があまり良くなく、これ以上グズグズしていると問題を起こしそうな気がしたのです。そこで、肘がだるく痛いので、広華寺の病院に行き診てもらい、お医者さんの診断書をもりました。これで、中隊に報告して人を変えてもらうように意見を言うことが出来ました。(省略) 厨房を出たその日からもう風邪で発熱していました。それは先週の火曜日のことです。三日間休んで無理に仕事に出ました。ここ数日はまた調子が悪くなり、今日もまた休みました(今日は日曜日です。でも他の人たちはいつもどおり仕事に行っています。私は在宅静養しています。というのも昨日また熱が出て、ペニシリンを三日間打たねばならぬからです)。原因は積み重なった労働の疲れです。支えとなる気を持ちようは昔ほど強くはありません。年もまた一つ取りました。どうやらまだ数日ぐずつくようですが、これは私の体質のせいでしょう。病気は重くないのですが、気分が晴れない上に、幾らか寒いのです。)

第二〇信は一九七一年十二月一二日に書かれているから、寒さが襲ってきて、風邪がいつまでも治らなかつたのもよくわかる。厨房のコックの仕事を第一三信(六月二五日)で話題にしていたが、次の第一四信(七月二日)では、本部から任務につけとも、任務を取り消したとも言ってこないで、待っているほかしようがないと書いている。そして、八月六日付の第一五信では、すでに一週間厨房の仕事をしていることを述べている。

*我這一星期、取得“很売力气”的評語、這箇評語還是恰當的、繼續下去、自是一種鍛鍊機會。起初師傅們怕我年紀大、架子大、学不好、調動不了、這些都否定了。伙房里一切工作我都能干、除了背運米袋、一八〇斤

是動都動不了。現在的困難是伙房里有一套語言、我不熟悉、師傅們又多是北方人、話也不容易懂、所以常常對「指示」茫然不知所措。這些在時間里能消除的、年老的可能慢一些。一箇星期來、洋相不多。在伙房里一般總得半年之上才能調換、所以現在還只是箇開始。(第一五信)

(私はこの一週間、「良く仕事をした」という評判をとりました。この評価は極めて適切です。続けてやっていたら鍛錬の良い機会だと思えます。最初師匠たちは私が年取っていて、嵩張るし、学びきれず、扱いきれないのではないかと思っていたようでした。これらは否定されました。一八〇斤(九〇キロ)の米袋を背負って運ぶこと以外は、厨房のすべての仕事をやることができます。今感じている困難は、厨房で取り交わされる符丁で、私にはよくわからないのです。師匠たちは多くが北方の人で、言葉もわかりにくいのです。それで、よく「指示」されても、茫然としていて手の下しようがないのです。これらのことは時間が解決できるのでしょうか、年寄りには時間が掛かりそうです。この一週間ほどは醜態がそれほど多くはありませんでした。厨房では一般に半年やれば配置換えになります。ですから今は始まったばかりといえます。)

費孝通は厨房の仕事につく前の二月には「郵便配達員」となっており(別表参照)、これが如何に大事な仕事で忙しい仕事であるかを兄に書き送っている。毎日仕事が終わったあとに新聞や雑誌を配るのであるが、それらが毎日定期的に来るとは限らない。しかも夕食の前に奪うように取りに来る者がいる。それと対応していると遅くなり、食堂の良いおかずが残っていないことがある。さらに夜の会議の前に他の者に配達しなければならず、そんなときに雨が降ったりすると道がぬかるんで困難である。集金となると、なおやりにくく、なかなかお金が集まらない。こういった煩瑣な仕事が、第一三信では、「炊事員」に変わる話になる。

*我对新事物還有興趣、当送報員、炊事員都是有意義的事。矛盾到处有、困難和麻煩也到处有、這就是生活。你説爭取活八十。也不過二十年了、在二十年里多接触些新的事物、可以使生活內容更豐富些、這算是我的世界觀吧。(第一三信)

(私は新しい事物に対して興味があります。郵便物の配達員や炊事員になることはどれも意義のあることです。矛盾はどこにでもあります。困難と煩わしさもどこにでもあります。これが生活なのです。兄さんは八十まで生き抜くと言います。それでも後二十年に過ぎません。二十年のうちに多くの新事物に接することは生活の内容を豊富にさせることができますでしょう。これが私の世界観だと言えます。)

新事物に積極的に対応するということから、費孝通の樂觀的な生活態度を知ることができる。しかしながら、彼の「世界観」がそうであつても、現実の仕事はそう単純ではなかつたらう。炊事員の仕事も楽ではなかつたことを、上述の第一五信で見たとこである。第一五信では次のようなことも書いている。

*果如所料、這次輪換、沒有我在内、有吳老夫婦。最初可能有我、後來發生變化、變化原因不明。上星期二下伙房就是表示、期間拖了一箇月。我对這件事思想感情上自有反应、在聽說要調回時、就想到回北京对家里老小自然是好的、自從六六年來和孟吟只团聚了幾箇月、特別对第三代、能在一起、自有樂趣。(略)昨天宣布了調動名單、我不在內。前一種思想也就過去了、不現實了。最初是相當坦然、但是整箇空氣有了變化、別人忙着收拾行李、開會歡送、有些想走走不成的、又有種種表現、在我自己當然也不能沒有感受、又多從回去好的一方去想、有点冷落之感、這說明修養確是不够、患得患失的情緒尚未擺脫。(第一五信)

（果たして思っていた通り、今度の交代に私は入っていませんでした。呉文藻・冰心夫妻は入っていました。初めは私が入る可能性があったのですが、あとで変わったのです。変わった原因はわかりません。先週の火曜日、厨房に行くようにと表示があり、期間が一ヶ月延びました。私はこのことに対して、思想面でも感情面でも意見があります。出張で帰ると聞くと、北京の家の老人や幼子の元気なことを思い浮かべます。六六年以来私は妻の孟吟と一緒に過ごしたことなく数ヶ月しかありません。特に孫たちと一緒にになれるのは実に楽しいことです。（省略）昨日、人事異動の名簿が発表されましたが、私は載っていませんでした。先に考えていたことも過去となり、実現できなくなりました。最初はまだつきり平気でしたが、全体の空気が変わり、他人が荷物を整理しだし、歓送会などが開かれます。幾人かの帰りがくてできなかった者がまたいろいろな態度を示します。私自身も当然感想がないわけではありません。帰って行けたらなあといった面からのみ考えていると、幾らか物寂しい感じになります。これは、修養が明らかに不十分で、自分の損得ばかりにかかずらう気持がまだ抜けていないことを示しています。）

これらの手紙からは、費孝通にとって具体的現実的な仕事の厳しさだけでなく、それを救うような精神的慰安もほのかな希望もなかったといえるような状況が読み取れよう。呉文藻は費孝通の先生であつたし、当然彼よりも年上である。だから、呉文藻・冰心夫婦が費孝通よりも早く北京に戻るのには納得がいくことであろう。しかし、自分も北京に戻る名簿に入っていたらしいから、それがどうして脱落したのかわからない。こういう変化は、不満となつて蓄積しがちである。費孝通は努めて平然とこういう事態に、自らの修養が至らないのだとして対処しているが、北京に戻る者たちの荷物整理や彼らのための歓送会など、あわただしい行動がどうしても「物寂しい感じ」を引き起こさざるを得ないであろう。炊事員という彼本来のしてきた仕事（社会学者）とあまりにも違いの大きい仕事を

続けねばならぬ費孝通の心情を、筆者は痛く感じるのである。

四

沙洋の五七幹部学校は、一九七三年には撤収された。そして、一九七九年二月一七日に國務院は「五七」幹部学校を停止することに関する通知」を發布し、全国のすべての五七幹部学校は終了したのである。

馮亦代はこう言う。

* 北京伝来命令、幹校撤消、留校の幹部和家属便浩浩蕩蕩回北京……我原来以為下半輩子要老死異鄉的厄運、便一風吹散、跟着回北京、真是、來是無言去絕踪、与貧下中農永遠、⁽⁴³⁾ 拜拜了。

(北京から命令が来て、幹部学校が撤収された。学校の幹部と家族は威風堂々と北京に帰った。(略) 私はもともと自分の後半生などは異郷で老死する不運な目に遭うにちがいないと思っていたので、ひとたび風が吹き終わると、一緒に⁽⁴⁴⁾ 北京に戻った。誠に「来るは無言、去るは跡なし」であり、貧農・下層中農と永遠に「バイバイ」だった。)

翻訳家で散文家でもある馮亦代に、五七幹部学校での再教育などどれだけ活かされるか、不安の残る「バイバイ」(「さよなら」という言い方である。少なくとも、貧農・下層中農による再教育が「軍宣隊」などの当時の指導者が企図した、知識人の再生になったとは思えない言い方ではないか。過去の経験をどう活かすかは、もちろん知識分子の心の問題である。その後、馮亦代は活かしたのかもしれないが、この時ばかりは、義務或いは強制から逃

れたとするホツとした心境が見えるではないか。

ところで、筆者と王炳根・冰心文学館館長とは、冰心が下放したと思われる沙洋の五七幹部学校を尋ねたのだが、実のところ、筆者たちがたどり着いたところが本当に冰心が下放したところであつたかどうかかわらないのであつた。⁽⁴⁵⁾ 三棟の黒い日干し煉瓦によつて造られた建物が残つており、その前庭には、綿の木が生えてはいたが、確かに冰心が居たと証言する人物はもういないのであつた。一九七三年にこの地を撤収した中央民族学院の五七幹部学校の建物はほとんど残つておらず、三十五年後に来た筆者たちの前には、まるで関係のない農民が住んでいたであり、五七幹部学校のことは遙か昔のことになつていた。

ただ、冰心と一緒に居た費孝通がこの地に居たであろうことは、劉暎の文章によつてわかるのであつた。

* 中央民族学院的五七幹部校設在湖北省潜江县的広華寺、簡稱沙洋幹部校。⁽⁴⁶⁾

(中央民族学院の五七幹部学校は、湖北省潜江县の広華寺に設けられた。沙洋幹部学校と略称する。)

注

(1) 一つは、孫君恒「中央在湖北沙洋『五七』幹部校的回顧」(『民主与科学』二〇〇五年第六期。http://www.cnki.net)であり、もう一つは、陳国強「追尋沙洋五七幹部校旧事」(『湖北文史資料』二〇〇四年第二期。http://www.cnki.net)である。以下、この二つの文章による紹介なので、いちいち断らない。

(2) 本書六七頁以下を参照。

(3) 一九六九年三月の、黒竜江(ウスリー河)の珍宝島(ダマンスキー島)をめぐる中華人民共和国とソビエト連邦の国境武力衝突(括弧内はソ連名、したがって、ダマンスキー島事件ともいう)。三月二日 第一次衝突、三月一五日 第二次衝突。当時、珍宝島

はソ連が実効支配していた。一九八九年 珍宝島の中国帰属を確認。一九九一年五月一六日 中露東部国境協定。珍宝島の帰属は中国側とされた。

(4) この部分は、注(1)の孫君恒「中央在湖北沙洋『五七』幹校的回顾」(『民主与科学』二〇〇五年第六期。http://www.cnki.net) 214頁。

(5) 一ムーは、六六六・七平方メートル。一〇〇ムーが一ヘクタールだから、六万ムーは大体六〇〇ヘクタールに相当する。

(6) 労働改造：一九五四年の「労働改造条例」に基づく。労働能力のある懲役受刑者を生産労働と政治教育によって更生させる制度。「劳改」と略称される。

(7) 九番目の鼻つまみ者という意味。文革中の知識分子に対する蔑称。1 叛徒(裏切り者) 2 特務(スパイ) 3 走資派(資本主義の道を進む実権派) 4 地(地主) 5 富(富農) 6 反(反革命分子) 7 壞(悪質分子) 8 右(右派分子) の後ろに位置する者とされた。

(8) 亦夫の回想に拠れば、「这里原来是全国有名的沙洋劳改農場、関押着好些著名的国民党戦犯、(ここはもともと全国でも有名な沙洋労働改造農場で、多くの著名な国民党戦犯が収監されていた)」とある。(亦夫「沙洋旧事——我随父親在干校：四。沙洋印象」http://blog.sina.com.cn/s/blog_40cc64ce0/oodhg0.html)

(9) 解放军毛沢東思想宣傳隊のこと。「工宣隊」(労働者毛沢東思想宣傳隊)の後を受け、五七幹部学校の指導を受け持った。

(10) 湖北省計画委員会編『湖北省経济大事記』(一九四九—八七)(湖北人民出版社、一九八九年)。

(11) 一斤は、五〇〇グラム。三十八斤は十九キログラムとなる。北京市などでは平均三十斤(十五キロ)であったから、優遇されていたと言える。

(12) 同注(10)。

(13) 毛沢東の一九六六年五月七日の「五七」指示により黒龍江省革命委員会によって作られた省の機関幹部の再教育を目的とした全国で最初の学校。安慶県柳河にあったので、「柳河五七幹部学校」と呼ばれ、五七幹部学校のモデルとなった。

(14) 劉晔「費孝通在五七幹校」(『炎黄春秋』二〇〇六年第一期)。この文章は多くのwebに転載された。

- (15) 同注(6)。
- (16) 生産隊：当時の農村は政治・経済・社会などは「人民公社」という集団所有制によって組織されていた。二十〜三十戸の「生産隊」を基礎に、十数個の生産隊が集まって「生産大隊」を作り、数個の生産大隊が集まって「人民公社」となった。人民公社で働く農民を「社員」といった。
- (17) 費孝通『幹校家書』（『費孝通文集』第七巻、群言出版社、一九九九年十月）の「第十九封」に、費孝通が皮のジャンパーを着て野良仕事に出たら、農民たちが目を丸くしたと書いている。
- (18) 同注(17)。「第六封」に、「当地では高級品となる「三門峽」というタバコを如何に大事にしているかということについて書いている。
- (19) 中国語では「同喫、同住、同労働」というので、「三同」を行なうと言った。
- (20) 五七幹部学校へ下放した一般の学員を「五七戦士」と言い、江青が組織した中央特捜班などから指定された者を「牛鬼蛇神」と言って、批判の対象とした。「牛鬼蛇神」は反党・反社会主義分子、反毛沢東思想分子とされた者のことを言う。
- (21) 注(1)の陳国強「追尋沙洋五七幹部校旧事」（『湖北文史資料』二〇〇四年第二期）による。
- (22) 一九六七年五月に『人民日報』が八つの「革命模範劇」を賞賛してから、文革中はラジオもテレビも舞台もこれに占領された。八つとは、革命現代京劇「智取威虎山」「海港」「紅灯記」「沙家浜」「奇襲白虎団」とバレエ「紅色娘子軍」「白毛女」及び交響曲「沙家浜」である。すべて、江青が革命的に改変させたとされる。
- (23) 楊絳著、中島みどり訳『幹校六記』（みすず書房、一九八五年二月）、陳白塵著、中島咲子訳『雲夢沢の思い出』（凱風社、一九九一年五月）、章君宜著、楠原俊代訳『章君宜回想録』（同志社大学言語文化学会『言語文化』、二〇〇〇年一月〜二〇〇七年一月）など多数。
- (24) 『馮亦代散文集』（百花文芸出版社、一九九七年二月）七六頁。
- (25) 馮亦代『色彩集』（三聯書店、二〇〇〇年四月）七四頁。この本の入手には、国学院大学の牧野格子氏の世話になった。記して謝意を表す。

- (26) 注(23)の回想録や、拙著「過去の残影」(関西大学『中国文学会紀要』第二十七号、本書七九頁以下)などを参照されたい。
- (27) この原因としては、林彪の墜落死や周恩来の意向などがあるが、ここでは詳しくは述べない。
- (28) 農民から工場の労働者になることは大変な優遇であったが、文革終息後には却って北京に帰りにくくなり大問題となった。彼らの多くはいろいろな手段を使って、その後やはり北京に戻った。
- (29) 詳細については、拙著『探花囁語』(三恵社、二〇〇九年四月)を参照されたい。
- (30) この辺の経緯については、謝冰心著、萩野・牧野訳『家族への手紙』(関西大学出版部、二〇〇八年八月)を参照されたい。
- (31) 一九五七年後半から開始された政治キャンペーン。それまでの「百花齊放、百花争鳴」政策によって共産党に意見を言った者が、反党、反社会主義の「右派分子」とされ処分された。呉文藻も費孝通も右派とされ、冰心は右派を批判する発言をしなければならなかった。
- (32) 原文「十年浩劫」。一九六五年から一九七六年の文革期約十年間を否定的に言う言葉。
- (33) 文革で殺害された劉少奇(一八九八—一九六九)のこと。
- (34) 原文「臭老九」。同注(7)。
- (35) 『古文真宝』によれば、中唐の詩人・李紳(七八〇—八四六)の「憐農」という詩。
- (36) 原文は「甘苦」である。意味は、辞書によれば、1 苦楽。2 辛いこと。の二つがある。
- (37) 「我的老伴——呉文藻(之二)」(卓如編『冰心全集』第八卷、海峡文芸出版社、一九九四年十二月)四七一—四八頁。
- (38) 同注(14)。
- (39) 王堯「瀟洒無塵 耿介絕俗 崎嶇歷尽 書生面目——賀費孝通老師九十大壽」(『書屋』二〇〇一年第六期) <http://www.cnki.net>。なお、この王堯は、一〇七頁で「中国蔵学研究院名誉院長」として紹介されている人物であると思われる。
- (40) 同注(39)。
- (41) 同注(17)。なお、この手紙を使って書いたという張冠生『郷土足音——費孝通足跡筆迹心迹』(群言出版社、一九九六年八月)があるそうであるが、筆者は未見である。

五 沙洋の五七幹部学校と費孝通

手紙	日付	主たる内容	国際	読書	参考
第1信	一九七〇年 一月七日	運動と会議、家の建設、五一六分子、 子、 春節、五一六分子、『白毛女』歌 曲、 家の主人、黄豆、珈琲を買う、 五一六分子、薬用酒、	欧州の寒気	『儒林外史』 『科学実験』	一九六九年一〇月、費孝通下放
3	三月五日	雨、五一六分子、二反一打運動、 石灰を洗う仕事、			
4	四月一日 四月三日	何首烏、雨季、粉ミルク、作物の 見回り、 北京から人が戻る、			一九七〇年四月、人工衛星

別表・費孝通の沙洋五七幹部学校から長兄・費振東への書簡(二三通) メモ

(42) 費振東(一九〇二—七五)、中央人民政府華僑事務委員会委員など華僑問題に関わった。中国民主同盟中央常務委員など。

(43) 同注(25)。七五頁。

(44) この「風」は、「農村に一生根を下ろす」という運動をさす。一九七二年後半から周恩来総理の力で、幹部が次々と北京やその他

の都市に戻り仕事を始めた。特に十二級以上の幹部は北京に戻って仕事をするようになった。

(45) 同注(29)。なお、沙洋五七幹部学校の実地調査には、冰心文学館館長の王炳根氏と林幼潤女士及び武漢の熊燕橋氏に多大な援助を蒙った。名前を記して謝意を表する。

(46) 同注(14)。

I 文化大革命下の文学者

10	9	8	7	6	5
三月五日	一九七一年 二月四日 二月八日	八月一日 七月三〇日	五月二日 五月二日前	四月二五日 四月二六日	四月四日 四月五日
『国家、集体、個人』、一二号布告、 『統戦対象』、電気バリカン、生産 隊に入って労働、	場、 抜歯、喘息、精神は物質とな る、小便に起きる、 雨、引越し、郵便配達員、自由市	人民代表大会、階級と民族の観点 から意見を言いたい、 気温四〇度、畑仕事、北京に戻る こと、一打三反運動、	釘を打つこと、鶏卵、黒ビール、 将棋で3勝1敗、 綿入れの始末、喫煙と飲酒、7歳 の女の子の『チョコレート』事件、	『七七』に近い、 雨、蚊が出た、機縁とピンポン外 交、	布団干し、開墾作業、講堂建設、 色鉛筆、
	名古屋のピンポン		シアヌーク		世界情勢、カンボ ジアの政変
『河北中薬手冊』			『石頭記』や『戦 争と平和』のこと	『魯迅全集』	郁達夫『遲暮』、『魯 迅全集』
		一九七〇年八月二三日より九月 六日まで、九期中全会（廬山 会議）林彪	一九七〇年六月六日、冰心夫婦 到着		

五 沙洋の五七幹部学校と費孝通

17	16	15	14	13	12	11	
十月二日	九月二五日	八月六日	七月二日	六月二五日	五月一六日	五月六日	三月六日 三月一〇日
名簿に名前なし、「社会」の概念、 綿入れの洗濯、	新三国演義、「中間」人物、	交代の名簿、炊事員、	手紙、炊事員、一打三反運動、再 審査、	学校に戻る、麦の収穫、黄豆の種 まき、炊事員、血吸虫、	農繁期、郵便配達員、黄連丸	引越し、五一六分子、闘争のやり 方について、体調悪い、抜歯、 野生の鳥、運動と学習について、	何首烏、 「四好」中隊、一〇〇ムーの綿畑、
	米ソ、日本、フェ アバンク、ラテイ モア		スノー	スノー	ピンボン外交 ニクソン		
				「参考消息」	「種の起源」		
一九七一年十月、第二六回国連 総会、中国加盟	一九七一年十月、キッシンジャ ー訪中	北京へ 一九七一年八月七日、冰心夫婦				一九七一年四月、第三一回世界 卓球選手権大会（名古屋）で宋 中秘書長、五国のチームを北京 に招待と発表	

I 文化大革命下の文学者

22	21	20	19	18
<p>一九七二年 七月一九日</p>	<p>十二月一九日 十二月二一日</p>	<p>十二月二一日</p>	<p>十一月三日 十一月二五日</p>	<p>十月二八日 十一月二日</p>
<p>異動名簿、あせも、</p>	<p>『浮雲游子意』、楽観、 ピンポンの試合、</p>	<p>中隊に戻る、広華寺医院、感冒、 幹部、五七幹部学校、精神は物 質に変わる、</p>	<p>会議、薬用酒、 何首烏、喘息、厨房工作、皮のジ ヤンパー、</p>	<p>北京の近況、 風呂、</p>
<p>中米首脳会談、キ ツシンジャー、ニ クソン、ブレジネ フ、コスイギン、 チトー、北の熊、</p>	<p>ソ修、国連、キッ シンジャー、</p>	<p>国際情勢、印パの 争い、北の熊、ソ ンバルト、</p>	<p>国連加盟</p>	
	<p>『資治通鑑』</p>	<p>『国家と革命』 『生育制度』</p>	<p>『二都物語』</p>	
	<p>一九七二年二月、ニクソン訪中</p>		<p>死 「林彪反革命集团罪行」的報告</p>	<p>一九七二年十一月二日、林彪墜</p>

六 天津団泊窪の五七幹部学校における郭小川

一

一九七五年に郭小川は「団泊窪の秋」という詩を書いた。

「秋風像一把柔韌的梳子、梳理着靜靜的団泊窪；秋光如同發亮的汗珠、飄飄揚揚地在平灘上揮洒。（秋風は軟らかくしなやかな櫛のように、静かな団泊窪をくしけずる。秋の光はキラキラする汗の珠のように、この平地に飄々と振りまかれる）」で始まる、この詩は、「戦士自有戦士の性格：不怕恫喝；一切無情的打撃、只会使人腰桿挺直、青春煥發。（戦士には戦士の気概がある。恫喝など恐れない。すべての無情な攻撃でも、腰骨を伸ばし若い気力を發揮させるだけだ）」のような、感動的な詩句が含まれる四十六行の長句詩である。全詩を引用できないが、「団泊窪」という地名は人々の胸に深く刻まれた。⁽¹⁾

二〇〇三年九月に、二十八年を隔てて団泊窪を訪れた周小松は、次のように書いている。

* 大きな堤防の上に登ると、三つの展望用の亭がある。一番大きな「雄風閣」の欄干に寄り添って遠くを見

ると、多くの感慨がこみ上げいつまでも離れがたい思いだ。：略：文化部「五七」幹校はとくにその場所さえわからなくなっている。土地の人にどこが華君武や郭小川や呉祖光などの芸術家達が「労働改造」したところかと聞いてもわからない。この神秘的な土地は、今やビルが林立している。大ホテル「堯舜」だとか、レジヤーランド、さらにはゴルフ場、泰達サッカー練習場などの高水準の現代化した施設が建っているのである。誠に泊湖は玉宇を映し、燕趙は明珠を含む、である。⁽²⁾

郭小川が「团泊窪の秋」という詩を書いた時は、彼が天津市の静海県にある团泊窪「五七」幹部学校に追いやられていた時であった。彼は、毛沢東が映画『創業』⁽³⁾について指示を出し、この映画を良い作品と認めたので政治の動向が変わったと感じた。だが、当時文化面の実権を握っていた江青らは、復活した鄧小平が主宰する実務的な方向を「右傾翻案風（右からの巻き返しの風潮）」として反対し、再び弾圧を強めていたのである。文化部門は、江青と繋がる于会泳、張維民、浩亮、劉慶棠などが牛耳っていた。そこで郭小川は、北京にいる元『人民文学』編集委員の劉小珊にこの詩を托した。彼女は、同じく团泊窪「五七」幹部学校に一ヶ月ほど下放されたことがあり、「团泊窪の秋はどうですか」と郭に手紙で尋ねた。そこで、郭は「团泊窪の秋」の詩を書いたのである。詩は便箋に書かれており、郭自身によって「初稿の初稿で、まだ何回か修正する必要がある。『参考消息』といった内部の新聞に属するようなものだから、絶対に外に漏らさないように」と書いてあったという。⁽⁴⁾その後、七六年四月に「天安門事件」が起り、天安門に行ったかどうかなど追及が厳しくなった。郭小川も手紙を寄越して、これまでの詩や手紙をすべて焼却するように要求してきた。劉小珊は、この詩稿だけは焼いてしまうに忍びず、ビニールの袋に入れて衣裳ダンスの底に画鋏で貼り付けて隠しておいた。四人組が十月初めに粉砕されて、七六年十一月の

『詩刊』にこの「団泊窪の秋」が発表された。間もなく開かれた第一回の「文芸の夕べ」で、俳優の瞿弦和がこの詩を朗誦して、聴衆を大いに感動させた。続いて、工人体育館で開かれた「周総理を記念して、四人組」を非難する大型詩歌朗誦会⁽⁵⁾でも全会場に感動の嵐を呼び起こした。翌年、北京市の中学語文教科書にも採用された。

郭小川は、一九一九年河北省豊寧県に生まれた。本名、郭恩大。詩人。五三年に中共中央宣伝部文芸処副処長、五五年に中国作家協会書記処書記兼秘書長、五七年に『詩刊』編集委員、六二年に『人民日報』特約記者となるなど、文芸をリードする側にいた人物である。したがって、プロレタリア文化大革命（以下、文革と略称する）が始まると、これまでの文芸政策をめぐって、中央特捜班から隔離審査を受けることとなった。⁽⁶⁾一九六九年に湖北省咸寧県向陽湖の「五七」幹部学校（以下、幹校と略称する。）に送られたが、直ぐに解放されて党指導部の生活に戻った。しかし、七四年冬、咸寧と天津市静海県団泊窪の「五七」幹校が合併されると、郭も天津に移された。途中の北京では列車を下りることも許されず、家族に会うことも許されぬほどの虐待を受けた。⁽⁷⁾

天津の静海県団泊窪「五七」幹校とはどんなものだったのか。そもそも、「五七」幹校とはなんであるか。私は、調べてみたいと思った。

咸寧の「五七」幹校は、「湖北咸寧向陽湖文化部五七幹部学校」というが、それについて、私は書いたことがある。⁽⁸⁾ その時感じたことは、あれだけ大勢の文学者が参加した一大行事であるにもかかわらず、残された記録が少ないということであった。勿論、私の不勉強が大きな原因で、捜せば結構数多くの記録があったのであるが、それらはやはり文学者側の受身の記述であって、肝心の組織的に行なわれた機構や人員が不明であった。それは今なお、私の怠慢によって不明なままであるのだが、その後にはわかった幾つかの事実があるので、それをここで紹介したいと思うのである。

「五七」 幹校と略称されたこの学校は、文革の一端を担い、機関幹部（中央と地方の政府行政の役人すなわち公務員）を主とする知識分子の思想改造の方策であり、具体的実践であった。知識人の思想改造は、肉体労働の鍛錬を通じてこそ完成されるとするのが文革を推進する側の思想であった。都市と農村、農業と工業、そして頭脳労働と肉体労働といった三大差別の解消が社会主義革命の重大な任務であるとされたが、そのうちのひとつ、頭脳労働と肉体労働の乖離は知識人の目にも明らかであったから、彼らも強制的ではあったが、労働者・農民に学ぶべく覚悟を決めて労働改造に参加した。その改造は、全国に千五百ほどあった「五七」 幹校で行なわれた。⁽⁹⁾

二

賀黎・楊健の『無罪流放』の「前言」によれば、「五七」 幹校の盛衰は次の三つの時期に分かれるという。⁽¹⁰⁾

1 草創期（一九六八―七〇年）と、2 落潮期（一九七一一―七四年）、そして3 晩期（一九七四―七六年）の三期である。落潮期は七一年九月一三日の林彪がモンゴルで墜落死した時より始まる。3 晩期は、七四年、江青が鄧小平の復活に対して「右傾翻案風」反対のキャンペーンを起こしたことから始まり、再び中央特捜班の追及が厳しくなった時期である。それも、七六年十月初めの「四人組」逮捕で終了することになる。

七四年の末、郭小川は、「万里長江横渡」の詩の中で、「斬新な太陽」を謳歌した部分（「斬新斬新的陽光／洒進了／千街万户……」）が林彪を隠喩しているとして、中央の審査に再び掛けられることになった。⁽¹¹⁾その後、郭が天津の団泊窪に移されてどのような生活をしていたかについては、胡金兆の報告がある。⁽¹²⁾

それによれば、団泊窪「五七」 幹校は、河北軍区が管理するようになっており、廊坊分区の宋副政治委員が最

高責任者であった。宋は鷹揚な人で、郭小川に対しても一つだけの条件「団泊窪『五七』幹校の外に出てはいけない」を出すだけであった。咸寧から団泊窪に来た者は「新第一中隊」として纏められた。元の「第一中隊」（映画協会の者）と「第五中隊」（劇、美術、曲芸協会の者）が合併して、宿舍を空け渡し、「新第一中隊」がそこに入った。郭小川には一人部屋が与えられ、左右の部屋には命を受けた監視人が入った。郭はすることがなくて、華君武や鐘靈などと酒を飲み、将棋やブリッジをしていた。彼は、旧正月でも家に帰ることが許されず、『光明日報』で仕事をしている妻の杜恵が「五七」幹校にやって来ることだけが許可された。彼女がやって来るというニュースが伝わると、楊志一、華君武、鐘靈や胡金兆など普段の飲み仲間が大急ぎで手伝い、部屋を片付けたが、ポロや缶・ビンなどたくさんさんのゴミの山が出た。⁽¹⁴⁾

七五年十月、急に二つの命令が下った。一つは、國務院の緊急命令で、十日以内に静海『五七』幹校を閉じ、全員北京に戻り、文化部の幹部分配事務室で命を待て、というものであった。この時の文化部の局クラスの単位は于会泳が牛耳っていた。二つめは、郭小川の特別審査は解決した、再度解放する、と宣言するものであった。こうして、中央特捜班の差し回しの自動車に乗って、北京に郭小川は戻った。「五七」幹校を去る前の晩は一睡もせず、「秋の歌」⁽¹⁵⁾を書いたという。

一九七六年九月、郭小川の古い案件が再び持ち出された。七五年の秋の団泊窪『五七』幹校での行動が、「右傾翻案風」に属するのではないかということであった。鐘靈や馮牧、そして胡金兆まで厳しく追及された。胡金兆はそこでうっかり、中央戲劇学院の呉雪のことを口に出し、郭小川が文化部の指導者に手紙を出したことがばれてしまった。于会泳ら文化部の者と解放軍から来た侯再林らは大喜びで、この線から大魚が捕まえられると張り切ったが、十月六日、「四人組」が逮捕され、この件は終息した。

郭小川は、十月一八日、河南省林県から北京に戻る途中、安陽の招待所で寝たとき、タバコの吸殻から火災を起こし、窒息死したという。全身七〇%の火傷を負っていたという。身分は「中央組織部首長」であった。¹⁶

三

『五七』 幹校を指導し推進した側の思考や日記などが見つかからないので、五七幹部学校の組織や運営については、今ひとつ明確でない所があるが、文学者の報告や日記、回想録などによれば、最初の三年ほど、特に最初の一年ほどの住む家もままならぬ時が過ぎると、極めて情性的にその日を過ごすようになる。勿論、この機会に語学を勉強したり、マルクス主義の理論をもう一度基礎から読み直す人も多かった。但し、郭小川の例にもあるように、酒を飲み、その肴に楽しみを求め、深夜に及んで仲間内で思うことを好き勝手に放談することもあった。いかにも有意義な楽しい生活が繰り広げられたように見える。しかし、それは囚われの生活から来る不正常な精神の表出であった。例えば、他の者が次々と解放されて人が少なくなっていくのに、自分ひとり残される孤独。さらに、他の者が北京の家に一時帰宅が許される中、郭小川ら少数の者だけが、それさえ許されずに留め置かれる悲哀などがあつたにちがいないからである。時には、近くの労働改造所から、監視が時ならず放つ銃声が聞こえ、神経をいたぶるのである。¹⁷

理想的に「批判と自己批判」の運動が行なわれたとする、一九四二年の延安での整風運動も、単に理論的指導の面だけではなく、村の要所には銃剣を持った兵士が監視していたのである。『五七』 幹校も、軍隊組織に習って設立したからには、「幹部が労働しているときは、拳銃を持っている警備員が横に立ち、守っていたようです」とい

う状況があつたに違いない。それは必ずしも、幹部を守るためだけではなかつたであろう。こういう事柄の背後にある強制的の意味が、このような銃剣による監視という実践的な行為を含んでいたことを、ややもすると忘れがちだが、「五七」幹部も政権が銃から得られるとした思想の具体化であることに思い至れば、現実の冷酷な背景を作家達は感じていたに違いない。

注

- (1) 『郭小川詩選』（人民文学出版社、一九七七年十二月）三八二―三八五頁。
- (2) 周小松「団泊窪的又個个秋天」（『中国領域経済報』二〇〇三年九月一六日）。次のウェブサイトより見ることが出来た。http://www.dqz.gov.cn 周小松については未詳である。
- (3) 一九七五年七月二五日。映画『創業』が正式に復活したのは、七六年十一月のことである。
- (4) 「『団泊窪的秋天』的故事」。http://www.cddaily.com.cn
- (5) 同注(4)。
- (6) 郭小川の文革中のことについては、陳徒手「団泊窪的秋天的思索」（陳徒手『人有病 天知否——一九四九年後中国文壇紀実』人民文学出版社、二〇〇〇年九月、所収）に詳しい。
- (7) 胡金兆「郭小川の晩年」（原載『縦横』二〇〇三年第九期、胡金兆「一九七五年前後の郭小川」）。次のウェブサイトによる。
http://www.my285.com/ddmj/gxc/012htm
胡金兆は、『戯劇電影報』の責任者であった。『百年琉璃廠』（当代中国出版社、二〇〇六年八月）や『程硯秋』、『中国四大名旦』などの著書がある。
- (8) 拙著「過去の残影——咸寧の五七幹部学校について」（『関西大学 中国文学会紀要』第二八号、二〇〇七年三月）本書七九頁以下。

- (9) 李城外「話説向陽湖」【転帖】咸寧向陽湖中央文化部五七幹校 <http://bs.chubei.com/dispsbs/asp?boardid=74&id=464948>による。
- ここでは、中央一級の機関が開いた「五七」幹校が百六ヶ所あり、各省に計千四百九十七ヶ所あったとされている。李城外は湖北省咸寧市の出身で、「幹校文化」を思考して咸寧から文化を起こそうとしている。咸寧市版權局局長。著書に『向陽湖文化人采風』上下や『向陽情結』上下（どちらも、人民文学出版社、一九九七年十二月、二〇〇一年二月）など。
- (10) 賀黎、楊健「前言」（賀黎、楊健采写『無罪流放——六十六位知識分子五七幹校告白』（光明日報出版社、一九九八年九月、所収）。なお注(8)の拙著「過去の残影——咸寧の五七幹校学校について」を参照されたい。
- (11) 同注(1)。三三四—三三七頁。
- (12) この辺のことも、注(6)の陳徒手「団泊窪的秋天的思索」に詳しい。
- (13) 同注(7)。
- (14) 郭小川が生活無能力者であったことは、幾つかの報告がある。齒が悪かったこと、睡眠薬の飲みすぎであったことなども、注(6)の陳徒手「団泊窪的秋天的思索」に詳しい。
- (15) 同注(1)。三八六—三八八頁。
- (16) 同注(7)。
- (17) 注(6)の陳徒手「団泊窪的秋天的思索」には、王樹舜の言葉として「附近勞改農場有部隊崗哨、晚上時常聽槍聲。(付近の勞働改造農場には部隊の歩哨がいて、夜にはしょっちゅう銃声が聞こえた)」（三〇三頁）を採録しているし、また、李昌栄の「小川到団泊窪是個寒冷的冬天、風很厲害、刺骨、幹校蕭條、像在荒野。勞改農場蓋有崗樓、哨兵發現情況可隨時開槍、有時打死了逃跑的犯人。(郭小川が団泊窪に来た時は寒い冬であった。風がひどく骨を刺すようで、幹部学校も物寂しく、まるで荒野そのものであった。勞働改造農場には監視樓があって、番兵が異常を発見すると直ぐ銃を発射した。時には逃走犯を射殺することもあった)」（三〇五頁）という発言も採録している。
- (18) 上海の奉賢「五七」幹校を訪問した水野君が採集した言葉。

二〇〇四年二月一日に、上海に留学していた関西大学大学院生・氷野善寛君に、現地に行つて写真を撮つてくれるように私は頼んだ。氷野君は、実際に奉賢の「塘四線」をバスを乗り継いで行き、今は「上海市財貿管理幹部学院分部」と看板のある敷地を調査してくれたが、すでに「五七」幹部当時のものは、レンガ造りの倉庫以外は殆ど残っていないかつたし、当時を知っている人もそこにはいなかった、という。

ここに氷野君の報告の一部を掲げる。

(前略) 今回現地で、バスの運転手に話を聞き、五七幹部学校があつたらしくあたりでおろしてもらい、その近くにありました「上海市財貿管理幹部学院」という単位にいたおじさん(六一年から上海の打浦橋から下放されて現在もこの場所に住んでいる人とこの学院を管理している人)二人にこのあたりの当時の様子と五七幹部学校についてお話を聞くことができました。その結果、彼ら二人がいうには、この現在「財貿管理幹部学院」がある場所こそが、五七幹部学校の一部があつた場所で、当時はわらぶきの小屋で建物が作られており、その中で幹部や文学者たちが共同生活を行なっていたため、すでにその当時の建物はなくなつてないそうです。残っていたのは、初めに作つた糧食を保存するための倉庫(糧食は大事で、保存のためにレンガ造りだったため現在も残っている。)ともう一つは、車を修理するためのガレージの二つだけでした。当時のわらぶき小屋は、敷地の中に、びっしり作られており、だいたい一万一人ぐらいの人がいたとのことでした。そしてだいたい三ヶ月に一回、ここで暮らす人が交代し、ここにきた幹部たちは、農民の生活を体験し、体を鍛えられたそうです。上海の当時の市長(引用者注：陳丕顯・上海市党委員会書記や曹荻秋・上海市長)もこの場所で労働させられたそうです。幹部が労働しているときは、拳銃を持っている警備員が横に立ち、守っていたようです。(以下省略)

七 郭小川の自己批判

一

私はこのところ、五七幹部学校について調べているが、文化部の咸寧における五七幹部学校については、李城外氏の努力によって、当時湖北省咸寧に下放していた文化人の相当数の聞き書きが残っているので、かなり具体的にわかるようになった。⁽¹⁾ 李城外氏の努力はこれまで文化人と言われる人からの聞き書きが中心であった。これは、当事者である文化人たちが高齢のために次々と亡くなっていく現在では、大変貴重な資料となっている。早くから聞き書きの意義に注目し、実行に移して、文化人たちの言葉を書き留めた功績は実に大きな業績で、文学史上の一つの大きな財産となっている。⁽²⁾

ただ、外国人たる私から見ると、五七幹部学校の構成や組織といったものを先ず見取り図として知りたい。さらに、受身であった文化人の方からばかりではなく、積極的に運動を進めた側からの意見も知りたいと思うものだ。

二〇〇八年の九月に湖北省咸寧市に向き李城外氏に会った時に、こういう方面のことも知りたいという私の意向を十分に伝えることができなかつたのだが、五七幹部学校の運動の推進者の意見と、当時の農民の考えとを収集

して欲しいというようなことは、言ったと思う。それかあらぬか知らないが、李城外氏のブログに、当時の農民たちのことが載るようになった。⁽³⁾文化人と、彼らが仮住まいをした家の家主であった農民との交流についての報告が多々見られるようになったのだ。

驚いたことに、そして、当たり前のことだが、多くの農民はすでに亡くなっているのであった。その子供が、かなり大きくなって、インタビューなどに応じているのである。多くの文化人は、そこでの誠実な生活態度を以って、農民たちに強く記憶づけられている。中には、その後、家主の子供が北京に出掛け、北京に戻った文化人と会い、丁重に且つ大いに歓待されたことを喜んで吐露してくれる農民もいる。⁽⁴⁾都会からの異物である文化人との接触は、だからと言って何らかの影響を当時の農民に与えたと言ふことにはならないで、農民は農民らしく同じような生活を続けているのである。当時言われ、そして、最大の目的であった知識人（文化人）が貧農、下層中農に学ぶことも、ほとんど何の成果も挙げていない。⁽⁵⁾

それはそれとして、当時の軍宣隊の指導者の発言、つまり毛沢東思想宣伝隊として五七幹部学校を指導した者の発言が聞きたいという私の思いはますます強くなっていった。今までは、武漢軍区の李曉祥が咸寧の五七幹部学校の指導責任者としては唯一発言しているだけであった。⁽⁶⁾ただ、彼も「闘・批・改」と言われた、闘争や批判会のことには、当時のやむをえない辛い思い出だけが残るとして、多くを語っていない。

* 工余時の大批判、憶苦思甜、搞講用、訪貧問苦、表決心等這些特殊年代的特殊産物、是向陽湖文化人最不愿触及的痛心的回憶。⁽⁷⁾

（仕事後の大批判や、昔の苦しみを思い今の甘さを考えること、毛主席の本を読んで行動に活かすこと、貧農を訪れ

て苦しみを聞くこと、決意を表明することなどの特殊な時期の特殊な行為は、向陽湖文化人が最も触れたくない心を痛める思い出だ。

ところが、つい最近、黎喜来という人の「我参与弁理郭小川專案的経過」という文章が李城外のブログに載った。⁽⁸⁾ 黎喜来は以下に述べるように、郭小川という作家協会の書記であった男の専門調査委員会の委員として、郭の過去の行状や社会関係を調査したのである。中央からの指令によって、文化事業方面のおもだった人物の過去の履歴（中国語では歴史と言うが）を調査して罪状を決めることは一つの規範として共産党内では成立していた。

黎喜来はもと崇陽県⁽⁹⁾の人民代表大会の常務委員であった人だ。文革当時の調査行動がかなり詳細に、微々たる事項にまで及んで調査されたことはすでに幾つかの事例があつて知られていることである。黎喜来もそのようなことをしているが、せっかくの報告であるから、ここに訳出して紹介したい。

五七幹部学校については、すでに幾つかの紹介の文章を私は書いた。⁽¹⁰⁾ そこで、ここでは繰り返さない。ただ、郭小川とはどんな人物であつたのか、まず見ておこう。

一一

郭小川（かく・しょうせん、Guo Xiaochuan。一九一九〜七六）、詩人。本名は郭恩大。河南省豊寧県出身。学生時代から抗日運動に参加し、一九三七年八路军に参加した。四一年から五年間、延安のマルクス・レーニン主義学院で学ぶ。五五年『詩刊』雑誌編集委員、五六年中国作家協会理事、六二年中国共産党機関紙『人民日報』の記者と

なる。プロレタリア文化大革命開始後、七〇年四月から七五年九月まで湖北省の咸寧や天津の団泊窪の五七幹部学校にいたが、七五年十月問題が解決して解放される。河南省の林県と輝県を訪問した後、七六年十月、寝タバコの火が原因で焼死した。⁽¹¹⁾

抗日戦争期から詩を発表し、「我們歌唱黄河」「老雇工」など、抗日を宣伝し志気を鼓舞するための作品を書いた。長詩『將軍三部曲』（六一年）、詩集『甘蔗林——青紗帳』（六三年）などがある。大部分は熱狂的な政治詩であるが、単なるスローガンの羅列に終わっていない。「団泊窪の秋天」（七五年）や「痛悼敬愛的周總理」（七六年）が特に愛唱された。『郭小川詩選』が死後の七七年に出された。⁽¹²⁾

郭小川については、すでに私は触れたことがある。⁽¹³⁾ ここでは、郭小川が過ごした咸寧の五七幹部学校よりも、後期に過ごした天津の団泊窪五七幹部学校のことがどちらかというところを中心であった。なぜ、咸寧から天津に移動させられたのかはよくわからなかったのだが、黎喜来の「我参与并理郭小川專案的經過」という文章はそのことを解く鍵を書いている。

黎喜来は咸寧の五七幹部学校で、軍代表となり、馮雪峰（一九〇三〜七六、評論家）や郭小川などの特別案件の調査に参加したという。そのころ彼は三十歳にならぬ年であったという。しかし、現在はまだ退職して数年になるので、今のうちに、郭小川特別案件の調査に参加したことを李城外の勧誘もあつて、書いておこうという気になったという。

黎喜来の紹介に拠れば、郭小川は、一九三九年九月、抗日運動に身を投じ、八路軍に参加した。王震將軍の三五九旅団の文芸戰士となった。二ヵ月後、入党した。その時、彼は満十八歳であった。情熱的で勇敢で知恵もあつた。彼はしっかりと毛主席についてゆき、すべてを党と人民に奉げようという信念だけを持っていた。そこで彼は、最

前線の陣地に立ち、党と革命を謳歌した。延安で熱情に溢れた青年詩人となったのである。

郭小川は、一九六九年数ヶ月遅れて五七幹部学校に、謝冰心とともにやってきた⁽¹⁴⁾。彼は第四大隊第五中隊に編入された。第四大隊は、中国作家協会、中国文聯、中華書局、商務印書館、人民文学出版社などの数単位からなっていた。黎喜来はこの大隊の軍代表を一時期担当した。そして、いつも郭小川が長い労働隊列の先頭を歩き、頭を上げ、上半身裸で、烈日の下、荒地を開墾して田植えに行く姿を見ていた。休みになると、田畑や林間、また灯火の下でいつもせせせと休むことなく創作に励んでいるのを見た。彼の詩は、楽観的で希望に溢れ、党や祖国や人民に対する情熱と信念に溢れていた。同僚を励ますために、彼は自分の創作した三十首余りの詩を大隊の壁に書き記した。それらは「楠竹歌」「祝詩」「贈友人」「万里長江横渡」「長江边上五七路」などの詩であった。

郭小川は、咸寧の五七幹部学校にいる間にも、国家体育委員会や武漢軍区、瀋陽軍区、蘭州軍区などに借り出されて創作をした。彼の勇氣、天真爛漫、樂觀性などが逆境の中でも容易に紙と筆を手から放さなかつたのだ。これが問題を起すことになった。あの異常な政治状況の下で、誰が詩を書いたりするか？誰が敢えて叫び声を上げるものか？利口な者なら黙って時をやり過ぐすのである。しかし、郭小川は恐れることなく、忌避することなく、七首のような戦闘の詩を投じたのだ。これが「四人組」⁽¹⁵⁾の注意を引いた。郭小川は『体育報』に庄則棟⁽¹⁶⁾に関するレポートを書き、このレポートが国内外で評判になった。しかし、これが江青を怒らせた。これは旧文化部の「黒い糸」の復活であり、旧文化人の復活でもある。これは文化大革命の後退でもある、というのであった。一九七四年三月三十日に、江青は文化組の于会泳⁽¹⁷⁾をして、郭小川を国家体育委員会から咸寧の五七幹部学校に戻して、継続して労働改造をするようにした。同時に、江青自ら乗り出して中央特捜班が郭小川を全面的に特別案件として調査することを批准した。

一九七四年七月十七日、江青は次のような決定を出した。1. 中央特捜班が郭小川と林彪、葉群¹⁸及びその一味との関係を調査すること。2. 周揚¹⁹特捜班が郭小川と周揚一派との関係及びその復活活動について調査すること。

次いで、中央特捜班は湖北省軍区に次のような指示をした。1. 郭小川は五七幹部学校で労働すること。大衆が問題を摘発し批判を進めるのに便利なように、郭小川をしばし五七幹部学校にとどめ、労働させながら調査を進めること。2. 当校が湖北省軍区の管轄になったことに鑑みて、湖北省軍区から三ないし五名を配置転換して、郭小川の活動や安全管理、思想動向を掌握することに責任を負い、関係する手がかりの調査に責任を持たせること。

一九七四年八月二三日、中央特捜班は、湖北軍区の政治部副主任・王万声と一緒に、文化部の咸寧五七幹部学校に来て、郭小川が調査を受ける要綱を宣言した。

1 批林批孔運動中に幾つかの単位の大衆が、郭小川が文化大革命前後に多くの問題がある文章を書いたことを摘発した。大衆の摘発と中央の指導者の指示に基づき、咸寧の五七幹部学校では郭小川の問題の調査を続けることを決定した。郭小川は今から幹部学校で、労働しながら調査を受けねばならない。

2 この決定に対して、郭小川は正確な態度を持ち、党を信じ、党の政策を信じ、大衆を信じて、真面目にマルクスレーニン主義と毛主席の著作を学習しなければならない。積極的に進んで徹底的に自己の問題を組織にはつきりと白状しなければならない。

3 組織が速やかに問題を明確にするために、郭小川は過去に書いたものを、すでに発表したものと未発表の原稿とともに組織に渡さねばならない。手許にあるものは、今すぐ提出し、別の場所にあるものは、簡単な手紙を書いて、保存人に告げ、組織に渡すこと。

このほかにも郭小川は系統的な自白資料を書かねばならないが、そのうちには次のことを含めること。

- (1) 出身家庭、おもな社会関係、本人の経歴とそれぞれ重要な時期の証人、証人の現在の工作单位と住所。
- (2) 各履歴段階のおもな問題とその問題に関する文章。
- (3) 林彪と葉群反党集団との関係。

4 組織の調査を受けている期間は、郭小川は外界と連絡してはいけない。また、許可なく手紙を書いたり、電報を打ったり、電話をしたり、よそからの人と会見したりしてはいけない。勝手に外出してもいけない。郭小川は自覚的にこれらの規則を守り、また五七幹部学校の生活規則と制度を守らねばならない。体の状態により診察や投薬する場合は医者への指示に従い、自分で勝手に薬を用いてはいけない。今、手持ちの薬は医者に渡して保管してもらうこと。

以上が、その要綱の内容である。

一九七四年八月二六日、湖北省軍区政治部は三十九号文書を発して、中央指導者の郭小川に対する調査を貫徹することを決定した。

中央の指導者の指示に照らして研究を重ね、張立功（幹部学校軍代表、副課長、黨員）、林源（元作家協会対外文書委員会弁公室副主任、黨員）、黎喜来（幹部学校軍代表、參謀、黨員）、張玉祥（北京発行所財務課副課長、黨員）、徐貽庭（元『文芸報』編集委員）の五名を選び一つの班を作った。張立功を班長に、林源を副班長にした。班では中央の指示を学習し、思想を統一し、認識を高めて初歩的な工作方案を定めた。こうしてから、北京に向き、調査の任務を受けたのである。班のうち、張立功、張玉祥と黎喜来は軍区の紹介状を持って行った。

中央の特捜班による具体的な指示は、一つ目は、中央の指導者の意見を伝達することであった。二つ目は関係する党の文書を学習することである。三つ目は、中央が発した七四年の第二十三号文書を学習して、調査の組織規律

を強めることであつた。

そして、黎喜来たちが確定した調査の内容は次の通りである。

- (1) 郭小川の出身家庭を調べ、本人自身や家庭に搾取行為があつたかどうか。
- (2) 郭小川が革命に参加する前の幾つかの事柄について調べる。
- (3) 郭小川が豊寧県の県知事をしていた時、階級的立場を喪失した行為がなかつたかどうか。
- (4) 郭小川は、詩歌や散文を利用して党や社会主義、毛沢東思想を攻撃したりしたことがなかつたかどうか。
- (5) 郭小川が五七幹部学校に来てから、復活の活動をしなかつたかどうか。
- (6) 郭小川と林彪、葉群や一味との関係を調べる。

以上の六項目の調査のために、黎たちは四ヶ月を費やし、数千里の行程を歩き、百人近くの人々から調書を取つた。黎喜来たちは証拠を確実にし、確かな依拠を重んじ、あらゆる調査資料を整理して、慎重な態度で中央特捜班に報告書を提出した。

結局のところ、郭小川は咸寧の五七幹部学校で調査を受け、迫害された期間、始終一人の共産党員の本領を保持して、党に対する信念は揺ぎ無かつた。彼は党のよき幹部たるに恥じなく、人民のよき詩人であつた。

以上が黎喜来の「我参与弁理郭小川專案的經過」という文章の概略である。

三

黎喜来の「我参与弁理郭小川專案的經過」という文章には、「二」で紹介したこと以外に、まだ六項目の調査内

容の中身が述べられている。この内容の具体性が、そして詳細であることが、我々に当時の調査というものが如何に綿密であったかということを知らせる。確かに、こういう調査は厳密に行なわれたようだ。たとえば、最近日本が出た董国強の『文革 南京大学の十四人の証言』などにも、「私たち専門捜査班は何十人も人を派遣して全国各地で千人余りを調査したが」と調査の綿密なことに触れている。⁽²⁰⁾

そこで、その六項目の調査についても煩瑣になることを恐れず、ここに紹介しよう。

(1) 郭小川の出身家庭を調べ、本人自身や家庭に搾取行為があったかどうか、という項目についての報告。

郭小川は戸籍が河北省豊寧県鳳山鎮の人である。一九一九年九月に生まれた。父親の郭覚生は鳳山鎮で私塾を開き教えていた。一九三三年日本軍の侵略を避けて逃げ、家族すべては北平に移った。北平が解放される前夜まで(つまり中華人民共和国になるまで)朝陽門三里村に家を借りて、相変わらず塾の教師をしていた。自由職業者ということになる。一九五五年病没。郭小川は七歳で勉強を始めた。父親に従って北平に來た時は、年僅かに十四歳であった。一九三三年に、北平の蒙蔵学校に入学した。十五歳で北平国立中山学校に転学した。十六歳で当校の高級中学に進み、十七歳で北平東北大学工学部補習班に入った。郭小川は学生出身者とみなせる。彼の父親と彼本人にはどちらも搾取行為はなかった。

以上の情況は、中共豊寧県委員会、朝陽区公安局、教育局などの部門と共同調査を経た。並びに、豊寧県鳳山鎮の幹部や大衆との座談会や確認を経ての結果である。

(2) 郭小川が革命に参加する前の幾つかの事柄について調べる、についての報告。

① 郭小川が在学中の期間は、成績が優秀であるばかりではなく、愛国的な青年であった。北平に着いて後、一九三六年五月、丘琴と李奮の紹介で北平文芸青年連合会に入った。

②一九三六年八月、李維一と李新春の紹介で民族解放先鋒隊に加入し、抗日運動の積極分子になった。

③郭小川は六月一三日のデモ行進で拘束された。一九三六年六月一三日、北平愛国学生たちは日本の侵略と当局の不抵抗政策に抗議するためにデモ行進を挙行した。デモ行進の最中に軍警の殴打にあい、沙灘の警察署に拘留された。郭小川のその時の態度は断固たる態度で、高らかに「私は東北の人間である。私はただ抗日ということを知れば、すぐさま抗日するのだ」と言った。その後、学校側の交渉で郭小川は釈放されて学校に戻った。

以上のことは、石炭部副部長李建平、共産主義青年団中央の楊述、公安部の趙明それに、対外文書委員の李昌を通じて了解したことである。これは、郭小川が一人の愛国者であり、正直な青年であることを証明している。

(3) 郭小川が豊寧県の県知事をしていた時、階級的立場を喪失した行為がなかったかどうか、についての報告。

一九四五年八月、郭小川は組織から豊寧県に派遣され、解放後の最初の県知事になった。彼は中共豊寧県委員会の工作に参加したのである。当時は敵対闘争がかなり厳しく、新しい政権は建設されたばかりで、旧豊寧のいろいろな職業がチャンスをうかがい、敵味方の「綱引き」の情勢が激烈であった。郭小川は党の指導に従い、広く人民大衆を動員して悪質分子を排除し、悪徳地主の罪悪を暴き懲罰し、土地改革を行なった。彼は統一戦線の仕事をよくやり、彼の親戚や友人たちを動員して人民の懐に戻った。同時に、頑強な反動分子の親友・李鄂甫や李宜成などに対しては断固たる鎮圧を行なった。以上の材料は、豊寧県委員会の党史資料や、承德地区公安所、人民法院の個人情報記録書と判決文書などを閲覧調査したものである。

このことにより、郭小川は豊寧県での工作期間、旗幟鮮明で立場はしっかりしたものであったことが証明される。

(4) 郭小川は、詩歌や散文を利用して党や社会主義、毛沢東思想を攻撃したりしたことがなかったかどうか、についての報告。

郭小川は延安に着いた後、詩を書き始めた。彼はかつて、郭未惆、曲春、郭建風、湘雲、登雲、馬鉄丁などのペンネームを用いて、全国の多くの新聞雑誌に詩歌や散文を発表した。黎喜来たちの任務はこれらの詩と散文を集め、真剣に識別することであった。北京図書館で全国の新聞雑誌を閲覧し、郭小川のすでに発表したものや未発表の開放前後の詩歌と散文を集めた。調査の結果、党を攻撃したり社会主義や毛沢東思想を攻撃したものは発見できなかった。黎たちは詩歌と散文をコピーして中央特捜班が鑑別するように提出した。これらの詩歌と散文は、その後、『郭小川詩選』と『郭小川全集』に収められた。

(5) 郭小川が五七幹部学校に来てから、復活の活動をしなかったかどうか、ということについての報告。

郭小川は毛主席の「五七」指示の呼びかけに応じて、咸寧の五七幹部学校で鍛錬するためにやって来た。彼の態度は良く、積極的であった。幹部学校は彼に対する調査を非常に早く解除した。党内の思想・作風・組織を整頓する運動のうちで、また彼の組織上の活動を回復したうえ、第四大隊の政治工作の幹部を担当することになった。幹部学校では、彼は溢れる政治的情熱で大量の詩歌や散文と感想を書いた。彼の才気と名声と勇氣によつて、多くの単位が彼を借りて創作してもらいたがった。武漢軍区は毛主席の「五七」指示発表八周年を記念するために、撮影人員を幹部学校から借り出したうえ、郭小川に記録映画の解説の言葉を書かせた。彼は満腔の情熱で我を忘れて仕事をした。解説は十分生き生きとしており、扇動的であった。この記録映画は、総政治部と総後勤部そして武漢軍区の賞賛を得た。江青はこのことを知ると、大いに怒り、郭小川がまた飛び出して林彪反革命分子集団のために賛歌を歌ったとして、この映画を宣伝したり放送してはいけないと命令を下した。郭小川の「復活」行為という「罪状」として、解説の言葉と記録映画の見本刷及び彼の幹部学校での他の作品をひっくるめて中央特捜班に提出した。

(6) 郭小川と林彪、葉群や一味との関係を調べる、ことについての報告。

郭小川は革命に参加してから、毛主席と人民の軍隊に対して特別な感情を持っている。林彪反革命集団が自爆してから、幹部学校では批林批孔の運動が繰り広げられた。この運動中、郭小川は幹部学校の組織に向かつて、林彪及び葉群との関係を説明した。嘗て顔をあわせたことがあるし、知り合いの仲ではあるが、その後の往来はないし、深い関係でもない。彼らの一味と結託することなど不可能だ、と。黎喜来たちが大量の資料を見聞した結果、郭小川の詩歌散文の中に、たくさんの人民軍隊の奮闘精神を称揚したものはあるが、片言隻句として林彪や葉群を宣揚した語句はなかった。この調査については、黎たちは深く入りようがなかったので、ただ中央特搜班自身が判定するようにした。

以上である。

四

以上のことを整理すると次のようになる。

- 1 一九七四年三月三〇日、江青の指示により、郭小川を『体育報』より、咸寧の五七幹部学校に戻す。
- 2 一九七四年八月二三日、郭小川についての「調査要綱」が決定される。
- 3 一九七四年八月二六日、中央の「調査要綱」にしたがって、湖北省军区政治部が三十九号文書を出す。

調査班：張立功班長。林源副班長。黎喜来、張玉祥、徐貽庭の計五名。

したがって、郭小川は、調査要綱に沿っての自己批判書を書くことになる。文革で批判を受けた文学者は何回も自己批判書を提出し、調査を受けて、受け入れられれば通過したことになるのであるが、大概すぐには受け入れら

れず、不十分であるとして何度も書き直しを命じられた。たとえば、趙樹理⁽²²⁾なども解放後の新文学の旗手とまで言われたが、文革が始まると、解放後の文学を指導した周揚の尖兵であるとされて、批判というより迫害に近い仕打ちを受けて命を失ったが、彼もその自己批判書が全集の中に収録されている。もともと、次男の趙二湖の言によれば、自己批判書はたくさんあったが、その中でも一番筋が通っていてマシなのを全集に採録したと言う。

郭小川の全集十二卷(外編)には、二篇の自己批判が載っている。⁽²³⁾一篇は、「関于我参与炮制毒草剧本『友谊的春天』的交代材料」であり、もう一篇は「我的初步交代」である。前者の「交代材料」は一九七四年五月二七日に書き終わっているから、今は、後者の「我的初步交代」を見ていこう。

この「我的初步交代(私の初歩的な自白)」は、一九七四年九月一七日に書き終わっているが、「補充交代」が五つあり、五番目が書き終わった日付は十月四日から十月八日となっている。さらに、「検査我在文艺创作中的错误」を一九七五年一月五日に、「交代幾編作品的写作情况」を一九七五年一月七日に書き、「付带的請求」を一月九日に書いている。八十ページに及ぶ長編であり、それだけ誠実に真摯に書いたことがわかる。

「我的初步交代」は第二章で挙げた六項目の問題について(二四七頁)、問題の順番に沿って述べている。

先ず初めは「1. 私の出身家庭、歴史情況と各履歴段階における証人」というのが、郭小川の自己批判の最初の章である。そして、「(1)私の家庭はプチブルジョアあるいは、自由職業者に属す。」という項目から十四段階に分けて過去の事実を記入している。一九五五年十月までを一応の区切りとしている。というのも、郭小川は一九五五年から旧作家協会に来て「文芸黒い線」を執行したことになり、これ以後は重大な誤りを犯した時期となるので、別に具体的に告白するからである。なお、これまでの一九三三年北平(今の北京)蒙蔵学校に入学した時から十期に分けて分類し、それぞれに「証人」の名前を挙げている。多くが国民党政権の時期であるから、このように厳密

に自分の身分と行動を証明しなければならぬのであろう。「証人」の名前を挙げられればまだしも、死亡したり忘却したりした人も多いであろうから、自分の過去を証明してくれる人を見つけることは厳しいものがある。ただ、郭小川は「付記」までつけて、こう言っている。

*我歴史上比較重要的事件、是一九三六年我被捕了一天、直接証明人有的死了、有的不知在何処、我也不記得或不知道他們的姓名；但這件事、李建平、李維一是可以做出判斷的。當時「十二・九」運動的領導人如蔣南翔、李昌（這些人、我不熟悉）等、是了解那一次被捕的總情況的。⁽²⁴⁾

（私の履歴でかなり重要な事件は、一九三六年に私が一日逮捕されたことであるが、直接の証人は、ある者は死んでしまったし、ある者はどこに居るかわからない。私も彼らの名前を覚えていないか、知らない。但し、この事件は、李建平、李維一は判断を下すことができる。当時「十二・九」運動の指導者は蔣南翔や李昌などで（私はどちらとも親しい仲ではない）、彼らはあの時の逮捕の全体の状況を理解していた。）

特に郭小川も述べているように、一九三五年の「十二・九」抗日救亡学生運動でつかまり、拘留されたことは、当時厳しく追及される過去の汚点であった。この時、寝返って国民党に反省書などを書いて出獄したのではないかどうか、その本人が「叛徒」であるかどうかの決め手となった。この問題については私は趙樹理という作家についての問題で触れたことがあるので、⁽²⁵⁾ここでは述べない。

続いて、郭小川は「2・私と林彪反党集団との関係」について書く。集団であるので、林彪だけでなく、林彪の妻である葉群との関係から、黄永勝、戴金川、李劫夫、韓笑、陳伯達、李雪峰などについても書く。

郭小川と林彪との関係は、郭の詩「万里長江横渡」の中の「嶄新嶄新的陽光照遍了／千街万户。」という言葉が林彪を暗に賛美したのではないかと疑われていた。ちょうど郭がこう表現した時に、林彪が武漢にいたからである。⁽²⁷⁾ こういう詩の言葉の一語一句を取りあげて、その裏には何らかの政治意図があると見る態度は、勿論詩の文学性などを問題とする態度ではなく、言葉の直接的な伝達面のみを問題にする態度である。詩であろうとなかろうと、言葉の伝達面のみを問題にすることの対応を引き出すのは、何らかの意図を持つ対応であるが、そういう対応を引き出すような社会と密接に連携することを求めた詩や文章を郭小川も書いていたことは否めない。言葉に対して、発する方も受け取る方も単純な伝達関係にあるとする方面からだけしか考慮しないことは、人間に対しても単純な効果しか考慮しない、はなはだしい軽薄な不遜な態度であるように私には思われる。ここで、郭小川はこんなことを書いている。

*我記得、那時候的葉群是以「政治開展」自命的、她說她是北平二中（或女一中）的學生、三六年就入了黨、在女大又當過科長（批林整風後才知道她那時已是特務）、所以我們談話時也談國內抗戰形勢和世界大戰形勢（那時我对戰爭形勢相当熟悉）、但主要是談外國作品和身邊瑣事。⁽²⁷⁾

（私の記憶によれば、その時の葉群は「政治に鷹揚」であることを自任していた。彼女は自ら北平第二中学（女子一中とも言う）の学生で、三六年に入党した。女子大では科長にさえなったことがある（批林整風の後で初めて彼女がその時にはもうスパイであったことを知ったのだ）と言った。そこで、我々は話をするときも国内抗戦の情勢や世界大戦の情勢などについて話した（その当時、私は戦争の情況に対してかなりよく知っていた）、でも、主に話したことは、外国の作品や身边雑事であった。）

郭小川は、一九四一年以後の年に葉群と知り合いになったという。延安で彼と葉群は上に引用したように話し合ったことがある。そして、彼は、葉群が女子大の科長になったところにスパイであったことを、一九七一年の批林整風の時に明らかになったとされる葉群の履歴から、一九七六年に書き入れるのである。つまり、郭小川は葉群と一九四一年ごろには付き合っていたのである。その相手が一九七一年の九月一三日に毛主席を暗殺しようとして失敗したので、飛行機で国外脱出しようとして、モンゴルの草原に墜落して焼死した。葉群も一緒であった。毛主席を暗殺しようとしたわけであるから、林彪とその妻である葉群が良い人物でないことは想像できるであろう。したがって葉群が共産党員でありながら、国民党のスパイとされても政治的にはありうることである。でも、そういうレッテルが、一九七五年に郭小川が書く自己批判書にも関係してくるのである。郭がいかに悪い人間と付き合いがあり、その付き合いの程度がどのくらい深いものであるかが、問題となるのである。(批林整風の後に初めて彼女がその時にはもうスパイであったことを知ったのだ)と括弧をつけて書き入れねばならないところに、彼の苦しい立場が見えよう。

3は、「我所犯的文芸黒線の錯誤」(私が犯した文芸黒線の錯誤)である。

郭は、1. 一九五六年の「百花齊放 百家争鳴」の方針を歪曲したこと。2. 丁玲、陳企霞の名誉回復に間違つて手を下した事。3. 魯迅の三十年代の活動への評価に周揚たちの意見を入れたこと。などを自己批判している。そして一九五七年に書いた長編詩「一個和八個」が階級闘争消滅論や階級調和論に立ったものであったと自己批判している。以上の点を(1)一九五六年五七年の誤りだと述べているが、そのあと(2)では一九五八年五九年の問題について述べ、(3)では一九六〇年六一年の問題、(4)一九六二年から六六年前半の問題と分けて述べる。今、煩を避けていちいち述べないが、たとえば、一九五九年に書いた「望星空」という詩で次のように言う。

* 「望星空」也是一株大毒草、其中有這樣幾句：「星空呵、只有你才稱得起万寿無疆；」這顯然是對偉大領袖毛主席的偉大形象的損害、是嚴重的政治錯誤。⁽²⁸⁾

（「星空を望んで」という詩も一大毒草であった。その中にこういう句があった。「星空よ、お前だけが幾久しく長寿を保つと称するに値するのだ。」と。これは偉大な指導者毛主席の偉大な形象に対する損傷であり、嚴重な政治的間違いである。）

「万寿無疆」という言葉は、「偉大な指導者」だけに使われる「偉大な形象」を表す言葉であつて、「星空」などを使用してはならぬのであつた。郭小川は、一九五九年や文革初期のこの詩に対する批判には、自分の動機と効果との乖離を訴えて、言葉の直接的な効果を盾に批判する意見には不服で承服しなかつたのであるが、一九六四年のこの自己批判書では、「嚴重な政治的な間違い」であつたと自己批判している。そもそも「万寿無疆」などという言葉は、以前は、皇帝の長寿を祝うときに使われる言葉であつた。嘗て、日本でも「不敬罪」や「非国民」という言葉が跋扈して人を束縛した時代があつた。現在でも一国の首長に敬意を強制し、違反者を極刑に処するところがあちこちに現存している。星空に万寿無疆などという言葉を使つてはいけない、万寿無疆は偉大な指導者を形容する言葉であるとする思考を、過去のことであると笑つていられるであろうか。行動はもとより、言葉はかくも危険な状態にいつも置かれているのである。中国においては特に言葉に対して、揚げ足取りと思えるような非難批判が昔から厳しかった。皇帝の名前と同じ字を使うことさえ許されぬ時代もあつたのであるから。すでに挙げたように黎喜来も「あの異常な政治状況の下で、誰が詩を書いたりするか？誰が敢えて叫び声を上げるものか？利口な者なら黙つて時をやり過ぎるのである。」と言つていた（一四四頁）。だからこそ、このような文革の時期に多くのもの

は声を挙げようとしなかったのだが、郭小川は一人勇んで詩や評論を発表した。

* (補遺) 一九六二年到一九六六年這一段時間內、我的作品也不是沒有問題。一篇是我于一九六五年三月寫的、評論話劇『女飛行員』的文章、我當時是全面肯定的、特別肯定它、宣傳了毛沢東思想”。在文化大革命前後、我聽說、江青同志批判了『女飛行員』、因為它把學習毛沢東思想的群眾運動寫在彭德懷當國防部長的時期、這就為彭德懷這箇反黨頭目臉上塗了金。⁽²⁹⁾

(補遺) 一九六二年から一九六六年の時期には、私の作品にも問題がないわけではなかった。私が一九六五年三月に書いた、新劇『女性パイロット』を評論した文章がある。私は当時これを全面的に肯定した。特に『毛沢東思想を宣伝している』ことを肯定したのだ。文化大革命の前後に、私はこう聞いた。江青同志が『女性パイロット』を批判した、と。というのも、これが書いている毛沢東思想学習の大衆運動は彭德懷が国防大臣になっているときだ。これは彭德懷という反党の親玉の顔に金を塗って賞賛するようものだ、と。

「自己批判書」の「補遺」という文章からわかることは、郭小川が位置していた立場と言うものが、決して文学的な評価の次元ではなく、文章中の言葉や事柄の背景を考慮する次元からのものであるということである。すなわち、政治的評価によって左右される次元に郭小川は囚われていたのである。したがって、上の文章からわかるように郭小川は、時の権力者であった江青から好まれず、場合によっては憎まれることになり、それが郭小川の地位をいつまでも「解放」されることのない、調査対象として留め置かれることになったのである。

郭小川の息子である郭小林は次のように書いている。

* 由一九七四年八月至一九七五年十月、失去人身自由歷時十四個月之久、個人信件被查看、上廁所有人跟隨、不許与別人交談。期間適咸寧幹校撤銷、他由專人押送轉移至天津團伯窪幹校、在北京轉車時、江青親自過問、不準進市區、只準在豐台車站停留。在咸寧幹校撤銷的聚餐會上、不允許他与衆人同卓、讓他坐着小馬扎、在牆角一個人吃……⁽³⁰⁾

(一九七四年八月から一九七五年十月まで、人身の自由を失うこと十四ヶ月の長きに及んだ。個人の手紙は検閲され、トイレに行くにも人が付いてきたし、別人と話を交わすことも許可されなかった。その時はたまたま咸寧の五七幹部学校が撤収される時であったので、彼は専門の人に護送されて天津の團伯窪の幹部学校に転送された。北京で乗り換える時、江青が自ら意見を言つて、市内に入ることを許さず、ただ豊台駅に留まっているだけであった。咸寧の五七幹部学校が撤収する晩餐会でも彼はみんなと一緒にテーブルにつくことが許されず、小さな腰掛に坐つて壁の隅で一人で食事をするようにさせられた……)

郭小川の悲惨な境遇が、時の権力者の恣意性によつて決定されていることがわかる。ここで息子の郭小林が述べていることは、この自己批判書より後のことであるが、自己批判書の有効性を考える時、私が推測するに、自身の真摯さとか高度の思考が要求されるものではないのである。

郭小川は、さらに「4. 文化大革命中に犯した私の誤り」を書く。これも、(1)文化大革命に対する問題(2)体育路線に対する問題(3)文芸革命に対する問題に分けて書いている。しかし、ここではもう詳細に紹介する必要はないであろう。

最後に、郭小川は次のようなことを書いている。

* 去年、聽到伝説、說中央領導同志說我「簡直是修正主義」（或「修正主義分子、或修正主義苗子」）。當時、我不相信這是中央領導同志說的、心里有一千條、一萬條理由為自己弁解；現在、經過這一次交代、重新回顧了幾十年的錯誤、達到與上述傳說的同樣結論。這箇認識一經形成、我就不再考慮問題的性質了、所以、九月一日宣傳隊張同志找談話、用了一些處理敵我矛盾的詞句、如「陰謀」、「反党」、「坦白從寬」……等、我聽了、便不感到奇怪。我想到、如果組織上對我的結論是敵我矛盾、我也是接受的、有什麼辦法呢？自己的所作所為是不能改變的。惋惜是沒有用的、痛苦是多余的、後悔已經來不及了。⁽³⁾

（去年のこと私はこういう噂を聞いた。中央の指導者が私のことを「根っからの修正主義（或は修正主義分子だったかもしれないし、修正主義の苗だったかもしれないが）」と言ったというのだ。當時、私はそんなことを中央の指導者が言ったなどとは信じられなかった。心には千にも万にも達する言い訳があった。今、このたびの告白を通じて、再度数年の過ちを振り返ると、上述の噂と同じ結論に達した。そこで、九月一日に毛沢東思想宣傳隊の張同志が訪ねてくれて話をしたとき、敵対矛盾を処理する時の言葉、「陰謀」だとか「反党」や「正直に白状すれば寛大に扱う」などを使ったが、私は聞いていても少しもおかしなことだと思わなかった。私は思い至った。もし組織の私に対する結論が敵対矛盾ならば、私も受け入れるものだ。ほかに何か方法があるのか、と。自分がなした仕業は変えることができない。同情は役に立たない。苦痛は無駄だ。後悔はもう間に合わない。）

こうして、郭小川は一九七四年九月十四日に「我的初步交代（私の初步的な告白）」を書き上げた。

しかし、問題を「敵対矛盾」として処理するか、それに対する「人民内部の矛盾」として対処するかは大変な違いのある問題である。「敵対矛盾」として処理されると言うことは、犯罪者となることである。同じ人民内部の一

過性の間違いを犯しただけのもので扱われず、人民と敵になる者にどうしてなるのであろうか。張という「同志」は毛沢東思想宣伝隊の者である。つまり、黎喜来の言う張立功班長であるが、九月一日にわざわざ訪ねてきた話とは、これではまるで脅しではなからうか。たかが文学面の工作者を、つまり何の武器も持たず、権力を転覆するような「陰謀」もない者を、それも「反党」どころか党のために真摯に工作してきた者を、「敵対矛盾」として扱うかのような言葉を使って何を成果としてあげようとしたのか疑念が湧く。文学者たちが過去の履歴について自己批判を強いられた時、どうしても納得できなかった言葉が「反党」であったことを、私はここで強く思い出す。⁽³²⁾

郭小川は、幾夜も寝られないときを過ぎ、党員としてこの告白を政治的任務とみなし、党に対する忠誠心から嘘偽りもなく、ひとつの遺漏もなく書いたといっている。誠実というのがこのように仔細に綿密に書くことであるとを彼は証明している。

ほかに、「5. 私が書いた文章と作品に関して」というリストを九月二日に提出している。「6. 私の社会関係」という郭小川が付き合った人のリストを九月一七日に書き上げている。さらに、「補充交代(告白の補充)」を、五回にわたって、九月七日、九月二〇日、九月二八日、九月二五日そして十月八日に書いている。これは、郭小川の調査が引き続き行なわれ、そのたびに追加の自己批判書を提出しなければならなかったことを意味しよう。

全集に残っている文章としては、さらに、「文芸創作における私の間違いを検査する」一九七五年一月五日、「幾篇かの作品の創作状況を告白する」一九七五年一月七日、及びそれに付随してある「付帯的請求」一月九日が載せられている。

* 「付帯的請求」当我越来越明确地意识到、這一次我的審查、幾乎可以肯定与林彪反党集团的問題有關。我

認識到、一方面、党对我的審査是必要的、正確的、這樣大是大非的問題、怎能不審查清楚！另一方面、我也应当向党保証：在這方面、我是絕對沒有問題的。³³

（「付随のお願い」 私がますます明確に意識したことは、今回の調査はどうやら林彪反党集団との關係を肯定することにあるようだということです。私は次のことを認識しました。ある面で、党の私に対する調査は必要で、正確であったことです。このような大きな是非の問題は、どうしてもつきり調査しないでいられましょう！別の面では、私は党に向かつて保証いたします。私は絶対に問題がありません、と。）

五

郭小川の自己批判書を見ても、彼が「敵対矛盾」になるわけがありえない。ただ彼は江青から嫌われ、憎まれていたがゆえに、不遇な境遇に置かれたとしか言いようがない。それは既に「二」で挙げた黎喜来の文章が語っていることである。ここで確認しておきたいのは、黎喜来の言う調査項目と、郭小川が書いた項目とがまさに対応していることである。五七幹部学校では、前以て郭が調査対象であることをみなの前で宣言したようである。本人にも調査項目などを指示しているので、郭もその指示に沿って書いている。

だが、自己批判書は、私の知る限り、そこに書かれた思考を通過して本人を「解放」さすためのものではなく、何度も書かせて徹底的に自己批判者の矜持も尊厳も失脚させることを意図しているような気がする。批判者がいての自己批判であるから、どうしても批判者の言うとおりにさせねばならない。これがメカニズムというものである。そのために、批判者には絶対の権威が必要で、それは必ずしも権威という抽象的なものではなく、武力と

言うか暴力的装置が必要であった。最もよく機能したと言われている延安の整風運動からして、周囲には武器を持った兵士が取り囲んでいたのである。批判と自己批判の相互の機能も、片方に絶対的な力がなければ成立しないものであろう。その力は、圧力であり恐怖でもあった。それが片方を従順な服従に至らしめる。五七幹部学校が軍宣隊によって運用されたこと自体、私の推測を裏付けるものであろう。そのようなメカニズムにあつて、誠実で真摯に自己批判をするのは、革命意識とか「党」というものへの信頼と言うか、信仰であつたらう。この問題については、今は述べないが、李潔非の次のような判断は郭小川のことを考えるとき、示唆に富んでいると思う。

* 郭小川、当代重要詩人。对于現代詩、我欠少判断力。《重要》云云、不表示芸術質地的評判、僅指其当世影響。在革命意識形態詩歌主旋律下、郭小川詩名頗盛、与賀敬之並峙、他以擅長彼時最主流的政治抒情詩而在五十年代迅速崛起、作品生命力一直延續到《文革》結束後頭二三年、才因《朦朧詩》的興替、詩風大變漸失影響。總之、在政治抒情詩引領詩壇的歲月、作為詩人、郭小川保持着強勢。³⁴

(郭小川は、現在の重要な詩人である。現代詩については、私は判断力を欠いている。「重要」云々というのは、芸術的資質の評価を意味していないで、ただその時勢への影響力をさして言っているのである。革命意識の歌が主旋律であった時、郭小川の詩の名声は頗る盛んであつて、賀敬之と並び称された。彼は当時の最も主流であつた政治抒情詩で五〇年代にすぐさま頭角を現した。作品の生命力はずっと「文革」終結後の二、三年まで続いた。その後、「朦朧詩」の興亡により、詩風も大いに変化したので、漸次影響力を失つた。結局、政治抒情詩が詩壇を牽引した歳月に、詩人として、郭小川は強い勢力を持ったのである。)

郭小川は、上述のように、言葉を直接伝達の機能面で詩を書いた。そういう評価の環境の中で詩を書いてきた。それゆえ、書いた詩の背後の動きや、動機を問題にされて「調査」という軟禁されて自己批判書を書く境遇に長い間処せられたのである。

息子の郭小林の言う次の言葉は、父親が言わなかつた憤懣を一部代替しているだろう。

* 在下校之初、軍宣隊喊的是、執行毛主席指示不能百分之百、要百分之百二十！毛主席說、老弱病残者除外，我們（旧文化部及各協会）全部下去、不能走的抬也要抬下去！（省略）軍宣隊要求別人、百分之百二十、自己却不参加労働、養尊處優、像監工一樣督着、五七學員、從事超強度的体力労働。挿秧時節、大家在田里深彎着腰、上有烈日暴晒、下臨熱水蒸熏、而軍宣隊站在田埂上、雪白的襯衫一个泥点不沾、手叉着腰、厲声呵斥：『不許直腰！』軍宣隊員還帶着少数信得過的『左派』學員到湖里劃船。³⁷

（五七幹部学校に行く最初の時、人民解放軍毛沢東思想宣伝隊が大声で、「毛主席の指示は百分の百ではダメだ。百分の百二十やらねばならない！毛主席は『老弱病残のものには除外する』とおっしゃったが、我々（元の文化部と各協会）は全部行く。歩けないものは担いでも行かねばならない！」と言った。（省略）軍宣隊はほかの他人には「百分の百二十」を要求しておきながら、自分は労働に参加しなかつた。高い地位にあつて恵まれた豊かな生活をし、現場監督者のように「五七學員」が超越した強度の肉体労働をするのを監督していた。田植えのとき、みんなは田んぼに入つて腰を深くまげていた。上からは烈火のような陽射しが降り注ぎ、下からは熱くなった水がムンムンと蒸してきた。軍宣隊はというと、あぜ道に立つて、白いシャツは泥ひとつなく真つ白で、腰に手をあてがい、声を荒げて「腰を伸ばしてはイカン！」と叫ぶのであつた。軍宣隊員の中には彼らが信ずるに足りるとした「左派」の學員を連れて、湖に舟遊びに行

く者もいた。)

右に述べられていることは、エピソードに過ぎないであろう。しかし、日常の生活の一部であることは確かであろう。郭小川を含めた五七幹部学校の生活の一面であり、五七幹部学校を推進していた者(軍宣隊)の日常的な姿勢がわかるエピソードとも言える。

郭小川の悲劇は、物事を平面的次元で捉え、それに対して誠実であったことにあるように思える。詩も政治抒情詩といわれる、直接的な言葉の伝達能力に頼って、他者を鼓舞激励しようとするものであったから、時勢が移れば、その響きは勢いを失うものであった。さらに、詩の字句をいちいち時の政治権力との関係にあてつけられ、時期が移ればその字句をもとに非難される危うさを持っていた。そのことを郭小川の自己批判書は図らずも我々に示しているような気がする。

注

- (1) 李城外編『向陽情結——文化名人与咸寧』上下(人民文学出版社、一九九七年十二月、二〇〇一年二月)、李城外編『向陽湖文化人采風』上下(人民文学出版社、一九九七年十二月、二〇〇一年二月)。
- (2) たとえば、李保昌「幹校文学論——以向陽湖“五七”幹校为中心」、『西南大学学报』(社会科学版)二〇一〇年第一期)でも、「当時の多くの學員がすてにお亡くなりになっている。緊急な取材と記録とが一層重要になっている。李城外の最近の十数年にわたってなされた敬服に値する取材活動の意義は、この意味でも重大である」と触れられている。
- (3) たとえば、二〇〇八年十一月一三日には、胡海珠と万国荣(農婦)との厚情についての話がある。また、王世襄と韓(農民)との交流についての話もある。

- (4) 同注(3)。
- (5) これについては、既に次の本が述べている。楊絳著、中島みどり訳『幹校六記』(みず書房、一九八五年二月)や、陳白塵著、中島咲子訳『雲夢沢の思い出』(凱風社、一九九一年五月)など。
- (6) 李曉祥「我所知道的文化部咸寧“五七”幹校」石雁飛記録整理、『湖北文史資料』総第五十九輯、所収。
- (7) 同注(6)、四頁。
- (8) 二〇一〇年一月三日。このブログは、三月一日から見られなくなった。
- (9) 湖北省。咸寧の南南西五十kmほどにある県。面積一九六八km²。人口約四十七万人(二〇〇四年末)。
- (10) 拙著「過去の残影：咸寧の五七幹部学校について」(『関西大学 中国文学会紀要』第二十八号所収)や、注(13)、及び注(14)の『家族への手紙』の「解題」など。
- (11) 郭小川については、『郭小川全集第12巻「外編」の付録1「郭小川年表(生平与主要創作活動)」のほかに、楊匡漢、楊匡滿著『戰士与詩人郭小川』(上海文芸出版社、一九七八年十月)、張恩和著『郭小川伝』(湖北人民出版社、二〇〇八年一月)などがある。
- (12) 以上は、丸山昇など編『中国現代文学事典』(東京堂出版、昭和六十年九月三十日)に拠る。この項目は、西脇常記氏による。
- (13) 拙著「五七幹部学校について」(『吉田富夫先生退休記念 中国学論集』汲古書院、二〇〇八年三月、所収)。本書六七頁以下。
- (14) この間のことは、謝冰心著、萩野、牧野共訳『家族への手紙——謝冰心の文革』(関西大学出版部、二〇〇八年八月第二版)を参照されたい。
- (15) 文革後期、実権を握った、王洪文(党副主席)、張春橋(政治局常務委員、副総理)、江青(政治局委員、毛沢東夫人)と姚文元(政治局委員)の四人をさす。ここでは、文化面を支配していた江青を念頭において言っている。
- (16) 庄則棟：卓球の選手。一九六一年、六三年、六五年と連続して世界卓球選手権のチャンピオンになった。七四年、江青は彼を体育委員会主任にした。三十四歳であった。七六年には文革中の行為の責任を問われ、四年の禁固刑に処せられた。八五年に離婚し、八七年、日本の帰国子女であった卓球の選手との国際結婚が認められた。
- (17) 于会泳(一九二六〜七七)。山東会泳の生まれ。作曲家、音楽理論家。七五年一月より文化部部長。七六年春、日本に来る。七

六年十月、文革中の行為により隔離審査。七七年八月三十一日、服毒自殺。「智取威虎山」「海港」「龍江鎮」「杜鵑山」など現代革命京劇の音楽を担当。

(18) 葉群（一九一七～七二）。福建省閩侯県出身。林彪の妻。六八年第九期一中全会で政治局委員。七一年九月十三日、夫、息子らとともにモンゴル共和国で墜落死。上将・黄永勝らと交際する。

(19) 周揚（一九〇八～八九）。湖南益陽県の出身。本名、周起応。三六年に国防文学というスローガンを掲げて魯迅らと論争する。三年、延安に行く。四九年、全国文学芸術工作者連合会の副主席、文化部副部長。文革までの文学運動の責任者として、文革初期に逮捕される。七八年釈放され、復活。中国社会科学院副委員長、中国作家協会副主席、中央宣伝部副部長。八五年以後植物人間になった。『周揚文集』がある。

(20) 董固強編著、関智英・金野純・大澤肇編訳・解説『文革 南京大学の十四人の証言』（築地書館、二〇〇九年十二月一日）の二二七頁。

(21) 現在の北京のこと。中華民国政府の首都が南京であったので、今の北京のことを北平と言った。

(22) 趙樹理（一九〇五～六八）。山西省沁水の人。三〇年山西反省院を出獄、抗日戦時期に犠牲同盟会に加入し、再び中共に加入。四年の短篇「小二黑結婚」や「李有才板話」で毛沢東の「文芸講話」の実践とみなされ、四七年「人民文学の旗手」となった。建国後は雑誌「説説唱唱」の主編をつとめる。五五年長編「三里湾」で農業合作化の問題を取り上げた。六二年の大連会議に参加。文革中は、周揚の「唱導兵」だと非難され、革命を裏切った「叛徒」だとされて迫害にあつて死亡した。『趙樹理全集』五巻（北岳文芸出版社、二〇〇〇年九月）がある。

(23) 『郭小川全集』第十二巻の「本巻説明」に、四十余万字ほどの記録が残っているが、約二十五万字だけこの巻に入れたと言う。また、続いて載せてある「為回復党的組織生活進行闘私批修」も「この部分は、作者のノートに基づいている。」と注記がある。

(24) 『郭小川全集』十二巻 外編（広西師範大学出版社、一九九九年十二月、郭曉惠執行編輯）三〇三頁。

(25) 拙著「文化大革命と文学者」（竹内実編『現代中国5 文学芸術の新潮流』岩波書店、一九九〇年一月、所収）。（本書二五頁以下）。

- (26) この辺のことについては、陳徒手『人有病 天知否——一九四九年後中国文壇紀実』（人民文学出版社、二〇〇〇年九月）の中の「郭小川：团伯律的秋天的思索」が詳しい。
- (27) 同注(24)、三〇三—三〇四頁。
- (28) 同注(24)、三一六頁。
- (29) 同注(24)、三一九頁。
- (30) 郭小林「我拯救了我的靈魂——郭小川在五七幹校期間的思想歷程」（『神州』第四十二期、<http://www.cnki.net>）
- (31) 同注(24)、三三九頁。
- (32) たとえば、注(25)で挙げた「文化大革命と文学者」や、拙著「一片の氷心」（『謝冰心の研究』朋友書店、二〇〇九年八月所収）などを参照されたい。
- (33) 同注(24)、三七〇頁。
- (34) 李潔非「来与去——郭小川在作協」（『典型文壇』湖北人民出版社、二〇〇八年八月 所収）一八八頁。
- (35) 賀敬之（一九二四〜）劇作家、詩人。山東省嶧県の人。一九四〇年に延安に行き、魯迅芸術学院に学ぶ。四五年、丁毅らと歌劇「白毛女」を集団創作して有名になる。文化部副部長をつとめた。
- (36) 文革中の一九七〇年代から筆写本などで一部の青年の間で読み継がれていた象徴詩。七八年末『今天』が北京で刊行された。詩の内容が朦朧としてよくわからないと老詩人から言われたことから「朦朧詩」といわれる。北島、舒婷、顧城などが中心。八三年の「精神汚染除去」キャンペーンで、朦朧詩を支持した徐敬亜などが、観点がプチブル個人主義的であるとされ、自己批判を余儀なくされた。
- (37) 同注(30)。

八 文革の本

忙しいときに、また、いけないときに、つい別な本を読みたくなる。我慢できないで読んでしまうからわがままなのであろう。でも、次の四冊は大変面白かった。

1 張新力著『太陽』のもとで——文化大革命下の少女時代』（白帝社、二〇〇七年七月、二八二頁、二〇〇〇+ α 円）
著者は、中国の問題が戸籍にあることを、文革を通じて自己の体験を通して読者に知らしめる。生命の危機と同じに匹敵する問題が戸籍にあると言うことが、初めて具体的にわかる本であった。そういう意味で、著者も言うように、文革が良くわかる本だ。

それにしても、中国共産党がいかに農民の収奪の上に胡坐をかいているか、恐ろしいほどだ。

2 国分良成編著『中国文化大革命再論』（慶應義塾大学出版社、二〇〇三年六月三〇日、三五六頁、三四〇〇+ α 円）
の小嶋華津子「プロレタリア文化大革命と労働者」では、いかに労働者が中華人民共和国成立後も搾取され、低賃金に抑えられているかが説明されていて、驚嘆する。

3 李振霞著・水原清香訳『激動の文革期を乗り越えて——四人の子供を博士に育てた母親の家庭教育論』（文芸社、二〇〇九年一月一五日、一八九頁、一二〇〇+ α 円）は、副題が示すとおり、文革中も家庭で親子が話し合っ

機を通り抜けた話で、いつの世においても親子の会話がいか的大事であるかということに影響づける。

4 董国強編著、関智英・金野純・大澤肇編訳・解説『文革 南京大学十四人の証言』（築地書館、二〇〇九年十二月五日、四〇九頁、二八〇〇+ α 円）

こしばらく、夜寝る前にこの本を少しづつ読んでいた。本を読むとすぐ眠くなるのであるが、この本は時には面白くて、一時二時になることがあった。

オーラル・ヒストリーとって口述歴史の体裁をとっているから、読物として面白いのだ。時には血沸き、肉躍る文革の闘争や、紅衛兵の武闘などがある。南京大学では実際には武闘にまではいかなかったそうで、そんなこともわかる。七十歳を超えた老先生が、トイレを三分間だけと決められて苦しんだり、五〇キロの重荷を担がされたりする話などは、現実にあった話として受け入れられるし、人はこのように残酷になれるのかと感嘆する。こういう非人間的なことをすることが、革命的であると錯覚する心情も、この本によってわかる。「革命的」とは如何に恐ろしいことであるか。これを支える言葉が、毛沢東の「革命とは、客を招いてごちそうすることも無ければ、文章を練ったり、絵を描いたり、刺繍をしたりすることでもない。そんなお上品でおっとりとした雅やかなものではない。革命とは暴力である。一つの階級が他の階級をうち倒す、激烈な行動なのである」という言葉だ。この言葉に押されて、人は「革命的」なことを具体的に示す行為に取り付かれる。人様に見せることを常にしなければ自分の存在が危うくなる。特に、出身が悪いとされてきた者は、一層過激な行為で「革命的」であることを証明しなければならなかった。自らの位置を人々の中で承認させ確認させねばならなかったことがよくわかる。

文革といっても、だから、初めは各自どうして良いのやらわからなかったとある。上からの命令に応じた者が飛び出してきて、その方向にだんだんエスカレートしていくのが運動であることがこの本によってよくわかる。

この本にはそういう個人の状況というものが、個人的な語りからわかるのである。口述歴史として、聞き取りをした董国強氏の方法論がしっかりしていたからであらう。

さらに、数々の事実が明快に示される。拳銃を自製したことや第一次天安門事件といわれる「四五運動」より前の「三・二九」に南京大学で四人組反対のデモをしたことなど。数え挙げればキリがないくらいに発見に、驚きと痛快さがある。貴重な本だ。

でも、知識人に対する紅衛兵や造反派の批判闘争で、非人間的な扱いを受けたことは、すでに幾つかの本や小説で語られていることである。この本の特徴は、二〇〇六年に当事者たちに聞き取りをしたことにあると思える。(十四人の内三人だけが二〇〇七年一月と二月であるが)。

文革が一九七六年に終息したとするなら、ちょうど三〇周年に当たる年であり、当時二十代、三十代であった者はほとんど定年に近い年齢になっている。相当の分別が出来ているのである。文革終息後も数々の思想的ゆれ戻しなどがあり、文革の回憶が必ずしもおおっぴらに話せることであつたとはいえなかつた。そういうことも大事だが、もっと即物的に、たとえば、咸寧の五七幹部学校に下放した者たちは多くが死んでいるのである。だから、聞き取りは早ければ早いほど良いと私は思う。話す事柄が真実であるかどうか、私的に歪曲されているかどうかなどよりも、話として残すことが大事だと思うからである。そういう意味でも、コツコツと粘り強く聞き取りをした董氏に敬服する。

批判闘争の様子や、家进行搜索する話、北京に行く話や北京で中央の領袖と会う話、上海の領袖からの伝達の話など、どれも貴重な話であるが、私には五七幹部学校の話がないことが少し物足りなかつた。代わりに、匡亜明校長が作った文学系の溧陽分校での建設労働や、浦鎮車輛工場での下放労働などがある。このときの非人間的な行為を

したのは造反派の者で、労働者ではなかった。でも、この本から感じられることは、やはり知識を持つ者とそうではない者との違いである。知識を持たぬ者は、知識を持つ者に対して怨念の気持を心の底に持っている、それが噴出した時には、所謂非人間的な行爲となる。ある面では、そういう怨念を噴出させたのが文化大革命であつたといえる。

私の感じでは、こういう怨念がたまることは洋の東西を問わず、また古今とも、どこでもいつでもそうであつた。日本だけで言つても、戦争前のかの「非国民」なるレッテルがそれを証拠立てている。先日、テレビで『母べえ』という吉永小百合主演の映画を見たが、監督の山田洋次は故意に近隣の人々の目を外していた。また子供たちに対する学校での生徒たちの目も外していた。戦争の時の狂乱した思考状況は、庶民なり大衆の妄信的な感情と思考を捉えねば、官憲や特高の悪だけでは意味を成さないだろう。庶民の中にはいつだって良い人や優しい人はいる。しかし、マスとしての庶民大衆はファナチックな狂信的な「非国民」の先導者となるのだ。

この本の多くの人が、そういう妄信的状況を脱している。一時的に妄信的であつたことを白状している者もある。そういう意味で、この本は貴重な真実の書である。だから、私はとても面白い読み物として読んだのである。

若い三人の訳者たちの情熱は、土井二郎さんのアドバイスにより、豊富な写真や地図、そして適切なコラムなどに活きている。とても親切で良い。というのも、二一世紀になると、私のように少しだけでも外から文革を知っている者が、もうほとんどいなくなっているからだ。情熱と親切の本でもあるから、分厚い本も苦にならなかつた。

ただ、少しの誤植がある。すでに気づいていることであろうけれど念のために一部を挙げると、一六頁九行目は「村松梢風」であろう。二二頁七行目は「羅爾綱」のはず。六四頁九行目は「下層中農」であろう。二六三頁写真説明は「求实」であろう。

そのほか、疑問に思うのは、三二六頁三行目の「彼」は「彼女」ではないだろうか。三三三頁七行目の「例え」は例示ではないから、「たとえ」の方がよくはないだろうか。もともとは「仮令」の意味だろうか。また、三九二頁四行目の「劉倩」のルビは、「セイ」という音もなくはないけれど、意味からして「セン」の方が普通ではないだろうか。

なお、三八六頁の「注2」は、「王小二過年」という京劇もあることを指摘した方がよいだろう。

九 福岡愛子著『文化大革命の記憶と忘却』の感想

私は今やつと一冊の本を読み終えた。十月末の学園祭からの休み中に読んでしまうつもりであった日本語の本が、なんとそんなに気軽ないい加減な本ではなく、重厚な学問的な基礎のしっかりした著作であったので、こんなにも時間が掛かった。

もともと構成的な頭脳の持ち主ではない私には、こういう構えた専門の用語を駆使して積み重ねる研究書は苦手である。構成に追いつかない。頭脳の緻密さに欠ける自分の欠陥を知らされるような優れた分析的な本であった。

本の名は、『文化大革命の記憶と忘却——回想録の出版にみる記憶の個人化と共同化』（新曜社、二〇〇八年八月八日、四〇六頁）である。

著者福岡愛子氏は、後ろの著者紹介によれば、東京大学大学院人文社会学系研究科博士課程に在籍中という。一九五〇年生まれである。もともと中国とは関係なく、まして文革とは何の関係もなかったようだが、田壮壮監督の一九九三年制作の『青い嵐』を九四年の四月に見たことが文革に関心を寄せるモチーフの始まりであったと言う。

本書は、「まえがき」序章：「文化大革命の記憶」とは 第一章：「文化大革命の記憶」への接近のしかた 第二章：文革研究の現状と本書の位置づけ 第三章：文革をめぐる言説の変遷 第四章：言説空間の変容——一九八

〇〇九〇年代の文化の政治 第五章：個人記憶の共同化1——『随想録』の場合 第六章：個人記憶の共同化2——『思痛録』の場合 終章：記憶と忘却の政治学 それに「注」「あとがき」「関連年表」「文献表」「索引」より成る。

この大部な研究書をまとめて紹介するのは至難な業であるから、ごく僅かの感想を述べるだけになる。言うべきことは多い。言わねばならぬことも多い。内容の充実した本なのである。

本書は「中国人は文革について語りたがらない」という「文革タブー」言説が本当かどうかを確かめることを大きな目的としている。結論として、そのタブーがないわけではないが、文革の記憶は封印されているのではなく、その語りが複雑化・多様化しているのだということを知り解明した本だといえる。文革の記憶は国家言説との関係や言説空間全体の変容との関係で次のように変化してきたとする。

第一期（一九七〇～八五）は、文革の記憶化は一九八一年の「歴史決議」が代表するような公的権力によって「徹底否定」すべきものとされ、「解説書」の集中出版となって現われた。

第二期（一九八六～九二）は、「四人組打倒十周年」を機に始まった「自由化」と「地方分散化」による出版界の活性化が、「文化大革命十年史」などを出版させた。しかしこれも長続きせず、文革は声高に徹底否定されるべきものではなく、静かに忘れ去られるべきものとなる。「通達」が繰り返されて出され「六四」の抑圧が出版量の低迷を引き起こした。

第三期（一九九三～九八）は、「社会主義市場経済」が導入され、「文革」や「紅衛兵」は商品化しやすいものとされ、歴史ドキュメントや文革中の著名人を回顧する書がシリーズ化されて出た。

第四期（一九九九～二〇〇五）は、文革期の文物を投資対象物件として収集した出版物が現われたり、国家図書

館が文革に関する「学位論文」を検索システムに載せるようになった。

以上のように、時期的に考察されるのであるが、このような変化を、本書では記憶の主体と対象と「動機の語彙」という観点から、「記憶の個人化」と捉えている。引用しよう。

*第二期以降、執筆主体は明らかに個人化した。みずからの体験を綴る回想記というジャンルの出現自体が、個人記憶の対象化の始まりを示していた。しかし、そこに現われた「動機の語彙」は、彼らの個人記憶が、知識人という第三者によつて国家の歴史や世代継承というマクロな枠組みにおさめられ、「歴史的価値のある真摯な内容の回想録」としての正当性を裏付けられて出版されたことを示していた。彼らの語りは「私」というよりは、「私たち」の記憶として「回想集」にまとめられたのである。「私」という一人称の語りを明示化し、個人記憶を主張した単独回想録が出されるのは、第三期になつてからであつた。(三二三頁)

本書では、ついで二人の知識人の回想録を詳しく分析する。一つは巴金の『随想録』であり、もう一つは章君宜の『思痛録』である。ここでは山口守氏と楠原俊代氏の労作が活用される。

著者は、「知識人の回想録」というものが、大衆の参加をないがしろにし、過去を否定することで現状を追認すると言ふ意味において国家言説に加担している、という批判を理解した上での「(三一八頁) 文献選択であつた」という。それは、知識人の回想録が現状追認であるかどうかとか、批判性があるかどうかなどは、そこに書かれたテキストだけで判断できるものではないからである。そういうものはテキストに内在するものではなく、テキストを読み取る者がテキストの意味論的解釈や書き手のコード解説を通じて理解した範囲で意味を持つものだからだとする。

そして、このときにテキストを越えた読みを共有しあう読者共同体が想起されると言う。この立案は見事であると思は思う。さらに、「しかもその共同性も固定的なものではなく、誤読や反発を含む相互作用のなかで、またより長期的には歴史的文脈とともに、変化するのである」ともいう(三一八頁)。

二人の旧世代の知識人が、自虐的までに無残な自己をさらけ出したり、あるいは長男の廃疾という悲惨な個人の記憶をみずから抑圧して、渾身の力で書き上げたのには、過去の教訓を伝えて未来を託すことの出来る読者への確固たる希望があったからだと言証する。彼ら二人が、党や国家との無条件の一体化を拒否する立場を主張し、独立独歩の思考を呼びかけていることを高く評価し、そこには希望があることを指摘しているが、この明朗な作者の考察は私には実に若々しきを感じさせるものであった。

知識人論としても、本書は所謂編集者の存在をアクターとして強く意義付けている。中国社会にマーケットやインターネット・コミュニティが拡大し、政治と文化の一体化構造が揺らぎ、香港・台湾をはじめとする海外市場という「外部」が生まれて、知識人や文化人の独立性が高まった。その中でも知識人と大衆との仲立ちとなるアクターとしての編集者が政治的規制と市場の要請との間で取引するプロとして活躍するであろうという。ここには、公的権力の上からの政策に対する考えられる限りの対策で応ずるアクターに著者は大きな比重を見出しているが、ただこれに関してはまだ十分な事例が不足しているような気がする。

総じて、力量に溢れた快い研究書であった。文革を研究するものにとって必読の書とも言える。大いに教えられ、益するところ大であったので感謝する。

いささかの注文をつけるとすれば、人の読みなどにつけてあるルビは、ただけなものがあった。章詒和は(しょう・いわ)であろう。(しょう・たいわ)では欺くと成ってしまう。私があった時も Zhang Yine と呼んだと思

う。姚文元も(とう・ぶんげん)ではなく、(よう・ぶんげん)であろう。ここ(七三頁)の上海『解報』誌というのは、多分『解放日報』紙のことであろう。魯迅も(リュ・シュン)でよいであろうか？

「文献表2」は大切な貴重なリストであるが、どういう順番で並んでいるのかわからなかった。章ごとにまとめられているのであろうと見当をつけたが、一工夫欲しいところだ。

最後に、この書によって私は「文化大革命博物館」があることを知った。巴金が提唱していたことだけの古い知識しかなかった。だが著者によれば、二〇〇五年一月一日に広東省汕頭市に開館していたのである。民間の手で塔山観光地(塔園)に前年の十二月に建てられたと言う。本書には著者みずからそこに出かけたことと、そこへの参観者から聞き取り調査をした記録がある。貴重な資料とその熱意に心を打たれた。

十 三角帽子雑感

もう二十年近くも昔のことだろうか、あるいはもつと昔かもしれない。記憶が定かでないけれど、確かフランスから竹内実先生が絵はがきをわざわざ送ってくださった。

その絵が、三角帽子を被った男の絵だったから送ってくださったのである。まあい舞台の上に乗せられた僧侶のような男の頭に、長い三角帽子が被せられていた。竹内先生も、ヨーロッパに、三角帽子を被せる風習があることを知って、私にまで絵はがきを送ってくださったのだ。この絵はがきは大事にしようと、どこかにしまつてある。絶対にどこかにあるのだが、今いざという時になると探せないでいる。ドジなことだ。

「たまたま、八月二二日（二〇〇二年）の『毎日新聞』の夕刊を見ていたら、樋口隆康先生が、「残っていたパーミヤーン壁画 急がれる保存と調査」という文章を書いていて、その中で、「ただ残念なのは、三角帽子の人面やキルティムカの鬼面などの泥像は、ほとんど盗まれているようだ。」とあった。アフガンにも三角帽子がある。アフガンは東西文化が混じっているそうだから、三角帽子は中国だけでなく、案外、西に起源があるのかもしれない。私は、この「三角帽子の人面」とはどんなものか大いに興をそそられ、次の「キルティムカの鬼面」とともに、なにかよからぬ感じがした。三角帽子は、何かまがまがしき感じがするのではなからうか。

中国では、いつごろからこのような三角帽子を被せるのか？ 今まであまり気をつけたことはなかった。中国と
いっても北と南では、また東と西とでは、大いに違うであろう。

たまたま読んで、容閑の『西学東漸記』に、彼が幼い時、ミッシヨンスクールから逃亡を企てて捕まり、懲罰を
受けた時のことが書いてあった。広東からの者が集まった、マカオのミッシヨンスクールでの話で、清末（一八三
五、六年）のことだ。

〃次に来たるべきものは懲罰だ。みんな学舎しゆうを引きまわされてから、教室のはしにおかれた細長い机の上
に生徒全員の方にむかつて立たされた。生徒懲罰のしるしである紙のトンがり帽をかぶせられた私をまん中に左右
に女生徒三人ずつが並ばせられたが、私の胸には「逃亡者の親玉」と書いてある大きな紙がピンでとめられた。授
業が終わるまで立たされていたのだから、私の一生のうちでこれがもつとも恥ずべき、つらい思いをした経験だ。〃

（平凡社、東洋文庫一三六。百瀬弘訳）

文革中のつるしあげと、まるで同じであることにびっくりするほどだ。もちろんジェット式や殴打などはないが
……。ただ、これが中国の風習なのか、ミッシヨンスクールの校長であるギユツラフ夫人（ギユツラフ氏はドイツ
人で、奥さんの Mary Newell がイギリス人、とは内田慶市先生の教示）がおこなった、西洋の風習であるのか。これ
は大いに興味がある問題だと思う。

遅子建の短編小説「花瓣飯」（『天涼』第四卷三九ページに王曉露さんの紹介がある）のお母さんは、一九六〇年代
に中国の北の果て黒龍江で、この紙の三角帽子を被らされ、胸に「蘇修特務」と書かれ、町を引き回されたらしい。
私の疑問は、こういう懲罰がなぜ当時は、「かわいそうではないか、やめろよ」という声に出会わなかったのか、
ということである。こういう発想は直ちにプチブルの軟弱なヒューマニズムだとして批判にあったであろうが、そ



図1 13世紀のユダヤ人が被せられた
とんがり帽子

ればかりではなく、こういう批判の形式が土着のものとして定着していたからだと思った。中国の北でも南でも、批判する側もされる側も、当然のように中国の伝統的な風習だから、こういう形態を受け入れたのだと思った。

だが、果たして本当にそうか？ 私が尋ねた沈国威先生も陳正宏先生も、中国の土着の風習であるとは言わなかった。ソ連から来たのかもしれない。或いは、三〇年代の井岡山時代の共産党の批判闘争でおこなわれていたに違いない、ということであった。ジーナ・ロロブリジダとアンソニー・クイーンが出演した映画「ノートルダムのせむし男」で見たとも言われた。西洋の宗教裁判に関係するようである。

たまたま、尾崎ムゲン先生が二〇〇二年十月二日にお亡くなりになり、先生の授業に出たことのある中文の卒業

生が、追悼の文を私のゲストブックに書き込んでくれたが、そこでハンス・ペーター・リヒターの『あのころはフリードリヒがいた』という本に出会った。この本の最後の方に、*「中世には、ユダヤ人は黄色のとんがり帽をかぶらされた！」* シュナイダーさんがあざけるようにいった。*「今度は、黄色の星！ 中世に逆もどりだよ！」*（岩波少年文庫、一九二ページ、上田真而子訳）とあった。

そこで私は、ドイツ文学の浜本隆志先生に、失礼を省みず、ごく早い時期のとんがり帽を被っている図が欲しいとお願いした。浜本先生は、一三世紀のユダヤ人が被せられたとんがり帽子の絵を見せてくれて、さらに、以下のように調べてくださった。

「資料では一二六七年にウィーンでユダヤ人は「とんがり帽子」



図2 左上が魯迅が描いた「無常」

(Der spize Hut) をかぶらねばならないという布告が出され、その色はたいいてい黄色が目立つ色とされています。図はその様子を描いたものです。それより以前の二二五年にはローマの第四回ラテラノ会議で、「ユダヤ人を独自の身なりによつて社会から区別する」決議がなされています。

私は、やはり三角の帽子は他と区別する印であつたことがわかり、大喜びしたが、この図を見た中国の人は、これは三角帽ではないと言う。蓑笠の笠ではないかと言うのだ。

中国で、高い帽子を被っていた像として私の記憶にあるのは、魯迅が描いた「無常」の絵だ。『朝花夕拾』の「無常」および「後記」は、何だか私には混み入っていて、よくわからないのだが、頭に高い三角形の帽子を被っていて、人間界の者ではないことを明示していることははっきりしている。だからと言って、あの世の「鬼」でもないそうさ。たとえ人情味があつても、通常の人様とは区別するために、あんなにも高い帽子を被っているのではないだろうか。魯迅がうれしがって見たという劇中の「無常」は、まさに西洋のピエロのように思える。

「無常」がいつごろから観念された物であるのか、私は知らないが、かなり古くからあつたに違いない。が、魯迅がそうであるように殊更帽子に注目されていたわけではなさそうさ。帽子のことは、陳正宏先生の言によつて、服飾史を調べようとしたが、沈從文の『中国古代服飾研究』（商務印書館香港分館、一九八一年）しか見ていない。その三〇七頁の「一〇五・宋雜劇図」に、「高冠子」を被り、大袖の長袖を着た目薬売りが描かれている。この絵



図3 左が「目薬酸」

は、故宮博物院に収蔵されている二枚の「雑劇人物図」の一枚だそうだ。左の人物は、帽子や衣服、袋などに目玉をいっぴいつけている。その異常さに目を引かれたのであるが、これは当時の有名な雑劇「眼薬酸」であったと説明される。『雑劇の題名に加えられた「酸」の字は、一般に多く貧乏な知識人を嘲笑した意味を持ち、「眼薬酸」も例外ではない。』（古田・栗城訳、三五七ページ）私は、なぜ書生のことを「酸」と言うかという、漬物ばかり食べていたからだ、と、『董解元西廂記』の授業でおっしゃった田中謙二先生が偲ばれた。先生も今



図4 宝寧寺に元代百工百業図、左から2番目が目薬売り

年十一月一七日にお亡くなりになった。

沈従文の説明では、近年発見された山西省北部右玉県の宝寧寺の、元人が描いた『九流百家人物』の中に、『也
有眼科医生、衣著具眼睛形象的、十分近于写真。』とあつて、参考として、その一部の図が載せてある。図には、
確かに着物や帽子に目が描かれているが、三角の高い帽子は被っていない。リアルな商人の像には、目はあつても、
三角帽子ではないのである。沈従文の説明をたどっていくと、まだまだおもしろいことが出てくるようだが、推測
を急ぐと、どうやら、「眼薬酸」という劇の方は、何の売り物屋でも良かったのであろうが、おどけて見せたり、
からかわれたりする人物が必要であつたのであろう。衣服に目が付いていれば、私がぎよつとしたように一層特徴
があつて、引き立つことにならう。そういう人物にこそ、高い帽子を被らせたのではなからうか。

高い三角帽子は、胡蝶蘭氏が『Tianjiang』で指摘してくれたように、「文革」中では「尖尖帽」と言つたよう
だ。高い帽子を被つた人を舞台の上に乗せて、人々はからかいやおどけを楽しんで観たのであろうが、「文革」中
に無理に演ぜさせられる人は、もはやピエロとしての悲しみだけではすまず、生命の危機にまで陥つたのであつた。
そういえば、竹内先生から頂いた絵はがきの男も舞台の上の椅子に座らされていたではないか。